シャワーツリーは唄う

宮本あおば

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シャワーツリーは唄う

【Ｎコード】
Ｎ８４２２Ｗ

【作者名】
宮本あおば

【あらすじ】
ワイキキのブティックに勤める誠は、ある日兄から連絡の取れない日本人、塩田綾の捜索を頼まれる。彼女の自宅や学校、友人をあたって行く内に、奇妙な出会いと共に、知らなかったハワイの暗さを知る。
綾の行方は思いも寄らない形で知らされ、誠は決断を迫られる。

第一章・第一話　「依頼」

目覚ましのアラームが鳴る前に目が覚めた。こんな事は年に一度あるかないかだ。

仕事へ行くためにシャワーを使い、朝食兼昼食を摂っている時、自宅の電話が鳴った。誠は頬張っていたトーストを慌てて飲み下し、IDも見ずに受話器を取った。

「俺だ、元気か？」

驚いた事に、電話の相手は兄だった。

三年前に誠がハワイに引っ越してからは、ほとんど電話して来た事はない。時々メールをよこすが、面倒臭がりの誠は五回に一回も返事を書かない。それでも年の離れた兄の悟は怒りもせず、定期的にメールを送って来る。

「どうしたんだよ、珍しいじゃないか、電話なんて」

内心誠は、何かあったに違いないと嫌な気がした。家族や親族に何かあったか。

時計を見ると、午後一時ちょうどを指している。ということは日本は朝の八時だ。ゴールデン・ウィーク中なのは、悪いニュースに幸いするのだろうか。誠があれこれと思いを巡らせていると、兄は言いにくそうに切り出した。

「あのな、頼みがあるんだよ。取引先のお嬢さんがハワイに住んでるんだけど、最近連絡がないんだってさ。お前、様子を見てくれないか」

良くない知らせを覚悟していた誠は、何か気抜けしたが、同時に頭に疑問符が湧いた。

「ええっと、話がよく見えないんだけど、様子を見るってどういう事？」

ハワイ州の州都、ホノルル市在住の日本人は、様々な「依頼」を受ける事がある。知り合いが行くので案内してやって欲しい、日本

では入手出来ない物を買って送って欲しい、などといった事だ。
誠は日本人に人気のブランド店に勤めているので、知り合いが来た際には、まず社員割引をねだられる。しかし今、兄が言っているのは、社割どころの話ではない。
「昨日、お得意の病院の偉いさん達とゴルフに行ってな。そこの院長先生とは初めてだったんだけど、終わって飲んでる時に娘さんの話になって、ハワイに留学中だって言うから、つい俺も弟がハワイにいるって話をしちゃったんだ。そしたら実は、娘さんから連絡がなくて、心配してると来たよ。それで頼み込まれちゃったんだよ」
珍しく兄は、弱った声を出している。
「連絡が取れないって、どれ位の期間？」
「一か月位だって」
「一か月！」
誠は大声で繰り返してから続けた。
「そりゃあ、ちょっと様子を見るって域を越えてるだろう。領事館と警察に届けるべきだよ」
兄の声は益々弱くなった。
「そういう届け出は、嫌なんだと。まず様子を見て、それからにしたいそうだ。お得意さんだから、俺も駄目ですとは言えなくてなぁ」
誠は困惑した。面倒臭い事をするのは御免なのだが、とても兄に向かっては言えない。兄に感じる引け目は大きい。
「じゃあさ、その娘さんの学校とかアパートに行ってみて、ちゃんと元気でいるかどうか確かめればいいのかな？」
「やってくれるか」
弾んだ声を聞くと、微苦笑が洩れた。めったにしない頼み事をするのを、気に病んでいたらしい。
誠は咳払いを一つした。
「娘さんの名前と住所、電話番号に、あと学校の名前が必要だね。すぐ本人に会えればいいけど、周りの人にストーカーだと思われないように、家族の手紙があるといいかな」

探偵めいた事をしたことはないが、学校は生徒のプライバシーの保護についてガードが固い筈だ。せめて家族の代理人だという文書でも持っていれば、話は違うかと思ったのだ。本人に会った際に、不審者だと思われるのも避けたい。

本式な物はおそらく、公証人の前で署名した物が必要だろうけれど、とりあえずはないよりましだろう。

手紙に書く内容を伝え、まずはサインしてもらったものをＰＤＦファイルで、後から郵便で送ってくれるように頼むと、兄は「娘さん」について知る限りの事を教えてくれた。

名前は塩田綾、三十一歳でハワイには九か月程前に移り、語学学校へ通っていた。ハワイに来る前は、都内の有名女子大を卒業した後、ずっと父親の病院で事務を勤めていたそうだ。

「我が儘で気紛れなところがあるから、不規則な生活が続いてるだけかもと、院長は言っていた。でも心配はしているよ。何たって昨晩話して、今日連絡欲しいって言われたんだから。それと、バイト代出すって言ったのを俺が遠慮したから、俺がお前にバイト代出すわ」

最初から「金を払うからやってくれ」と言わないところが兄らしい。誠は「じゃあすごい額を請求するよ」と、ふざけてみせた。

調子に乗るなよ、と切り返しながらも、

「手間かけさせて悪いな。俺、営業の仕事は好きなんだけど、家族にまで迷惑かけるのは良くないよな」

と、兄は真面目に言った。

一流大学を出て大手製薬会社に勤めた兄は、今は、ある地方支社営業部で管理職を勤めている。

誠は一昨年の、兄の結婚式を思い出した。想像以上に招待客も多く、特に兄の仕事関係が多かったため、恥をかかせないようにするのに骨を折った。

「こういうのも仕事の内だろ、仕方ないじゃないか。俺の事なら気にしなくていいよ。大した手間じゃないんだし」

再び兄は生真面目に礼を言い、電話を切った。直前に、「そうそう、ルームメイトの彼によろしくな」と言い添えたのに、誠は冷やりとした。

受話器を置いて、誠は煙草に火を点けた。「ルームメイトの彼」は仕事に行ってしまっていないので出来る仕業だ。嫌煙家の彼がいる時は、ベランダで吸う約束になっている。

実は彼がただのルームメイトではない、と兄に告げたらどんな顔をするだろう。想像して誠は、煙と共に溜息を吐き出した。

南を向いて開いている窓から、涼風が吹き込んで来る。ビルの間から僅かに見える海が、美しく光っている。

すっかり冷たくなってしまったコーヒーを啜り、誠は兄の事を考えた。

いい大学を出て、大きな会社に勤める兄。自分が、女性と結婚して子供をもうける予定などなく、日本に帰るつもりもない以上、将来、両親の世話等は兄に頼まなければなるまい。

そういった事を考えると、口には出さないが、兄には頭が上がらない。兄からすると、大学を中退して、ハワイに移り住んだ弟に期待するところは、少ないかもしれないけれど。

女性を愛せないからといって日陰者だと思い込むのは良くない、とはルームメイトでボーイフレンドのジェームスが日々、口にする事だが、兄から来るメールに、五回に一回しか返事を書けないでいるのは、そういう理由もある。

でもまあ、と誠は思い直した。

彼に対して引け目を感じる事は、兄が悪いのではない。自分で役に立てる事があるならば、喜んでしようじゃないか。兄の事は、むしろ好きだ。

ポケットに財布と携帯電話が入っている事を確認し、煙草と鍵を握って誠は部屋を出た。エレベーターで駐車場へ降りる。

誠とジェームスの部屋は二十階建てのビルの十五階にある。ホノルル市内のマキキと呼ばれる地区にあり、誠の店があるワイキキに

も、車でせいぜい十分だ。

誠は愛車のニッサン・セントラに乗り込んだ。以前の同僚から買ったものだが、十年落ちの割には故障もなく、いつも機嫌良く走ってくれる。

市街地を東から西へ流れるベレタニア・ストリートを通り、カラカウア・アベニューに車を入れる。中央分離帯の大木が涼しげに影を落とす通りを、真っ直ぐに走る。

アラ・ワイ運河に掛かる橋を越えると、ワイキキだ。道の左右に植えられたレインボーシャワーツリーの花が柔らかに揺れ、華やかな街が目の前に開けてくる。

シャワーツリーの形は、日本の藤に似ていないこともない。小さな花が沢山ふさのように連なって固まりになっている。但し花の色は黄色やピンクだし、一つのふさに違った色の花がついている。

ツル科の藤と違って木が枝を広げているので、藤とは全く印象が異なる。明るい色のふさが風に揺れている様は、花の塊が降っているようにも見え、シャワーツリーという名はそこから来ているのだと思わせる。

今日もその明るい色が、青い空を背景に踊っている。

第一章・第二話　「ショップ」

しばらくカラカウア・アベニューを走って左折し、もう一度左折して駐車場に停める。

誠は車をロックして空を仰いだ。蒸し暑い。

日本の蒸し暑さとは比較にもならないけれど、三年もいるとハワイの快適さの方に体が馴れてくる。

冷房の効いた店内に入るまでの辛抱だと、誠は店へ急いだ。店の従業員出入り口の正面には、四段の短い階段があって、シフト前のセールスや休憩を取る者の憩いの場になっている。

誠が階段まで辿り着くと、先にトレイシーが来てコーヒーショップのアイス・ラテを飲んでいた。トレイシーは日系二世の女の子だ。誠と同じ二十四歳なのも手伝って、仲良くしている。

「はい、あんたの分。今日も忙しいかな?」

足元で汗をかいていた、小さいアイスコーヒーを差し出して、トレイシーが挨拶代わりに言った。誠はありがたく受け取り、財布から紙幣を引き抜いた。

「週明けまではな。何てったってゴールデン・ウィークだからさ」

日本人観光客を目当てとする業界は日本のカレンダーにも敏感だ。ブランド店や旅行業者にとって「ゴールデン・ウィーク」は一種の行事だ。

「忙しいのはいいの。誰と同じフロアになるかってのが問題なの」

毎週変わるスケジュールと同じく、この店では毎日担当フロアが変わる。

一階はメンズと靴に香水、二階はレディスとアクセサリーという振り分けになっていて、日によって一階か二階に分けられる。

同僚達のほとんどは気のいい連中だが、中には必要以上に成績に拘る者もいて、フロアであざとい真似をすることもよくある。そういう同僚と一緒になると、ストレスが溜まるとトレイシーは言って

いるのだ。
「ところでさトレイシー、今日、珍しく兄貴から電話があったんだよ」
トレイシーは勿論、誠の性向を快く受け入れている。頭の上がらない兄がいる事も、話してあった。
「へぇ、珍しいね。お兄さん何て？」
「それが、妙な事を頼まれちまって」
依頼の内容は複雑ではない。誠が説明をするとトレイシーは眉を顰めた。
「一か月っていうのは、普通じゃないわ」
そうだろう、と誠が口に出す前に、通路を来る足音がして、アビーと君代が連れ立って現れた。
「出来る事あったら、言ってね。まず、ジェームスにアドバイスをもらったらいいよ」
小さい声で早口にそう言うと、トレイシーは今来た二人と話し始めた。どこそこの店がバーゲンを始めるようだから一緒に行こうよ、といった女の子同士の話だ。
急に従業員入り口のドアが、内側から乱暴に開いた。
まだタイムカードを押すのには時間があると思っていたのに、ドアから顔を覗かせたマネージャーのポールが、中に入るように言う。
店内がとんでもなく混雑しているらしい。普段は朝のシフトと夜のシフトのそれぞれが始まる前に、ミーティングがあるのだが、今日はそれどころではないようだ。
店の中は確かに大変な賑わいだった。欲しい商品は決まっているのに、店員を上手く掴まえられずに困っている客が大勢いる。
大慌てで二階のロッカールームに入り、自分用の小さいロッカーに携帯電話や鍵を入れてフロアに出た。すかさず客に呼び止められる。日本人の中年男性だった。
昨日はゴルフにでも行ったのだろう。両腕は日焼けで真っ赤になっているが、右手だけが可笑しいくらい真っ白だ。彼は革のハンド

バッグを指差した。
「これ、色はこれだけ？」
人気のモデルだ。フロアにはピンクとシルバーの二色しか展示されていないが、黒と水色もある。本来ならキャッシャーのブースへ行って、自分の担当フロアを確認するのが先なのだけれど、客を待たせる訳にもいかない。
「他に黒と水色がございます。御覧になりますか」
「黒と水色か、このバッグは人気があるんでしょ？」
「はい、それはもう。色も形も可愛いですし、シンプルなデザインですから、どんなお洋服にも合わせ易いんですよ。お土産ですか？」
本来なら聞くまでもない質問だ。中年男性がハンドバッグを自分用に買う訳がない。ただこの後「お幾つ位の方で？」「身長は？」などというセールス・トークに繋げる為には必要なのだ。
ところがこの客には必要なかった。
「うん、そう。じゃあね、全部一個ずつ頂戴」
内心快哉を叫びながら、誠はにっこり微笑んだ。料金の高いゴールデン・ウィークにハワイに来るだけあって、この時期は即決で大きい金額を使う客が多い。
「一色ずつ、合計四つで宜しいですか？」
念のため確認すると、客は軽く「うん」と頷いた。値段はディスプレイの前に表示してある。一つ七百ドル。四つで二千八百ドルだ。そういう額の金をさらっと使える人間は、あまりいないのだろうが、あまりいない人間がよく来るのがブランド店だ。
「かさばるの嫌だから、包装は小さめにね」
恭しくカードを受け取り、丁寧に返事をして、誠は商品のプライスカードとクレジットカードをキャッシュ・ラップと呼ばれるブースに持って行った。
中では会計専門のキャッシャー、アンジェラがおそろしい勢いでコンピューターのキィを叩いている。
プライスカードの列に大汗を掻いているアンジェラを邪魔しない

ように、キャッシュ・ラップを出る時、入って来ようとしたジョージとぶつかりそうになった。

ジョージも誠と同じセールスだ。日本人と白人のハーフで、誠より二つ年上の彼ともよく飲みに行く。今日は誠と同じシフトの筈だから、今出勤したのだとすれば遅刻した訳だ。

「よう兄弟、調子はどうだい？」

Ｅｈ，ｂｒｏ．Ｈｏｗ'ｓｉｔ？本土から来たアメリカ人の客相手には、アクセントのない英語を使うくせに、同僚や友人と話す時のジョージはかなり地元のアクセントがきつい。ジョージの右手を叩くように握って、誠も挨拶を返した。

「絶好調だ。あんた、今来たのかい？」

「馬鹿言え、俺は遅刻なんかしねぇ。下で客に捕まってたのさ。あの野郎、あれこれ試着した上で『考えておく』と来たぜ。俺は今日二階担当だってのに、とんだ時間の無駄だった」

セールスの仕事が長く、少々の事では笑顔を崩さないジョージは、実は口が悪い。客が帰った後なら何を言おうが勝手というのが彼の持論で、しかも彼の喋り方は何処か憎めない処があって、誠はしょっちゅう笑わされている。

半年前にこの会社に勤め始めた際、ジョージと口論になった事があった。

誠が同性愛者だと知ったジョージが「俺の尻を狙うのはやめてくれ」と、からかったのが原因だった。

「うぬぼれが過ぎないか？　それともあんたは、好みじゃない女の子にも一々そうやって、下らない断りを入れてるのかな」

憤然と言い返したのが、却って良かったようだ。不特定多数を相手にしない所にも、ジョージは好感を持ったらしく、以来親しく付き合うようになった。

「あんた達、お喋りしてないで仕事しなさいよ」

ブースの中から飛んで来たアンジェラの声に首を竦め、誠とジョージはフロアに散った。

五時からが夕食休憩だった。
近所のハンバーガーショップで、トレイシーの言葉に従って誠はジェームスに電話をした。
事務所は一応五時で閉まる事になっているが、彼がその時間に退勤できた例はない。彼の仕事は弁護士だ。離婚と家庭問題を専門に扱う法律事務所に勤めている。
事務所の番号ではなく、携帯電話にかけると奇跡的に繋がった。
「どうした？　何かあった？」
声が緊張しているのは、日頃誠が、仕事中に電話する事がないせいだろう。兄からの電話を受けた誠と、同じリアクションだ。
簡単に兄からの頼まれ事について説明し、助言を求めると、彼はまず　Ｐｏｗｅｒ　ｏｆ　Ａｔｔｏｒｎｅｙ　がなければ話にならないと言う。
誠が兄と話しながら思い浮かべた、公証人の前でサインする正式な委任状だ。
「それにしたって本人の代理じゃなくて、家族の代理だから効力は限られるけどね」
「アメリカの書類だから、日本じゃ難しいんじゃないのか？」
「大使館や領事館で公証してくれるだろう。調べて教えてやればいいさ」
政府の公館が、そういうサービスをしているとは知らなかった。
誠は礼を言って電話を切り上げ、携帯電話からインターネットで検索してみた。確かに、東京にある在日本アメリカ大使館や、地方のアメリカ総領事館で、そういったサービスを提供しているようだ。
親切な事に、ダウンロード用のフォームまである。誠は早速その旨を簡単に兄にメールした。兄の住む町から、在大阪アメリカ総領事館まではそれほどの距離ではない。

第一章・第三話　「家族」

一時間の夕食休憩を挟んだ後も、誠は良い客に当たり続け、十一時に店が閉まった時、誠は大まかな計算でも八千ドルは売っていた。

ワイキキのブランド店やブティックの閉店時間は、大概十時か十一時だ。ライバルのアラモアナ・ショッピングセンターが九時で閉まるせいもあるし、夕食後に異国情緒溢れる街をそぞろ歩きする人々の、衝動買いも期待しているだろう。

ディスプレイの小物が盗まれていないかチェックしたり、営業時間中に散らかしたストックルームを片付けたりする閉店作業中に、ジョージが誠の肩を叩いた。

「何か食って帰ろうぜ、お前の奢りで」

誠とは逆に、ジョージは売り上げが奮わなかった。

トレイシーも誘って店の近所のバーでピザを摘み、誠が帰宅したのは一時近かった。ジェームスは眠ってしまっている。

彼は早寝早起きの健康第一人間だ。夏が近くなって、島の南側、ホノルル側の波が高くなって来たので、時々仕事前にサーフィンに行くという恐るべき事をする。

ジェームスは三十二歳で、弁護士としては駆け出しの部類らしいけれど、収入は誠と比べ物にならない。２ベッドルームのアパートの家賃千七百ドルの内、千百ドルを払っても大した負担にはなっていない。

二つあるベッドルームの片方を彼の書斎にして、もう一つに二人で寝ているから、誠はそれで良かろうと思っている。

ベランダに出て煙草を一本吸った後、誠は音を立てないようにしてジェームスの書斎に入った。自分のノートブックパソコンがそこにある。

兄からの返信が入っていた。

塩田綾の住所と電話番号、在籍している学校の名前なども書いてある。それと早速手紙を作成して、院長からサインをもらったとあり、又、連休が飛び石なのを利用して、大阪のアメリカ総領事館まで行く予定だともあった。

それ程に心配ならば、なぜ院長自ら、あるいは家族の誰かが直接ハワイに来ないのだろうか。いくら海外といっても、兄の話に依ると大きな病院らしいし、経済的には何の問題もなくガイドでも雇って彼女が無事かどうか確認出来るだろう。

一瞬不愉快な気分に陥りかけたので、誠は頭を一振りした。

やると決めたのだから、先方の事情はともかく、最低限の事さえすればよい。誠の目的は兄の顔を立てる事だ。

最初に添付されたファイルが、院長からの手紙だった。昼間誠が伝えた通りの文面で、桜井誠は依頼人、塩田勝一の正式な代理であるので、勝一の娘、綾に関しての情報を与えて構わない。

綾のプライバシー、私物に関わる事を許可されており、これに協力する者を告訴する事は決してない、といったものだ。

次の添付のファイルを開けると、誠は口笛を吹きそうになった。

ハワイに来る直前に撮ったものとあったが、塩田綾は美人だった。肩よりも少し長い髪はサイドにレイヤーが入って、裾には僅かにウェーブがかかっている。

はっきりした二重の瞳が印象的だ。通った鼻筋も嫌味過ぎる程ではない。撮影時は三十歳で現在は三十一歳だそうだが、二十代後半に見える。

自分が異性愛者（ストレート）ならば、鼻息も荒く彼女を捜したかもしれないと、誠はおかしくなった。

メールや写真をプリントアウトして、とりあえず出来る事はなくなったので、誠はキッチンへ行ってグラスにウイスキーを注ぎ氷を落とした。

リビングルームへ戻ってマットレスを床に敷き、その上に座る。

神経質なジェームスを起こさない為に、遅く帰った夜はそうして

眠る事になっている。ウイスキーを舐めながら、塩田綾の学校とアパートのどちらを先にするか考えた。

考えている内に眠気が差して来て、どうすると決める前に誠はマットレスに沈んだ。

翌朝はけたたましい目覚まし時計に叩き起こされた。朦朧として起き上がると、針は十二時を示している。昨夜からの懸案事項として、塩田綾の事はちゃんと覚えている。

シャワーを使いながら、誠はまず彼女のアパートに行ってみようと思い立った。簡単に部屋へ入れる訳はないし、当然その前に電話をかけなくてはならない。

万が一にでも電話が通じれば、御家族に連絡を入れて下さいと伝えてお役御免だ。

濡れた体を拭くのもそこそこに、まず自宅にかけてみた。予想通り留守番電話になってはいたけれども、塩田綾の声を聞く事は出来た。英語と日本語の両方で、英語の発音はあまり宜しくない。

昨晩見た写真から想像出来るような、高めの声で甘い喋り方だった。

念のために携帯電話にもかけると、呼び出し音も鳴らずに留守番電話センターに直接つながった。こちらのメッセージは電話会社のものを使用している。

僅かに失望しながらカウチに腰を下ろし、プリントアウトしたメールを読み返す。

彼女の住所の欄を見て、誠は眉を吊り上げた。昨晩は気が付かなかったけれど、わざわざビルの名前が明記してある。塩田家は思った以上に裕福なのだ。

塩田綾の住まいは、ワイキキの東端近くにそびえる高級コンドミニアムだった。昨晩と同じように、なぜ自分なんかに「様子を見る」役が廻って来たものかと頭を捻りはしたものの、誠は深く考えないようにし、出掛ける準備をした。

位置からすると、出勤前に寄ると丁度いいだろう。
若干蒸し暑い感じも残っているが、仕事や調べ物など放り出してビーチに行きたいような上天気だ。
アラモアナ・ショッピングセンターの山側を通る、カピオラニ・ブールバードをのんびり走り、ホノルル市が巨額の費用を投じて建てたコンベンションセンターの角を曲がってカラカウア・アベニューに入る。
塩田綾の住んでいるコンドミニアムはワイキキに入ってすぐ、カラカウア・アベニューから細い道に折れた所にあった。四十階程の巨大コンドミニアムだ。
完全居住型なのだが、ビルの一階と二階に幾つかレストラン等の店舗が入っているので、駐車場内にきちんとビジター用のスペースがあるのは有り難かった。
車を停めた階を三階と確認して、誠はエレベーターで一階に降りた。店舗が並ぶフロアの反対側に住人用のエントランスがあり、インターホンが設置してある。
誠は無駄かと思いつつも、塩田綾の部屋にかけてみた。答えはない。
次なる手段として管理人室を見付けなければならない。誠が住んでいる地味なアパートと違って、管理人室はすぐに分かる場所にはないようだ。
偶々通りかかった警備員に場所を尋ねた。
「ここに住みたいのかい？」

第一章・第四話　「コンドミニアム」

退屈していたのか、若い警備員は誠が質問に答える前に、さらに質問を投げて来た。

日本人だね、その格好は学生じゃないね、何の仕事だい、給料はいいのかい、ここの家賃は高いよ、基本は分譲型だから、まさか買おうってんじゃないよね。

ハワイアンかサモアンと思しき彼は、やたらとにこにこしているので、誠もつい釣り込まれて笑った。

「ここに住むなんて、とんでもない話さ。俺の給料じゃとても。ここに住んでる人を、捜しに来たんだ」

肩を竦めて見せると、彼は深々と頷いた。

「こんな所、住むもんじゃねぇって。高い上に、あんた、出んだよ」

ホーンテッドという単語に誠はぎょっとしたが、彼は笑顔のままで続けた。

「夜中に見回りしてっと、声が聞こえたり変な影が見えたり、な。こないだなんか、でっけぇハワイアンの男が槍持って歩いてたっけ」

「怖くないのかい？」

「俺ぁ、ハワイアンだもの。ハワイアンの幽霊は怖くねぇ。それにあんた、幽霊が出るビルなんか掃いて捨てる程あるしよ。ま、警察官の試験に受かるまでの辛抱よ」

あっけらかんと笑う彼に好感を感じて、誠は手短に事情を説明した。ついでに昨夜プリントアウトした綾の写真も見せた。

「ああ、そりゃ親御さんは心配だね。どれ、おや別嬪さんだ、な。ううん、一度か二度見かけた事があったかもしんねぇ。俺は分かんねぇが、マネージャーなら分かるかも、な。よし、一緒にマネージャーのオフィスへ行こうぜ」

彼の名前はキモといった。

紹介されたマネージャーは、アジア系の初老の男性だった。誠が

説明をするまでもなく、キモが横から早口で伝えてくれた。
「て訳だからよ。ロナルド、助けてあげなよ」
考え込む風にしたマネージャーに、誠は素早くＰＤＦファイルの手紙を示した。
「怪しい者じゃないんです。まだ塩田さんの部屋に入りたい訳でもないですし。ただ部屋は賃貸だったと聞いていますが、どこの不動産会社か分かりますか？　それと最近、彼女を見かけた事はありませんか？」
そう尋ねて、誠は取って置きのセールス・スマイルを浮かべて見せた。威圧の利かない外見でこの笑顔を浮かべると、少なくとも相手の警戒心だけは削ぐ、とジョージに教えてもらった。
それでもマネージャーは、渋い顔を崩さない。
「この人は住人のお父さん？　もしも非常時の連絡先に、名前が入っていれば……」
言いながらデスクの後ろから、台帳を引っ張り出した。
「ええっと、３１０２の塩田さんの非常時連絡先は、学校だね。どこの学校か知ってるんなら、そこに行って聞いてみたらどうだい？　申し訳ないが、最近見かけたかどうかも答えられないね」
首を振りながら言ったが、決して冷たい口ぶりではない。マネージャーの懸念も分かる。
非常時の連絡先に父親の名前がなく、手紙も正式ではない以上、誠がただのストーカーでないと証明できるものがない。始めから期待していなかった分、失望もしなかった。
「学校で聞いてみます」
軽く答えると、マネージャーは腕を組んで言った。
「変な事を言うようだけど、彼女が部屋で亡くなっているって事だけは、心配しなくていいよ。そんな事だったら、とっくに匂いがして、近所から苦情が出てる筈だからね」
そうですね、と言いながらも誠は、その可能性を考えていなかった自分に呆れた。

人が亡くなったとして、近所が匂いで気が付き、部屋を開けてみて騒ぎになり、不動産会社から日本に連絡が入るのに、一か月は掛かるまいと思ったからかもしれなかった。

それまで黙っていたキモがふいに口を開いた。

「そういう事があったのかい？」

「このビルじゃないよ。私が前に勤めていたビルだが、あれは参った。独り暮らしのお年寄りで、気の毒だった。本当に気の毒だったが、本当に参った」

分かるだろう、という口調でマネージャーはまた首を振った。この人の癖かもしれない。

当面、このコンドミニアムで拾える情報はこんなものだろうと判断して、誠は切り上げる事にした。二人に丁寧に礼を言い、万一、塩田綾を見かけたら日本に連絡するように伝える事を頼んだ。

まだ話したそうなキモと駐車場で別れてから、出勤時間が迫っている事に気が付いた。

店は昨日と同じ様な混雑振りだった。

しかし、今日は一階担当になった誠に、昨日ほどのツキはなく、お陰で塩田綾について考えを巡らす余裕もあった。

彼女がどんな性格かまでは、兄のメールにはなかったけれど、ボーイフレンドが出来て彼の所へ入り浸りになり、実家からの連絡と擦れ違い続けている、というのはありそうな話だ。

思い返してみれば、依頼の電話で「我が儘で気まぐれな所がある」と、彼女の父親の評を聞いた。何か腹の立つ事でもあって、わざと連絡を取らないでいるのかもしれない。

実は両親の方も、それが分かっていたから敢えて放置しておいたというのは考えられる。

電話は当然、留守番電話にしたままなのだろうし、インターホンにしても、一人暮らしの女性の事だ。誰かの訪問の予定がなければ、無視するだろう。

もしそういう気楽な状態でないのなら、何かのトラブルに巻き込

まれた可能性が高い。とすれば、誠の手に負える問題ではない。
アパートを当たった次は、学校に行ってみなくてはならないが、明日は土曜で、月曜まで出来る事はなさそうだ。
そこまで考えて、誠は塩田綾について考えるのを止めた。
何かの理由でわざと彼女が両親と連絡を絶っているというのが、至極妥当な所だと思えたからだ。
彼女について考えるのを止めると、あとは仕事の後にジェームスと過ごす時間の事しか頭に残らなかった。
ジェームスと知り合ったのは、同性愛者が集うバーだ。彼の控え目で丁寧な物腰と、すぐにベッドに誘わない所を誠は気に入った。
もっとも、後でジェームスが告白した所によると「本当はすぐにでも誘いたかったさ。でも日本人は初めてだったし、すぐに寝て、すぐにさよならじゃ嫌だったから、慎重になったんだよ」だそうだ。
女の子じゃあるまいし、とは思うけれど、そんな風に気を遣ってくれる彼が好きだ。
身長は誠よりも三、四センチ高い程度だから、百八十センチくらいだが、体重は優に十キロ以上重いだろう。茶色の髪で瞳も茶色。
整った顔立ちというよりは、味のある顔だと誠は常々思っている。
閉店後、スーパーバイザーのティムが「一杯やってかないか」と誘って来たが、誠は丁寧に辞退した。
アパートに帰ると、ジェームスは大量の資料に囲まれて誠の帰りを待っていた。
「お帰り、腹減ってる？　一応夜食を用意してあるけど」
ナイト・シフトの夕食休憩は五時から六時だ。店が終わって閉店作業の終わる十一時半から十二時には、すっかり空腹になってしまう。
「寝る前に食べると太っちゃう」とはトレイシーの言で、誠も気を付けなければと思うのだが、空きっ腹を抱えて眠るのは辛い。まして仕事の後のビールの魅力には抗い難い。
「寄り道せずに帰ったからね、飢え死にしそうだよ」

急いで着替えを済ませてキッチンを覗くと、ジェームスがチキンを温めなおしていた。

彼の自慢のショーユ・チキンだ。ハワイ名物、プレートランチのメニューで最もポピュラーなこの料理はジェームスの自慢だ。

どういう手順で、どういう調味料を使っているのか、料理の下手な誠は分からないが、「俺のチキンはオアフ島一美味い」と彼が得意気なのも、あながち嘘ではない。

続いてジェームスは、冷蔵庫からポケを出した。地元でアヒと呼ばれる鮪の肉を犀の目に切り、玉葱やオゴという海藻と一緒に、醤油をベースにしたたれに漬けて食べる。このたれもジェームスは一家言持っている。

お得意の料理を二品も作った所を見ると、何か良いことがあったに違いない。誠はビールにも手を伸ばした。

「何があったんだい？」

リビングルームのカウチに座って、やわらかいチキンを口一杯に頬張りながら、誠は尋ねた。

「例のケースが解決した、と言いたい所なんだが、実は法廷で争う事になった。また当分忙しくなりそうだからさ。君の好物で前払い」

外の分野の訴訟問題もそうなのだろうが、離婚問題、子供の親権を巡る争いが法廷に持ち込まれる場合は大抵長引く。依頼人からのプレッシャーも大きく、ジェームスのような駆け出しは、一回々々が大事な勝負だ。

「ああそう、仕方がないね。負けねぇでよ」

「君の恋人は無敵だ。ところで昨日のＰｏｗｅｒ　ｏｆ　Ａｔｔｏｒｎｅｙ　の事だけど」

誠が、コンドミニアムに行って来た経緯を、自分の推察も含めて話すと、ジェームスは少し眉を顰めた。

「本当に君の思っている通りならいいが、そうでないようなら関わり合いになっちゃいけない」

「俺が首を突っ込んで危ないような事に、日本人の女の子が関わっ

てる訳がないじゃないか」
誠がハワイに来たのは三年前ほどだ。暫く語学学校へ通ってから、働き出した。
笑い飛ばした誠を、ジェームスは真剣な声で窘めた。
「君はまだ三年しかハワイにいない。確かに本土よりも治安が良いし、犯罪の質もひどくないが、狭い島なんだ。色々な人間が、肩をぶつけ合って生きてる。それだけに人間同士で、思わぬ摩擦が出来るんだ」
忠告には素直に頷いたものの、誠の頭の中には、この後ジェームスを押し倒すことしかなかった。

第一章・第五話　「プレッシャー」

週末の二日間は塩田綾に関する調査は何も出来なかった。

誠は彼女の事を頭から追いやり、ひたすらセールスの成績を上げる事に努めた。

普段の土日は、観光客の出発と到着日になる事が多いため、比較的暇だ。日本へ出発する便は午前中に集中しているから、出発日の買い物は難しいし、また到着したその日に、高価な買い物をする客も少ない。

しかしこの週末はゴールデン・ウィークとあって、いつもとは違い、セールス達は接客に追われた。誠は二日ともナイト・シフトに入ったが、日曜の夕食休憩の際に、思い立ってスケジュール表を覗くと、翌日が休みとあった。時々、こういう事がある。

帰宅後、メールを確認すると兄からのメールで、先日と同様ＰＤＦファイルで正式な委任状、Ｐｏｗｅｒ　ｏｆ　Ａｔｔｏｒｎｅｙが添付されていた。

翌日、せっかくの休日だから遅寝を楽しもうという誠の目論見は、午前九時半には破られた。インターホンのベルに朦朧としながら起き上がって行くと、宅配便の配達人が届け物だと言う。国際速達便で送られて来た小包は、兄からだった。

受け取りのサインをしながら、思わず「早いな」と日本語が出た。

中に入っていた数冊の推理小説と地方の名菓は兄の心遣いで、茶封筒に入った手紙と写真が本題だった。

木曜にＰＤＦで送られて来た手紙の原物に、役所で発行した実印証明書が添付されている。委任状がＰＤＦでも届いた以上は、こちらのオリジナルがあっても、役に立つ事は少なそうだ。

写真は一般的なサイズの物が三枚。いずれも塩田綾の顔がはっき

り分かるものだ。綾の父親からの手紙はなかった。もっとも、貰っても誠は何と返事をしたものか分からない。

同封されていた兄の手紙には、「そういう訳なので一つ宜しく」という意味の事が書いてあった。

寝起きの機嫌の悪さで誠は、「一つも二つもあるもんかい」と独りごちたが、追伸として「経費とお礼を、別便のマネーオーダーで送りました」と書いてあって、誠は気が重くなった。

今は円が高いとはいえ、塩田綾の父親から出た物ならばともかく、先に電話で話した通り、兄が自腹を切ったのだとすれば受け取りたくなかった。大きな金額でない事を、祈るしかない。

誠はもう一本煙草を灰にした後立ち上がった。

すっかり目が覚めてしまった今は、出来る限り早く塩田綾の件を片付けるべく何かしようと思った。昨夜のメールと言い、尻を叩きまくられているような気がする。

塩田綾の学校名は覚えていた。誠が語学学校に通っていた頃、名前を聞いたことがあった。インターネットで検索すると、すぐに立派なウェブサイトが見つかった。場所は、アラモアナ・ショッピングセンターに近いビジネス・ビルだ。

シャワーを使い、軽い食事をして誠はアパートを出た。

ビジネス・ビルという事は有料駐車場があるには違いないが、僅かでも金を使う事が業腹に思えて、誠はアラモアナ・ショッピングセンターに車を停めた。

少し歩いてカピオラニ・ブールバードに出る途中、強い日射しに照り付けられて、誠は舌打ちした。こんな事ならビーチへ行く支度をしてくれば良かった。

しかし、カピオラニ・ブールバードを歩く時には、日射しは気にならなかった。広い道路の両脇には、等間隔で大きな木が植えられている。

両面合わせて六車線の広い道路を、緑のトンネルのように感じさせてしまう木は、モンキーポットツリーという。正確な学名や種類

は知らない。ただ土地の人達はそう呼んでいる。
昔何かの本で見た、バオバブの木にも似ていると思う。
ワイキキまで歩いても大した距離ではないほど近いのに、南国の町という雰囲気は同じでも、カピオラニ・ブールバードの方が静かな感じがするのは、この木のせいかもしれない。
目指すビルのエントランスの前には植え込みやベンチがあり、一目で学生と分かるアジア人達が談笑したり煙草を吸ったりしていた。
エレベーターで六階に上がる。
プレートの名前を確かめ、木製のまだ新しい感じのするドアを開けると、思ったより広く瀟洒な受付になっていた。白いカーペットに、身の丈程もあるベンジャミンの鉢植えが置かれ、隅にはソファーまで置いてある。
タンクトップやTシャツの学生が何人かうろうろしていた。
誠はドアと同様に新しい、木製のカウンターに近寄った。カウンターの中では、事務員の女性が何か書いていたが、気配を察して顔を上げた。おそらく四十代前半のその顔を見て、誠は日本人だな、と思った。
はっきりは説明出来ないが、化粧の仕方や服装が、日系のアメリカ人や外のアジア人とは違うのだ。
「Ｈｅｌｌｏ．　Ｈｏｗ　ｍａｙ　Ｉ　ｈｅｌｐ　ｙｏｕ？」
にっこり笑って言った言葉には、やはり日本語のアクセントがあった。誠も笑顔を返し、日本語で尋ねた。
「日本語でいいですか？」
「あら、日本の方？　入学案内ですか？　今なら入学金割引期間中ですから、お得ですよ」
思わず見習いたくなるような笑顔で、彼女は言った。
日本の景気がなかなか回復しないせいで、留学生も減っていると聞いている。こういった学位の取れない語学学校は、生徒の確保が大変だろう。事務員も外部に良い印象を与え、生徒を獲得すべく頑張っているのかもしれない。

誠が用件を切り出そうとした時、カウンターに若い日本人の女の子が駆け寄って来た。「ユウコさーん」と事務員の女性を呼ぶ。

「あたし、銀行のカード失くしちゃってー。どうしよう？」

ユウコと呼ばれた事務員が、ちらりと誠の方を見たので、誠は気を利かせた。

「どうぞ彼女の方をお先に。時間はありますから」

すみませんと事務員は頭を下げて、ソファーの方に掌を向けた。

「よろしかったら、お座りになって下さいね」

すぐに銀行に連絡するように、と言う事務員に、学生は「何て言っていいか分かんない」とすがった。嫌な顔一つせずに電話をかけ始めた事務員を見て、誠は感心もしたし、幸運だとも思った。

これ程面倒見のいい人なら、塩田綾の事を尋ねてもそっけなく突っ撥ねられまい。

十分程して女の子の用件が終わると、彼女は誠を呼んだ。

「すみません、お待たせしてしまって。それで御用件は何でしょうか？」

「まずこれを読んで貰えますか？　何かのセールスじゃありませんから、御心配なく」

誠は脇に抱えていた茶封筒から、届いたばかりの委任状のプリントアウトを出した。委任状に記載の人物が、自分に間違いない事を示す為に、ハワイ州の運転免許証も差し出す。

長い文章ではないので、彼女が読み終わるのに時間は掛からなかった。

「どういう事なんでしょう？」

大きく見開かれた目が、不安気だ。

「塩田さんは、こちらに在籍中の筈なんですよ。ところが一か月も連絡が取れないので、ご両親が心配して、僕に様子を見るように言って来たんです。塩田さん、最近学校に来ていますか？」

「塩田綾って、あの綾さんの事かしら？」

彼女が少し首を傾げたので、すかさず誠は写真をカウンターに置

いた。「この人です」
「あらそうよ。綾さんどうしちゃったんですか？」
「それは、僕が聞きたい事なんですよ」
苦笑気味に誠が答えると、事務員も釣られて少し笑った。
「そうでしたね。ところで綾さんとはどういう御関係なんですか？」
一瞬迷った末、誠は正直に、自分の兄が塩田綾の父と知り合いだと言った。
「ですから僕は、塩田さんにお会いした事はないんですが、お元気だと分かればお会いする必要もないんです。ユウコさんとおっしゃいましたよね、『綾さん』と呼ぶ位だから、親しいんじゃありませんか？」
出来るだけ真摯に誠は頼んでみた。彼女は一瞬眼球を上に向け、小さく溜息を吐いてから誠に向き直った。
その動作に、誠は何か嫌な予感がした。

第一章・第六話　「学校」

「来てないですよ」
　微笑みをすっかり消して、彼女は小さい声で言った。
「彼女が入校したのは、ええと、去年の夏だったと思うんですけど、最初の頃はそりゃあ真面目に、毎日ちゃんと来てました。仲良しの子もいましたしね。よく授業の前後に、ここでお喋りしたんです。だから私も名前を聞いて、すぐ綾さんだと分かったんですけど」
　塩田綾が学校にあまり来ていなかったとすると、彼女が元気でいるかどうか確認する事は、非常に難しくなる。まさかコンドミニアムの前に張り込む訳には行くまい。
　落胆しながらも、誠は聞くだけの事は聞いておこうと思った。
「最初の頃というのは、どれ位の期間ですか？」
「三か月位かしら。その後は時々、一週間に一度とか、二週間も見かけなかった事がありましたね。最近は全然見ていません」
　一週間に一度では、学校に通っているとは言えないのではないか。案外さらりと言ってのける事務員に、誠は首を傾げて尋ねた。
「学校側では、出席状況によって生徒に連絡するとか、出席を促すという事はしないんですか？」
　事務員はもう一度苦笑した。
「しませんね。普通の大学や専門学校でも、出席するよう学生に連絡することは少ないでしょう？　学期の終わりに、各教員から提出される成績表に名前がなければ、修了証明書を出しませんし、規定を満たしていなければ、次の学期に登録出来ず、つまり学校に在籍出来ないことになっています」
　もっとも過ぎる説明に、誠は頷くしか出来ない。事務員は言葉を継いだ。
「遊びたいだけの子もいますけど、真面目に勉強している子が大半です。実際うちの教員は、優秀な人ばかりを揃えていますし。本当

にやる気のある子しか授業には来ないので、内容の濃い授業になるんです。そうそう、以前、綾さんと仲良しだった子、今はＵＨに行ってる筈です」

ＵＨというのはユニバーシティ・オブ・ハワイの略で、ハワイ大学の事だ。この州立の大学に入るのには、かなり高い語学力が要求されると聞いた。

「そのお友達は、まだ綾さんと連絡取っているでしょうか？」

「多分。外には思い当たらないんです。浅井友子さんっていう子で、彼女の連絡先は、まだファイルに残ってます。規則で桜井さんに教える事は出来ませんが、私が連絡してみますよ。桜井さんの連絡先を頂けます？」

思った通り、この事務員は面倒見がいい。

誠は慌てて財布を取り出した。場違いは否めないが、会社で作ってくれた名刺が入っている。ペンを借りて、名刺の裏に自宅と携帯電話の番号を書き付けながら、質問を重ねた。

コンドミニアムに関して尋ねると、この学校の生徒はほぼ一括して、近所のコーンウェル不動産に周旋していると言う。誠は別の名刺に、その名前を書き付けた。

「あの、塩田さんってどんな人ですか？　僕は会っていないので、聞いておきたいんです」

「美人、なのは写真を見れば分かりますよね。人当たりのいい、優しい人ですよ。入校したての時は、ちょっと影があるかな、と思いましたけど、すぐに明るくなって。でもこの前来た時は、痩せちゃってましたね。この前って、一月以上前でしたけど。もし良かったら、奥のスナックルームにいる子達に聞いてみて下さい。あの子達、授業は出なくても、ここに来て友達とお喋りするのは大好きなんです。最近、綾さんをどこかで見た子がいるかも」

事務員は左手の廊下を指差した。

「この突き当たりを右です」

言われた通りに行くと、突き当たりを曲がる前から、賑やかな笑

い声が聞こえてきた。スナックルームという名の談話室は十畳ほどで、L字型のソファーには、いずれも二十代前半と見える五人の女の子が腰を下ろし、日本語と英語、中国語を取り混ぜて喋っていた。

職業柄、見知らぬ若い女性と話す事は馴れている。誠は例のセールス・スマイルを浮かべながら近付いた。

女の子の内二人が台湾人だった。日本語と英語で誠が簡単に説明をして写真を見せると、彼女達は興味深そうに写真を手に取り、ピンクのTシャツを着た一人が声を上げた。

「あたしこの人知ってるよ。クラブで時々見かけるもん。この学校の人だったんだ」

早くも手応えがあったのは喜ばしいが、こういう時、誠は実感する。本当にホノルルは狭い。新宿や渋谷ではこうはいかない。

彼女の挙げたナイトクラブの名前を頭に叩き込んで、誠は最近見たのはいつか尋ねた。

「いつだったかなぁ、覚えてない」

ボーイッシュに頭を掻くピンクのTシャツに、隣の白いタンクトップが、「思い出したり、また彼女見たりしたら、連絡すればいいじゃない。番号貰っておいてさ」と言って、誠を上目遣いで見た。

思い上がっているつもりはないけれど、店でも時々こういう事がある。

若手俳優のGに似ているなどとも、しばしば言われる。思い過ごしかと思ったが、ピンクのTシャツの反対隣に座っているショートカットが、笑いを堪えているのが明らかだった。

「連絡はいいから、日本に連絡を入れるように伝えてくれるかな？」

ピンクのTシャツが、「いいよー、塩田綾さんね」と承諾したのをしおに、誠はスナックルームを後にした。

一歩外に出るや否や「あんた、見え見えじゃん」と、白いタンクトップをからかう声がした。

受付に戻ってカウンターの事務員に挨拶した。丁寧に礼を言う誠に、彼女はしみじみと言った。

「生徒さんの全員にはしてあげられませんから、私は皆のプライベートには、触れない事にしているんです。でも、こういう事があるとやっぱり心配です。綾さんに会ったら、時々でいいから学校にも来るように伝えて下さい」

もう一度礼を言って誠はドアを潜った。エレベーターで一階に降り、アラモアナ・ショッピングセンターに向かって歩き出す。

歩きながら、今聞いてきた話を頭の中で纏め、誠なりに綾の状況を推理した。

まず、最初の三か月は真面目に通学していた点は、至極当たり前だ。多分学校に来なくなったのは、外に友人かボーイフレンドが出来たと考えられる。あまり感心出来る付き合い方では、多分ない。

おそらく出来たのはボーイフレンドだろう。年齢的な点から見て、彼女は結婚なども考え、両親に告げた際に衝突したのではないか。

両親の気に入る条件、或いは相手ではなかった事が彼女を痩せさせたのだろう。立腹、もしくは懊悩して、連絡を絶っていると誠は考えた。

ふいに昔、日本の新聞で見たことのある広告を思い出した。「綾、許す。連絡せよ」という文面が頭に浮かび、誠は可笑しくなったが、どうもこの場合、自分が三行広告の代わりを果たさなければならないらしいと思い直してげんなりした。

さてこれからどうしようかと、時計を見ると十一時半だった。

日本時間では一日先、つまりゴールデン・ウィーク明けの火曜の朝、午前六時半だ。日本とハワイの時差は十九時間で、日本の夜に電話を掛けようと思うと、ハワイでは深夜になる。

塩田綾のコンドミニアムと学校へ行った事を、兄に報告して、今後はどうして欲しいのか聞きたかった。この時間なら出勤前で、家にいる筈だ。

車の中から電話すると、兄はまだ自宅にいて、誠の報告と推察に唸り声を上げた。

「そうだな、そういう事もあるかもな。あの院長先生は保守的だか

ら、娘がハワイにずっと住みたいとか、アメリカ人と結婚したいなんて言ったら怒りそうだな」

「留学はいいのかい？」

「一年間だけとせがまれたそうだ。とにかく、塩田先生に報告してみるよ。もしお前の言ったような背景があるんなら、何かほのめかすかもしれん」

「この後俺は、何をすればいい訳？　探偵まがいの事は出来ないよ。それに偉い人だったら、外にも一杯コネがあるんじゃないのか？　そういうのを使って、もっと本式に娘さんを捜したらどうなんだろう」

ついつい口調が、愚痴っぽくなってしまった。

「いや、すまん。塩田病院は、実際でかい病院なんだ。コネもあるだろうけど、この町は昔から住んでる人が多くて、皆が知り合いなんだよ。俺なんかに頼んだのは、余所者だし、二、三年で本社に戻る予定だからさ。俺に『喋るな』って言っておけば済むの。土地の人に頼んだら、塩田病院のお嬢さんが、ハワイで連絡取れない、なんて話は音速で広がって、二十年は語り継がれるよ」

言いながらもそういう土地の習慣を、馬鹿にしている風はない。むしろ楽しんでいるようだ。

「今から院長先生に電話するよ。それで掛け直す。今日は休みかい？　あと手紙に書き忘れたんだが、お前のメール・アドレスは向こうに教えてあるから、そっちに何か連絡が入るかもしれない」

誠が曖昧に返事をしている内に、兄は電話を切った。

やれやれと呟いて車を出す。今日はもう塩田綾の事は終わりにしたかった。

何か指示があったとしても、緊急でない限り明日以降にしようと決めて、アパートに戻った。まだ十二時だ。午後はビーチに行って、送って貰った本でも読もう。

古いバックパックに日焼け止めや本を突っ込んでいると、電話が鳴った。兄だ。

「おい、院長先生は、腹立てられるような事はないみたいだぞ。学校の事、柔らかく言ったせいか、それはそんなに驚いていなかったけど、とにかく何としても彼女を見付けて、連絡を入れさせてくれってさ。必要なら、コンドミニアムの部屋に踏み込んでも構わないそうだ」

誠は院長先生とやらの頭の構造がよく理解出来なかった。

そんな風に他人に、娘のプライバシーを見せるのも厭わない程心配なら、なぜ自分でハワイに来ないのだ。

兄を相手に抗弁しても仕方がないし、一度引き受けてしまったものを撤回するのは気が引けたので、誠は短く「分かったよ」とだけ言った。

付け足しのつもりで、ハワイにも興信所はあるよと言っておいた。

第一章・第七話　「メール」

予定を変えるつもりは無かったので、誠はバックパックを掴んでアパートを出た。いつも行くビーチは決まっている。

平日のアラモアナ・ビーチパークは程良く空いていた。

ちょうど干潮時で、浜辺から七、八十メートル先のリーフが、海の上に顔を出している。手前の波打ち際の水はエメラルドグリーンだが、その先は藍色に光っている。リーフを越えた沖の方には高めの波が立ち、サーフィンを楽しむ人の姿も見える。

普段は狭さにうんざりする事もあるハワイ、というかオアフ島だが、こういう景色がいつでも味わえる場所は、世界にもそう多くあるまい。

珊瑚礁までゆっくり泳いでから浜辺に帰り、シャワーで海水を流して、またバスタオルの上に転がる。数回それを繰り返すと眠気が差して来て、読みかけの本を脇に落として眠り込んでしまった。

夢の中で写真の塩田綾が微笑んでいた。

五時になって、仕事を上がるというライフガードに揺り起こされた時には、日焼けで体が痛かった。

車に入れっ放しにしておいた携帯電話を確認すると、塩田文美（ふみ）なる人物からメールが入っていた。「ご迷惑をおかけします」というタイトルからして、綾の母親かと思ったが妹だった。

突然のメールで、すみません。私はお兄さんを通してお願いをしている、塩田勝一の娘で文美と言います。綾は私の姉になります。

このたびは面倒なことをお願いしてすみません。きっと面倒臭がり屋の薄情な家族と思われていることと思います。私も直接ハワイへ行くべきでしょうが、つわりがひどくて飛行機に乗れません。

大変失礼とは思いますが、私からもお願いがあります。

もし姉が問題や悩みを抱えているようでしたら、まず私に連絡を

くれるように言ってください。とにかく日本に帰れ、と言ってもかまいません。

こんなことを書くと、桜井さんは驚かれるかもしれませんが、私は姉が心配で仕方ありません。姉は私と違って美人だし、頭もいいのです。

でも、ハワイに行く前には色々辛い思いをしていました。

うちの町はすごく考え方が田舎で、三十近くで結婚していないのはおかしいし、恥だと言われます。親戚にも近所にも言われていました。

姉はずっと父の病院で事務の手伝いをしていましたけど、仕事場でも言われていたと思います。

姉は器用な人ではないのです。

私もグズですけど、もし姉が何か困っているようなら、まず相談してほしいのです。両親、とくに父には、悩みごとなどとても言えないはずです。

実はこんなメールを出したことも、父には知らせないで下さると、嬉しいのですけど。桜井さんのアドレスは、お兄さんが置いていったメモをこっそり見て覚えました。

父はすごく外聞を気にする人で、自分をまるで、殿様かなにかだと思っているのです。

結婚しても私が塩田姓でいることもそのせいです。

長々と身内の恥を書いてしまいました。ごめんなさい。

でも、どうか姉に会って下さい。そして、もし父に報告出来ないようなことがありましたら、私にメールを下さい。

読み終えて画面から目を離すと、誠はシートの背凭れに身体を預けた。

塩田綾の父親の考えている事は分からないが、人となりは何となく掴めた。文美という妹が、わざわざ綾の性格について書き送って来たのは、気合いを入れて事に当たれという意味だろうか。

ともかく心配なのは分かったし、彼女は綾がトラブルを抱えているだろうと予測している訳だ。

誠は綾の写真を思い出した。

家は金持ちで、美人で、しかも学歴があっても、必ずしも幸福だとは限らない。学校の事務員は、入校した頃は影があったと言っていたが、そういう背景があれば影も出来よう。

もっとも独身でいる事は、本人の気の持ちよう一つだ。少しも悪い事ではないのだし。

綾自身がどの程度それらを気に病んでいたかは、妹のメールからは、伝わって来ない。「辛い思いをしていた」と言っても、状況から妹が憶測しただけかもしれない。

次なる方法として、明日は綾のコンドミニアムを周旋した不動産会社に電話をしようと誠は思った。

アパートに帰ってシャワーを使い、スケジュール表を確認すると、翌日はモーニング・シフトだった。

米を炊いて肉を焼いただけの、ジェームスが見たら眉を顰めそうな夕食を摂り、テレビを眺めながら水割りを舐めている内に、カウチで眠りこけてしまった。

ほんの仮眠のつもりが、気が付くと朝だった。

起こしてくれたジェームスは呆れ果てて笑った。

「俺が帰って来る前から寝ていて、今まで寝てた訳かい。言っておくけど、ベッドで寝た方がいいから起こそうと、そりゃあ涙ぐましい努力をしたんだぞ」

寝付きが良いのと、放って置かれればいつまでも眠るのが誠の体質だが、さすがに頭を掻いた。狭いカウチで寝たせいで体が痛い。

誠がシャワーを使っている間に、ジェームスはさっさと出勤してしまった。余程忙しいようだ。

昨日の事などを話してアドバイスの一つも貰おうと思っていた誠は、僅かに気落ちしたが、時計を見て出勤時間が迫っている事を知り、大急ぎで支度をした。朝食を食べている暇はない。

それでも五分前には、タイムカードを押す事が出来た。
始業前のミーティングの締め括りに、フロア担当を言い渡される。今日は君代と二人で一階担当だ。マーク、トレイシーと雪子が二階。人のセールスを奪うのが生き甲斐のような雪子が一緒なので、マークは早くも諦めが入っている。警備員のジョシュアがやって来て、大きなガラス扉の鍵を開けた。
「まこちゃん、今日は暇かもね。天気いいから皆、ビーチやアクティビティーに行っちゃってるよ」
君代がさらりと言う。
「嫌だな、君代さんが言う事って、当たるんだもん」
これは本当だ。彼女が忙しくなると言えばそうなるし、逆の時も同じなので、誠は、彼女が自分で商売でもすればいいと思う。
「いいじゃん、のんびりしようよ。私、雪子さんと一緒じゃないだけでほっとしてるの」
そういう日があってもいいかと、誠は同調した。
適当にディスプレイの埃を払ったり、専用クリームで革のブリーフケースを磨いたりしながら客を待ったが、君代の言った通り実に少ない。たまに入って来る客は女性物を探していて、二階に誘導するだけで仕事はなくなった。
自然、君代とお喋りばかりをした。
君代は三十五歳で、ハワイに来て六、七年になる。市の環境課に勤務する日系の夫がいる。取り立てて美人というのではないけれど、いつも明るいし、よく思いも寄らぬおかしい事を言って、皆の人気者だ。
確か彼女は語学留学に来て、今の夫と知り合ったのではなかったか。以前聞いた事を思い出し、誠は話題を変えた。塩田綾の事が頭にあった。
「君代さん、ハワイに来たのは学校に行くためだったよね？」
入社した当初は敬語を使っていたが、暫くして君代から止めてくれと頼まれた。

「そうよ、何でそんな事聞くの？」
実はさと、誠は塩田綾の事について話した。今朝ジェームスに、聞いて貰えなかったせいもあるかもしれない。妹からのメールについても喋ってしまった。
君代は兄の住む町の辺りの出身ではないから、問題ないだろう。年齢的にも塩田綾に近い。考えを聞いてみたかった。
「留学に来る人は、それぞれ違うからね」
ゆっくり君代は口を開いた。考えながら言葉を選んでいるようだった。
「でも、彼女の事情は私とちょっと似てる」
「似てるって、結婚してなかった事とか？」
「うん、その頃結婚を考えていた人と、上手く行かなくなった事もあって、自分の人生はつまんないなぁって思ったの」
「仕事は何してたの？　それもつまらなかった？」
「うん、中堅の会社で事務員。うちはその塩田さんみたいにお金持ちじゃないから、そこの所は違うんだけど、やっぱり段々結婚してない事も、周りから言われた。同期の子はほとんど結婚退社しちゃってたし。だから彼氏と駄目になった時には、お先真っ暗だと思った」
誠の顔を見て君代は少し笑ったが、いつもと違って少し寂しそうに見えた。

第一章・第八話　「評価」

「いい年した女が結婚してないってだけで、欠陥品みたいに扱われる場所があるのよ。段々自分でも、自分が無価値な人間に思えてくるのは辛かったわ。それで、えいっと思って留学したの。一応短大は英米文学科だったからさ、語学力を付けて、せめて自分で認められる自分になりたかったのね」

「来て良かったじゃないか。セールスの仕事も好きなんでしょ？」

「それは本当にそう。旦那と会えて、結婚もしたしね。だから、ハワイに住んでいられるんだし。留学に来て、予定通りきっちり勉強して、仕事に役立てている友達もいるわ。ただ、私達は軌道に乗れた部類なのよ。断っておくけど、自慢じゃないからね」

何か言いたい事があるようだ。誠は首を傾げた。「乗れない部類てのは、何さ？」

「えいって日本を飛び出して、でも思うように行かない人達。大学に入ろうとして、試験に合格しなかったり、良いパートナーや仕事と出会いたいと思っても、見付からなかったりね。上手くいかないままで日本に帰りたくはないんだけど、じたばたしている内に、お金やビザが切れてきちゃう」

君代の瞳は珍しく、きつい色に染まっていた。誠の見えない何かを見ているようだ。

「大概の人は、仕方ないから日本に帰るよね。でも、ごくごく一握りの人は、違法で働いたり不法滞在しちゃうのよ。どうしても失敗したまま、日本に帰りたくないってね。自分でも訳が分からなくなっちゃうのかも」

「話には聞いたことがあるけど」

誠が違法でなく働けるのは、アメリカの市民権を持っているからだ。

商社勤めの父が、二十四年前にシアトル在駐だったため、アメリ

カ国内で生まれた誠には自動的に市民権が下りた。
本来ならば二重国籍者は、十八歳になった時点でどちらかを選択しなければならないが、国同士で戸籍の照会などはしない。システムの抜け穴を甘受しているわけだが、誠も立派に、法律違反を犯している。
「無理矢理何とかしようとしても、むしろ悪くなる事が多いよ」
「悪くなった人、知ってる？」
溜息とともに、君代は「うん」と頷いた。
「こっちの大学に入るつもりで来たのに、入学する語学力が身に付かなくてね。『こんな筈じゃない』って焦るばっかりで、お金はなくなっちゃうし。こっそり働き出して、勉強には身が入らないし、悪い薬も覚えて、おしまいには強制送還。最低でも五年か、下手すると一生アメリカには入国出来ないわ。そういう人がいた」
ありそうな話だ。君代は、どこかが痛いような顔で続ける。
「まこちゃんは学校にちょっとしか行かなかったんでしょ？　私は結婚した後もしばらく行ってて、合計二年半位かなぁ、だから色んなケース知ってるよ。でもね、法外な借金とか犯罪に関わったんでない限り、大抵の事は日本に帰る事で解決が着くの」
「そういうものなの？」
「そうよ、まこちゃん、何とかしてその人捜してあげて。きっといい状態じゃないから、捜して日本に帰るように言ってあげなよ。本当は、自分の価値を認めることなんて、海外に出なくたって出来るんだよ」
思いの外に強い調子で君代は言った。今話した事の他にも、思い入れでもあるようだ。
三年ハワイに住んで、随分色々な経験をしたが、まだまだ誠の知らない事の方が多いのだ。「分かった、努力してみるよ」と素直に返事を返した。
君代と話したせいかもしれない。妙に急いた気持ちになって、誠は昼休みに、塩田綾のコンドミニアムを持つ不動産会社に電話した。

塩田綾の代理人だと言って、担当者に電話を回して貰うと、誠が何も言わない内から「家賃の連絡が届きましたか」と質問された。
「家賃と言うと、払ってないんですか？」
面食らいながら発した質問に、相手の男性は甲高い声で答えた。
「あれぇ、その件じゃないんですかぁ。ええっとね、五月分は四月の末迄に払って貰わなきゃなんなかったんです。それがまだなもんだから、手紙も出したし、電話もね、何回もしたんだけど」
怒っている口調ではない。誠は手短にかつ少々一方的に事情を説明した。様々な相手に何度か説明しているので、大分慣れて来た。
「そういう訳で、一応私が正式な代理人なんです。家賃は払いますから、コンドミニアムの部屋を確認させて貰えませんか？　合い鍵はお持ちでしょう」
拍子抜けがする程あっさりと相手は承諾した。
「いいですよ。正式な委任状をお持ちなんですよね。でも、そんなんなら警察に届けた方がいいけどねぇ。それで、いつがいいですか？」
誠は自分のスケジュールを思い出して、明日の昼時ではどうかと提案し、ついでに家賃の金額を聞いた。
「明日の十二時位がいいですね。ええ、家賃は千八百ドルなんですけど、遅延のペナルティーが加算されますから千八百九十ドルですね」
苦虫を噛み潰して、誠は声だけ爽やかに「それでは明日」と電話を切った。
金額はまだ知らないが、兄が送ってくれたという為替は届き次第、現金化することになりそうだ。貯金は多少あるが、千八百九十ドルは痛い。
午後も客の数は少なく、誠は君代や、二階から暇潰しに来たトレイシーと無駄話をして過ごした。
六時の退社時間に、誠はトレイシーに声を掛けた。
「飯、食って帰らないか？」

トレイシーはダイヤモンドヘッドの北側、ハワイ大学の近くに住んでいて、大き目のアパートを二人のルームメイトとシェアしている。両親も島内にいるのだが、高校卒業と同時に離れて住み始めた。

誠の誘いに快諾してトレイシーは、行きつけのバーの名前を出した。

「あそこのピザが食べたいな」

ジョージも含めて三人がよく行くバーは、ワイキキの一番ダウンタウン寄りにあって、アラ・ワイ・ヨットハーバーに近い。バーとは言っても食べ物のメニューも豊富で、ベーコンとアボカドのサンドウィッチや、山ほど具の載ったピザは絶品だ。

バーテンのジェイソンがジェームスの古い友人なので気安い。

車をヨットハーバーの公営駐車場に停めて、二人はバーに入った。まだ早い時間なので店はがらんとしている。ジェイソンに挨拶し、奥の居心地の良いブースに腰を下ろす。

オーダーして三十秒で運ばれて来たビールで喉を潤し、ピザを待つ間、誠はトレイシーにこれ迄の経過を話して聞かせた。

家賃の肩代わりの話をし、金額を口にすると、トレイシーは大きく口を開けた。

「あんた、そんなお金持ってるんだったら、ここは奢りなさいよ」

「馬鹿言え。ちゃんと兄貴を通して請求するさ」

軽口を叩き出したと見えたトレイシーは、一瞬考え込むと大声を出した。

「そうだ、彼女の写真持ってないの？」

「メールの添付ファイルを開ければ見られるけど、なんでさ？」誠にはさっぱり話が見えない。

「彼女凄いお金持ちなんでしょ？　うちの店に来た事あるんじゃない？　見せてよ」

トレイシーが素晴らしい思い付きの様に叫んだので、誠は、はいはいと携帯電話を操作した。

しかし、塩田綾が店に来た事があったら何だというのだ、と思い

直してその事を告げると、彼女は肩を竦めて「ああそうか」と笑った。

「でもさ、もしここ一か月の間に来て、買い物したんだとしたら、元気でいて、経済的にも困ってないって事じゃない」

それは苦しい言い訳だと思いながらも、誠は運ばれてきたピザに噛み付いたトレイシーに、写真を見せた。

一瞥してトレイシーは叫び声を上げた。口に入っていたチーズが、誠の顔まで飛んだ。

「この人、知ってるよ。一時期よく来てたの。お得意リストに載せようかと思ったもん。でも、ちょっとして来なくなっちゃったから、載せなかったけど」

店ではセールス一人々々が自分の得意客リストを持っている。ハワイ在住、あるいはハワイに来る度に来店して、多額の買い物をしてくれる客に住所を聞き、新商品のカタログやセールの通知を送るのだ。

ナプキンで顔を拭い、トレイシーを一睨みして誠は尋ねた。

「四月中の話か？」

「ううん、去年だよ。でもいつも簡単に決めて買ってた。うちの定番商品は幾つも持ってたみたいで、新しい型のとか、日本に入ってないのを買ってた。バッグ道楽だって笑ってたけど、靴もアクセサリーも買ったよ。感じの良い人だったから、よく覚えてる」

「その割に、名前は覚えていなかったじゃないか」

「ふん、あんた、自分のリストのお客だって、覚えてるの？」

そう返されると一言もない。名前まで覚えて顔と一致する客など、ごく一部だ。これが東京やニューヨークなら違うのだろうとは思う。

ここでは、多額の金をブランド品に注ぎ込むのは、そのほとんどが旅行者なのだ。五千ドルの買い物でも、一年に一度ではなかなか名前まで覚えられない。

結局分かったのは、塩田綾はやはり裕福だったという事と、年下のセールスにも丁寧な態度を取る人間だったという事だけだ。

明日、コンドミニアムを訪れてみれば、確実に新しい展開になるだろうと誠は自分を慰め、胸焼けがする程ピザを大量に詰め込んだ。

第一章・第八話　「評価」（後書き）

作中、君代と誠が日本人留学生の動向に関して言及する場面がありますが、実際の日本人留学生の方達の状況ではなく、あくまでも作中人物の知る範囲で、意見であると受け取って頂ければ幸いです。

しかし、君代の台詞に興味を覚えられた方は、お時間がありましたら「呼ぶもの」（これも完全なフィクションです）も、ご一読下さい。

第一章・第九話　「留守宅」

帰宅したのは九時半だった。

ジェームスが誠宛に、自宅の留守番電話にメッセージが入っていると言う。彼の入浴中に掛かって来たそれは、日本語だったので放ってあると付け足した。

ジェームスは「アリガト」と「サヨナラ」位しか、日本語を解さない。さては兄だろうと誠は即座に思った。新たな難題だったら頭が痛いけれど、もしや塩田綾がついに実家と連絡を取ったのでは、という期待感も否めなかった。

半分わくわくしつつ、再生ボタンを押す。聞こえて来たのは意に反して、細い女の声だった。

「あの、私、浅井です。塩田綾さんの事でお話があるとユウコさんから聞いたので、お電話しました。また、電話します」

それだけだ。自分の電話番号は残していないし、非表示でかけて来ている。わざわざ自宅に掛け、しかも自分の番号を残さない所を見ると、警戒しているのだろう。若い女性の事だから無理もない。誠としては、彼女が掛け直してくれるのを待つしかない。

もう一度電話が掛かる事を期待したが、その晩、浅井友子からの電話はなかった。

翌水曜の朝は、例の不動産会社の担当者と会うために早目に起きた。

いつものように出勤の支度をしたが、ユニフォームのスーツでは物々しいかと思い、上半身は黒いポロシャツにした。

昨日電話で聞いた所によると、コーンウェル不動産は塩田綾の学校に近いビジネス・ビルにある。

二日前と同じ様に、誠は車をアラモアナ・ショッピングセンターに停めて歩いた。天気は相変わらず良いが、楽しい事をしに行く訳ではないので、日射しも気に障る。

ビルの十階にあるオフィスは思ったより広かった。受付という程のものはなかったが、近くにいた女性が用を聞いてくれて、奥に通された。

やって来た声の高い担当者は、アジア系の中年の男だった。

「やあどうも、私が担当のグレッグ・ヒラタです。何だか大変ですね。警察には連絡しましたかぁ？」

「今日、コンドミニアムの部屋を見てから決めます。ええと、まずこれが委任状です」

テーブルの上にＰｏｗｅｒ　ｏｆ　Ａｔｔｏｒｎｅｙ を広げると、ヒラタ氏は「なるほどねぇ」としげしげと眺めた。

「これ、コピー取らせてもらっていいですかね？　後で間違いがあるといけないから」

ヒラタ氏は一旦奥へ入り、戻って来た時には、委任状の原本と共に、何か台帳のような物を抱えていた。

「それと家賃をね、お願いしますよ」

内心溜息を吐きながら、誠は持参した小切手帳を取り出した。昨夜は浅井友子から連絡がないかとそればかりを考えて、兄に連絡するのを忘れていた。

ヒラタ氏の言う通りに、受け取り人の欄にコーンウェル不動産と記入する。

銀行口座からの引き落とし制度が一般的でないアメリカでは、個人の小切手がどこでも通用する。最近は光熱費などはインターネットでの振り込みや、クレジットカードの支払いが主だが、こうした小さい会社は小切手が一般的だ。

「あの、領収書下さいね」

最後に小切手にサインをし、そう頼んだ時、いじましく上目遣いになってしまった。

「おお、もちろん、もちろん。大金だものねぇ」

ペーパーワークが終了し、さて出かけるのかと思いきや、ヒラタ氏は少し待ってくれと言う。もう一人同行者がいるのだが、仕事に

区切りが着かないそうだ。

女性の住まいを訪ねるので、男二人では塩田綾とかち合った際、警察に電話されかねないという配慮だ。同行してくれる彼女を待つ間。誠はヒラタ氏と世間話をして時間を潰した。

一般的に、ハワイの人間は人種を問わず話好きだ。警戒心が薄いというか、それを皆、アロハ・スピリットと呼んでいるが、とにかく親しみ易い。

本土の人間は冷たくて、お高くとまっていると多くの人が言うのも、ハワイの環境が普通と思えばそう感じるからだろう。ヒラタ氏も例外ではなく、誠はあれこれと出身や仕事の事などを聞かれた。

誠が塩田綾が部屋を決めた経緯を尋ねると、幸いな事に覚えていた。学校がその時期入校した生徒を、何人か纏めて周旋したのだそうだ。

「あの学校の生徒さんは、金持ちが多いんだが、彼女はひときわだったね。ワンベッドルームで千八百ドルだもの。色々な物件を説明したんだが気に入らなくて、値段は構わないからって言うんであそこにしたんですよ」

これまで誠が集めた情報だと、とにかく裕福という印象しかない。誠が力無く笑っていると、同行の女性が仕事を終えて来た。白人の若い女の子だった。二十歳位に見える。茶色の髪を無造作に束ね、化粧はしていない。彼女はヘレンと名乗った。

帰りにアラモアナ・ショッピングセンターで降ろしてくれると言うので、誠はヒラタ氏の車に同乗した。

ヘレンはあまり事情を説明されていないらしく、矢継ぎ早に質問をし、ついにはヒラタ氏に「ちょっと黙っとけ」とたしなめられていた。

カピオラニ・ブールバードを通り、コンベンションセンターの角を曲がってカラカウア・アベニューに入る。コンドミニアムへ続く細い路地も、ヒラタ氏は馴れた調子で飛ばした。

車を駐車場に入れ、エレベーターで一旦一階へ降りてから、念の

ために インターホンの応答がない事を確認し、居住者用のゲートを専用の鍵で開ける。

ヒラタ氏は淡々と居住者用のエレベーターに乗り込み、ボタンを押す代わりに、ボタンの脇の鍵穴に別のキィを差し込んだ。途端に三十一階を示すランプが点いた。

「すごくいいセキュリティーねぇ」

ヘレンが感心して声を上げる。このシステムだと、そこに住んでいる人間以外は、特定の階に行く事は出来ない。訪問者がある度に、一階まで迎えに出なくてはならない手間はあっても、一階のゲートに加えて二重のセキュリティーだ。

エレベーターが開くと、厚いオレンジのカーペットが敷かれていた。それぞれの部屋の扉は重厚そうな木製だ。３１０２号室の前に立つと、何となく緊張した気持ちになった。

ヒラタ氏が鉄製のノッカーを何度か叩き、「ミス、シオタ」と呼んだが応答はない。

「コーンウェル不動産の者です。開けますよ」そう言いながらヒラタ氏が、ついにドアの鍵を外して開けた時、わずかに手汗をかいているのに気が付いた。

玄関から繋がるリビングルームはひっそりと静まり返っていた。タイル敷きの玄関には、女性物のサンダルが一足脱ぎ捨ててある。玄関脇は天井まである物入れが、木製の格子の扉に仕切られてあった。誠はもじもじと靴を脱いだ。ハワイの家では常識として土足禁止になっている。

足が埋まりそうなカーペットはクリーム色だ。玄関から見ただけでは分からなかったが、リビングルームは実に広かった。十畳どころではないだろう。窓は閉まっていたが、カーテンは半分開いている。

正面に別のビルが建っているのでオーシャン・フロントとは言えないが、ビルの間から充分海が望めた。長方形のリビングルームの中で、窓に近い所にカウチとコーヒーテーブル、テレビセットが置

かれ、玄関に近い場所にダイニングセットが置かれていた。テーブルの上に何冊か本が載っている。

その奥、壁を挟んで玄関の隣がキッチンだった。

「埃が溜まってるよ」

ヒラタ氏がテレビセットの上を指差す。頷いて誠は尋ねた。「ベッドルームは？」

ベッドルームへのドアはリビングの窓側にあって、わずかに開いていた。思い切って押して入る。

微かに体臭のようなものがしたが、格別三人を飛び上がらせるような物はなかった。リビングルームに比べれば狭いが、それにしたって誠のアパートのベッドルームとは、比べ物にならない。

何か殺風景な印象を与えたリビングルームとは違って、さすがにこちらは生活感があった。ウォークイン・クロゼットの扉が開いていて、ベッドに何枚か洋服が掛けてあり、ベッドの足元の洗濯籠にもタオルなどが入っていた。

「彼女、帰っていないのかしら？　どう見ても、当分留守にする予定で家を出た感じじゃないわよね」

ヘレンの感想に、ヒラタ氏と誠はそれぞれ低い声で同意を示した。それでもスーツケースの有無を確認しようと、誠はクロゼットを覗いた。スーツケースを持っていない訳はない。

赤い大きなスーツケースは、確かにあった。外の洋服やバッグも目に入り、誠は違和感を感じて眉間に皺を寄せた。

ハンガーに掛けてある洋服は、いずれも派手なだけで安手の物だ。中には職業を疑われそうな程、短いタイトなスカートもある。そして大した枚数はない。

棚に置いてあるバッグはたった二つ。片方は誠の勤めるブランドの物なので、直ちに新しい型ではないと分かった。もう一つも少々草臥れて見える。

室内に外の物入れがないか事を確認して、誠は玄関に行った。訝しげな顔をする二人には、「ちょっと気が付いた事があって」とだ

け告げた。玄関の収納を開ける。
中にあったサンダルは三足だけで、高級ブランドの物だが古い。誠の頭にある疑念がよぎった。
塩田綾は本当にここに住んでいる、あるいは住んでいたのだろうか。トレイシーが話していた、塩田綾が購入したバッグや靴は何処へ行ってしまったのだ。

第一章・第十話　「写真」

誠が玄関の収納の前で考え込んでいる間に、ヘレンはキッチンを覗いていた。

その彼女が呼んだので、誠とヒラタ氏はキッチンへ入った。ヘレンは牛乳のパックを片手に、少し興奮した声を出した。

「これ、冷蔵庫に入ってたの。賞味期限の日付を見てよ。三月二十八日って書いてあるわよ」

やはりこの一月の間、ここで人が生活していた形跡はないようだ。

「急に思い立って旅行って事も、ないだろうねぇ」

ヒラタ氏が困惑し切った顔をして、腕を組んだ。ベッドルームにライティングデスクがあった事を思い出し、誠は彼を促した。

「パスポートを確認しましょう。あるなら机の抽斗じゃないですか？」

意外なほど塩田綾の持ち物は少ない。捜し物は困難ではなさそうだ。ベッドルームの机の上には、未開封の手紙が何通か載っていた。どれもダイレクトメールで私信ではないが、宛先はたしかに塩田綾になっている。

机の脇の洒落た棚には、写真立てが三つ置いてあった。一番後ろにある大きなものは、六枚の写真が入るもので、学校の教室でクラスメイトや教師と撮影したものばかりだ。

手前の一つには、日本人の女の子と並んで写っている。背景に有名なレストランが入っていたから、すぐに北海岸、ノース・ショアと呼ばれる地域のハレイワの町だと分かった。

綾の隣ではにかんだ笑みを浮かべている女の子は、塩田綾よりも大分若い。これが浅井友子かもしれない。

さらに一番目立つ場所に、麗々しく飾られている写真を見て、誠は内心深く頷いた。塩田綾には付き合っているボーイフレンドがいたらしい。いや、いるらしいと言うべきか。

ポリネシアンとどこかの混血らしい男が、塩田綾の肩を抱き寄せている。整った顔立ちで、美男美女のカップルと言えた。男の顔に触れそうな位置で、塩田綾は誇らし気に微笑んでいる。

屋内だが照明の具合で、ナイトクラブか何処かだろうと誠は判断した。

「この写真立て二つ、持って行ってもいいですか？」

浅井友子に接触する事が出来れば、写真を見せて、このボーイフレンドの事を聞けるだろう。後々、塩田綾に怒られたら謝り倒すまでだ。ヒラタ氏は構わないだろうと答えた。

「でもとにかくね、警察に届けた方がいいですよ。そりゃ、大した捜査はしてくれないだろうけど、やっぱりねぇ」

と付け加える。誠は「今晩、彼女の家族にそう言います」とだけ言った。

続いて机全体を眺め、四段ほど並んだ抽斗に手を伸ばす前に、周辺を見回した。机の上がすっきりしているのは、ノートパソコンを塩田綾が持って出ているからだとすれば、納得が行く。

誠は上から、抽斗を開けてみた。一番上には筆記用具と文房具が入っていた。

二番目には、誠の勤めるブランドの靴箱が入っていて一瞬驚いたが、丈夫で一見お洒落なそれは、書類入れにもなるだろうと、取り上げて開けてみた。

やはりそうだった。学校の在籍を示すＩ－２０や、このコンドミニアムの賃貸契約書の間から、パスポートが顔を覗かせた時には、理由もなく溜息が洩れた。

中を開いて見ると、紛れもない塩田綾の物だ。箱の中にはその他に、電話会社の契約書や銀行の口座開設の書類などが入っていた。

銀行の口座開設の書類があったからには、塩田綾はハワイの銀行を使っていた筈だが、生憎と毎月送られて来るステイトメント、出入の記録と残高証明の類は三段目にも四段目の抽斗にも見当たらなかった。

野次馬根性と言えばそれまでなのだが、誠は彼女が購入したバッグや靴の行方と共に、経済状態も気になった。

机を点検し終わると、あとはバスルームが残るだけだった。

バスルームはベッドルームの奥だったが、キッチンの脇からもドアがあり、来客は住人のベッドルームを覗かずに、バスルームへ行ける設計になっている。手前にシンクが二つ並んだ広い洗面所があり、奥のトイレと風呂場は別れていた。

片方の洗面台には髪の毛が数本落ちて、化粧道具が無造作に置かれてあった。元々そこが定位置としてあるのではなく、使い終わった後に時間がないので、そのままにして行ったという風情だ。

ヘレンが長細いプラスティックの何かを取り上げた。緩んでいたキャップを捻って、中身を引き出してみた所で、誠はマスカラだと分かった。

「固まっちゃってる。やっぱり帰ってないのね」

トイレと風呂場には、特別何もなかった。調べるべき事は調べたので、三人は言葉少なに部屋を出た。

直前に、ヒラタ氏が持っていた紙とペンを借りて、ダイニングテーブルの上に家族に連絡するように伝言を残した。

エレベーターを待つ間、誠は思い付いてヒラタ氏に尋ねた。

「そう言えば、彼女は車を持っていたんでしょうか？　何か聞いていますか？」

「いや、うちの会社ではそういう事まで管理しないから。でも、ここの管理人に聞けば分かるでしょう。住人は各自自分のパーキングがあって、そこに停める車は届け出ることになっている筈だ」

二階まで降り、エレベーターの扉が開いた時、中をよく見ないで乗り込もうとした人物とぶつかりそうになった。相手は慌てて体を引き、それから「オオッ」と声を出した。

警備員のキモだった。

「マトコじゃねぇかい。また例の彼女の事で来たんかい？」

マコトだと訂正してから、誠はマネージャーがオフィスにいるか

どうか聞いてみた。もちろんいるさと言ってキモは、オフィスに向かう三人の後をついて来る。また、暇らしい。

オフィスではマネージャーが、パソコンをいじっていた。

グレッグ・ヒラタが来意を告げ、塩田綾が車を持っていたかどうかを聞く。不動産会社の人間だけに、マネージャーは簡単に教えてくれた。

「そうかい、部屋には帰ってないのかい。警察に届けなきゃいけないだろうよ。ええっと、３１０２号室ね」

渋面を作って先日とは別のファイルを出し、捲り始める。パソコンでデータを呼び出すのよりも、早いのかもしれない。

「あったあった、３１０２号室のパーキング・ストールは１５６で、車はね、赤のＢＭＷ」

マネージャーがそこまで言った時、キモが急に口を挟んだ。「そんな車ねぇよ」

驚いて彼の顔を見ると、キモは得意そうに鼻を鳴らした。

「１５６ったら三階のマウカ・サイドのダイヤモンドヘッド寄りなんだ。俺は一日に何度も見回るんだぜ、そんな車はねぇ。何だったら行ってみな。この一月の話じゃねぇよ。もっとずっと前から……、いや待て、四、五か月前はあったな、そう赤いＢＭＷだったよ」

マウカ・サイドとは、山側という意味だ。地元ではよく使われる、ハワイ語と英語の混成だ。ちなみに海側はマカイ・サイドと言う。

毎日ビルの内外を見回っているキモの言うことだから、間違いがあるとは思われない。とすると、四、五か月前から、塩田綾はあまり部屋に帰って来ていない事になる。

帰って来ても短時間で、だからキモが車を見なかったのではないか。誠は部屋で見付けた写真の男を想い浮かべた。

マネージャーとキモに礼を言い、三人はオフィスから駐車場に向かった。ヒラタ氏の顔が短時間に急に疲れた様に見える。自分もそうなんだろうと誠は思った。

アラモアナ・ショッピングセンターへ向かう車の中で、ヒラタ氏

と誠は簡単に今後の事を話し合った。誠は塩田綾の家族に連絡し、仮に塩田綾が見付からなくとも、部屋を引き払うかどうかを決める。

あの部屋は家具付きで、カウチもベッドも塩田綾の持ち物ではないから、大きな荷物はない。誠が手続きを代行し、荷物を日本に発送する事も可能だ。

「まあ、本人がひょっこり戻って来るのが一番だけど、当面はそちらから、御家族にどうするか聞いて下さい」

部屋の処遇についてそう結び、更にヒラタ氏はぼそぼそと続けた。最初に話した時の甲高い声はどこかに行ってしまった。

「うちの娘も本土の大学へ行ってるんだが、心配だねぇ、こういう事があると」

アラモアナ・ショッピングセンターで降ろしてもらい、腕時計を見るとまだ一時半だった。

第一章・第十一話　「パートナー」

仕事は三時からだ。誠はショッピングセンター内で時間を潰す事にした。

三階の広場に出ているカートでコーヒーを買い、空いていたテーブルを見付けて腰を下す。アラモアナ・ショッピングセンターは全面禁煙なので、煙草は吸えない。

コーヒーを啜りながら、塩田綾の事とその報告について考え始めた。

誠が見た写真からいって一番考えられるのが、塩田綾にはボーイフレンドがおり、ほぼ同棲に近い生活になってしまっているという事だ。服や靴が見当たらない事も説明が着く。

金銭的に余裕のある彼女の事だから、化粧品等は新たに購入したのかもしれない。

ただ腑に落ちないのは、部屋の様子がいかにもちょっとした外出の風になっていた事だ。塩田綾の生活習慣を知らないので何とも言えないが、普通、服をベッドに掛けたままにしたり、冷蔵庫の食品を一月も放置したりするものではない。

もっとも彼女が、そんな日常の些事など気に留められない程、ボーイフレンドとの関係に有頂天になっているのなら話は別だ。

あるいはアメリカ国内で旅行にでも出てトラブルに遭ったか、という考えは、一瞬誠の頭に浮かんで、直ぐに打ち消された。

確かに彼女のスーツケースが一つとは決められないし、国内の旅行なら原則として日本のパスポートは要らない。しかし旅行なら、それこそ部屋をあんな風にしては行かないだろう。

それにパスポートが必要でない、というのはあくまで原則だ。飛行機に乗る搭乗手続きでは必ず身分証明が必要だ。

誠はボーイフレンドの線が濃厚だと、頭の中で再確認し、次にすべき事を考えた。

今日、塩田綾の部屋に入った事を兄に報告し、警察や領事館に届けるかどうかを尋ねる。ついでに彼女を捜す事自体も、続行して欲しいか聞いておこう。部屋代の請求もしなくてはならない。

塩田綾と連絡を付ける事については、まず浅井友子と話すべきだろう。それとも、と考えて誠は写真立てから抜いて、ポロシャツのポケットに入れておいた写真を取り出した。

塩田綾の肩を抱いて笑っている男は、彼女と同じくらいに見える。三十歳前後か。ナイトクラブかどこかで撮ったらしい写真を見ながら、誠は二日前に会った語学学校の女の子達を思い出した。

ピンクのTシャツが言っていた、ナイトクラブに行ってみるのも一つかと思う。

今後の展開を適当に想定した所で、誠はコーヒーを飲み干した。立ち上がって紙コップをゴミ箱に放り込み、ぶらぶらと歩き出した。

その夜も、思いの外に忙しかった。

ゴールデン・ウィークの前半に働き、後半からその後にかけて休みを取る人もいるのだろう。

忙しかった分売り上げも上々で、誠が機嫌良くアパートへ帰ると、ベッドルームからはドアを閉めているというのにジェームスの鼾が聞こえた。これ程の大音量なのは、疲れてストレスが溜まっている証拠だ。もっとひどいと歯ぎしりが加わる。

誠はユニフォームを脱いで、カウチの背に掛けた。

まずベランダに出て一服しつつ、兄に電話する。携帯電話に掛けるとすぐに繋がった。誠からだと分かると、兄は「待ってろ、今すぐ掛け直すから」と一旦電話を切った。電話代の負担も悪いと思っているのかもしれない。全く兄らしい。

誠が塩田綾の部屋の状態を報告すると、兄もさすがに溜息とも唸り声ともつかない声を出した。相手が兄なので、写真の一件も包み隠さず伝えた。

「その男がボーイフレンドかどうかは分からないけどね、どう院長

先生に報告するかは、そっちで決めてくれ」
「そんなこと確証がない限り言えないよ。帰っていないらしいと伝えよう。それと家賃の件は、出して貰う事にしよう。一応領収書をＰＤＦで送ってくれ」
「警察や領事館には、やっぱり届けないのかい？」
兄の返事には僅かに間があった。
「俺も聞いてはみたんだが、届け出ても別に、人員を割いて捜査してくれる訳じゃないだろうって言うんだな。領事館も同じ事だ」
「でも万が一って事もあるぜ。兄貴だから言うけどさ、『実は身元不明の死体になってました』だったらどうすんの？」
昼間思い付いたボーイフレンドの線でなければ、誠の手にはどう考えたって余る。
「そういう事も、絶対ないとは言いきれないかもな。よし、もう一回言ってみよう。ところで、話は変わるがな」
口調ががらりと明るくなった。誠は逆に兄が何を言い出すかと、少し緊張した。
「お前、彼女はいないの？　お前の年だと、結婚てんじゃないだろうけど。この間お袋と話していて、将来お前が、目や、肌の色が違う嫁さんを貰いたいって言っても、いい人なら構わないよねって話になってさ。今度みたいな事があると尚更だよ。俺達はお前の嫁さんがどこの人でもいいから、姿を眩ますような真似はしないでくれよ」
全く自動的に、誠は乾いた声で笑った。自分でも驚く程の流暢さで嘘が流れ出る。
「そりゃ、嬉しいな。実は好きな子はいるんだよ。店の同僚でさ、日系二世なんだ。美人だぜ。時々、飯食いに行ったりしてるんだけど、競争率高くてさ」
兄は全く理解があると思う。しかしそれはあくまで「嫁さん」という範疇の中でだ。肌の色が違って、ついでに「婿さん」だったらどうするのだ。

今の誠には、到底それを言ってのける勇気はない。適当な事を言って誤魔化し、将来家族が遊びにでも来る事があったら、美人で日系二世のトレイシーに芝居を打って貰うしかない。

「そうか、頑張れよ。日系なら日本人を好きになってくれるかもしれないぞ」

弾んだ声で、兄は誠を励ました。

電話を切り、誠はベランダの手すりにがっくりともたれた。

自分が女性を愛するタイプではないと覚り、その為の努力を止めたのは、ハワイに来る少し前だ。

ずっと若い頃には、奥手なんだろうと自分を慰めていた事態が深刻化し、どうにも動かし難い状況になっていた。

変われる筈だ、変わろうという努力はした。女の子とも付き合ってみたし、それなりの行為もしたが、違和感は否めなかった。

もう仕方がないだろうと見切りを付けて、日本を出たのだ。

ゲイでいる事は悪い事ではない筈だ。少なくとも法律には触れない。しかし、世の中にはそこらの犯罪者より質が悪いと思っている人間も大勢いる。

自然の摂理というやつに反するのは大変な悪らしいが、誠にとっては同性に恋愛感情を抱く事が自然なのだ。男と生まれたからには、必ず女性と付き合って結婚し、子供を作るべきだとは到底思えない。

そんな正直な気持ちは、他人に向かってなら言えるのだ。受け入れられなければそれ迄だからだ。「そうですか、俺もあんたなんか嫌いだよ」と言えるからだ。ところが身内はそうはいかない。

同性愛を容認出来なければ、そういう息子なり、弟なりを持ってしまった事で不愉快だろうし、縁を切るの勘当するのと言ったところで、赤の他人と絶交するのとは違う。

誠は頭を振り振り、キッチンへ行った。濃い水割りを作る。

毎日こんな電話があったら、あっと言う間にアルコール依存症になってしまうだろうと考えて、誠は一人肩を竦めた。

日本にいた時は一人暮らしではなかったから、常に嘘を吐きまく

っていて、それが当たり前だったのだ。今はどうだろう。大好きな相手と一緒に暮らして、同僚も友人達も何も言わない。

そういう生活だから、たまの電話が応えるのだ。日本にいた頃の生活を思い返すと、当時はそれ程とも思わなかったのに、実に寒々としていたと感じる。二度と戻れるものではない。

ベランダに出て煙草に火を点ける。

胃にアルコールが染みて来るのを感じながら、塩田綾はどうだったのだろうと考えた。

日本で、妹の言うところの「不器用な」生き方をしていた彼女は、ハワイに来てましな生活を手に入れたのだろうか。

第二章・第一話　「過去」

電話の音で覚醒しながら、誠は二日酔いの頭を抱えた。
昨晩、自分の事や塩田綾の事を考えていたら取り留めもなくなり、つい飲み過ぎた。マットレスからよろよろと立ち上がり、キッチンカウンターの電話を取る。「ハロー」と言った声はひどく掠れていた。
「Ｍａｙ　Ｉ　ｓｐｅａｋ　ｗｉｔｈ　Ｍｒ．　Ｍａｋｏｔｏ　Ｓａｋｕｒａｉ？」
尋ねた声には明瞭な日本語のアクセントがあったが、誠は頭が働かず、うすぼんやりと答えた。
「Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｈｉｍ　ｓｐｅａｋｉｎｇ．　Ｈｏｗ　ｍａｙ　Ｉ　ｈｅｌｐ　ｙｏｕ？」
言ってから店ではないのにと気が付いたが、相手は気にしていないようだ。
「あの、日本語でいいですよね。私、浅井です。一昨日、綾さんの事でお電話しました」
まるで予測していなかった事に加えて二日酔いで、誠は「ああ、ええ」としどろもどろの応対になってしまい、やむを得ず平手で自分の頬を叩いた。音は浅井友子にも聞こえただろう。
「すみません、寝起きなものでちょっとぼんやりしまして。お電話有り難うございます。塩田綾さんの事なんですが、事務のユウコさんからは、どの程度お聞きになっていますか？」
何とかいつものセールス口調が出て来た。
「ええと、綾さんの家族が彼女と連絡が取れないって事と、綾さんが学校に出て来てないって事ですけど」
高めの声だが甲高くはないし、語尾を伸ばす甘ったれた喋り方でもない。しかし、話題のせいか、見知らぬ人間との会話のせいか、浅井友子の声は何処かおどおどしている。

「そうなんです。浅井さん、塩田さんの居場所を御存知じゃありませんか？　彼女はコンドミニアムにも帰っていないようなんです。僕に塩田さんの居場所を言う必要はないんです。御家族に連絡するように伝えて頂ければいいんです」

「それが、あの、私も綾さんにはずっと会ってないんです」

誠の力説するような口調と対照的に、浅井友子は蚊の鳴くような声で答えた。誠としては「そうですか」としか答えようがない。落胆は隠せなかったが、気を取り直して誠は尋ねた。

「分かりました。それでは塩田さんの事でお話を伺いたいので、お時間取って頂けませんか？」

多少躊躇の声を出した浅井友子に、どうしても必要だから、と誠は頼み込んだ。やや間があってから、やっと浅井友子は承知した。

「ＵＨまで来てくれますか？　明日の昼過ぎなら丁度いいんです」

今、浅井友子が通っている、ユニバーシティ・オブ・ハワイだ。

「行きますよ、勿論」

スケジュールは珍しく覚えていた。明日は休みだ。島の反対側だって行ける。浅井友子は構内のカフェテリアの場所を誠に教え、誠は礼を言って電話を切った。

テレビセットの上の時計を見ると、まだ十時だった。

リビングルームのマットレスを畳み、キッチンへ行く。冷蔵庫からオレンジジュースを出して扉を閉めると、マグネットで貼ってある二週間分のスケジュール表が目に入った。

時々目覚ましをセットし忘れる誠を、遅刻させない為に、ジェームスがそうしている。スケジュールは、店の全員の分が一覧になっている。

誠のすぐ上の欄にあるトレイシーのを見ると、今日が休みで明日はナイト・シフトだ。浅井友子に警戒心を与えないように、明日はトレイシーを引っ張って行こうと思った。

浅井友子が塩田綾と連絡を取っていなかったのは意外だったし、落胆もしたが、塩田綾に辿り着けなければ、それはそれで仕方がな

い。出来る限りの事をして、そう報告すればいいのだ。
自分の職業はセールスで、探偵や興信所ではないと開き直る気持ちも出て来た。

明るい気分で仕事に行き、ジョージが同じフロアで一階に回されたのをいいことに、軽口を叩き合いながら仕事をした。それで平穏に一日が終わってくれるかと思ったが、閉店ぎりぎりに異変が起きた。

夜十一時という閉店時間は、世界中のどの都市に比べても決して早いとは思われない。その閉店五分前に滑り込んで来た白人カップルが、長々と店内を物色し始めた。

全く馬鹿々々しい規則だとは思うが、会社では一度客が店に入った以上は「閉店です」と追い出してはならないと言う。

そういう下らない規則を作る側は、いつだって守らなくてよい立場に立っている。

十二時を回ってマネージャーの顔色も変わったが、当のカップルは全く気にした様子もなく、十二時半になってようやく靴二足を決めた。

全スタッフが愁眉を開いたのは、ほんの束の間だった。

彼らは当たり前の顔をして、ディスカウントを要求した。会社にもよるだろうが、誠の勤めるブランドでは、ディスカウントはない。

マネージャーがそれを説明したが、彼らは納得せず、揉めに揉めた挙句、「二度と来ないぞ」というお決まりの捨て台詞と共に、何も買わずに店を出て行った。

後には、口には出せないが「二度と来るな」という雰囲気を滾らせたセールス達が残った。

誠も腹立たしい気分が残っていたし、ジョージとアンジェラがどうしてもと言うので、異例の事だが、ユニフォームの儘でナイトクラブへ繰り出した。やはり怒っていた警備員のジョシュアも付いて来た。

空きっ腹にアルコールを流し込んで、ダンスフロアでヤケのように踊り、ついでにアンジェラに言い寄ろうとした白人を、男三人で小突き回すようにして追い払うと少し気が晴れた。

「さっきの客さぁ」

大分柔らかい顔つきに戻ったアンジェラが、話しかけて来た。

「きっと本当は、あんまりお金持ちでもないんだろうね。バケーションに来て、高級ブティックでちやほやされてみたかったんじゃない？」

「接客は丁寧にしてるよ。普通の営業時間内に来て欲しいな」

「とっくに閉まってる事に気がついたのが遅くて、さっと店から出られなくなったんじゃない？　ディスカウントねだったのだって、本当は買う気がなかったからかもしれない。いつもと違う場所に来て、違うことしたら、わけ分かんなくなっちゃって暴走したんじゃない？」

「そんなもんかな？」

アンジェラの言う事は分かる。旅先にいる解放感から、普段ならしない事をしてしまうというのはありそうな事だ。

「いくつになっても、自分の中に知らない部分って、多分あるわ」

微笑んだアンジェラは、誠よりも精神的に遥かに大人に見えた。

ナイトクラブを出たのは三時過ぎだった。アパートのドアを開けて、誠はジェームスを起こさないように、いつもより静かに行動した。ジェームスは誠が飲酒運転をするのを恐ろしく嫌がるからだ。

疲れてもいたし、すっかり汗臭くなってしまったユニフォームを脱ぎ捨てると、マットレスを敷いて、歯も磨かずに横になった。

眠りに落ちる寸前、思い出して目覚ましをセットしたのは上出来と言えた。

目覚ましの音で目を覚ますと、案外頭はすっきりしていた。

昨夜、飲むには飲んだが、やたらと元気良く踊っていたのでアルコールは抜けたようだ。その代わり無闇と体が汗臭かった。冷蔵庫

に飲む物を探しに行くと、ジェームスからの伝言が目に入った。
「飲酒運転は良くない。君が捕まっても身柄を引き取りには行かないぞ」
昨夜の所業はばれていたらしい。コップ一杯のアップルジュースを一息に飲み干して、シャワーを使った。時計を見ると、十時少し過ぎだ。
浅井友子との約束は十二時半で、トレイシーも待ち合わせ場所に直接来る事になっている。UH迄は車で精々十分だし、キャンパス内で待ち合わせ場所を探す手間を考えても、十二時に出れば余裕で間に合う筈だ。
誠はジェームスの書斎に入り、自分のメールを開けてみた。塩田綾関係で何かメールが入っているかと思ったからだが、思った通り兄からと、塩田文美からの二通が入っていた。
兄の方はともかく、前回のメールに返事を書いていなかっただけに、塩田文美からのメールを開くのは苦痛だった。兄からは、家賃等の経費は院長先生から頂く事にしたとあり、更に警察への届け出はもう少し待つようにとあった。
そういえば、まだ塩田綾の家賃の領収書を兄に送っていなかった。ヒラタ氏にもらった領収書をスキャナーで読み取り、メールに添付して送る。
それだけでもう既に一仕事済ませたような気分になったが、塩田文美からのメールが残っていた。
今回は挨拶程度でも、返事を書かなくてはと思いつつメールを開けると、前回よりも長い文だった。重ねて迷惑を詫び、さらに父親はやはり警察への届け出を嫌がっているとあった後に、塩田綾がハワイに来た理由があった。
前のメールでは、書かなかったことがありました。実は、姉がハワイに行くことになったのには、理由があります。
姉は不倫をしていました。二十六か七の頃からです。

関係が相手の奥さんに知られて、奥さんが家に話しに来ました。
姉は土下座もさせられましたし、念書も書かされました。
相手の方が父の病院に勤めるお医者様だったので、仕事を続けることも難しくなりました。何より父が怒って、しばらく日本を離れることになったのです。
片方だけが悪かったはずはありませんけれど、田舎では何でも女性に不利な考えばかりが通ります。
姉が器用な人ではないと前に書いたのは、そういった事があったからです。姉に会ったら、どうか厳しい事を言わないでやって下さい。
本当なら、こういうことは興信所にでも頼むべきなんでしょう。でも、父は世界中の人が自分を知っていると思うような、変な錯覚を持っています。興信所なんて怪しげで、後で何を言われるか分からないと言うのです。
実際、うちの町では父は有名人なので、そんな錯覚を持ってしまうのでしょう。こういうのを田舎者と言うんですね。
金銭的にも負担をお掛けしたとも、少し聞きました。そういうことまでご迷惑をかけては、あまりに申し訳ありません。父はその点ではけちな人ではありませんし、必要なだけ出すと言ってますので、どうぞ遠慮せずに言ってやって下さい。

第二章・第一話　「過去」（後書き）

本文中、主人公が飲酒・酒気帯び運転を行っていますが、そういった行為を推奨、認可するものではありません。

第二章・第二話　「学生」

塩田綾は、不倫を清算した。驚いたのが半分と、納得したのが半分だった。

学校の事務員が言っていた、「ちょっと影があるかな」という印象は、独身だったからだけではなかった。

なるほど辛い思いをしたに違いない。まして保守的で強い性格の父親の元では、毎日が針の筵だったのではないか。

不倫の相手だという医者に病院を辞めろと言うのではなく、自分の娘に勤めを辞めさせる所に、父親の性格が見えるようだ。

前回のメールでも思った事だが、塩田文美は父親に対して批判的な目を向けている。しかし父親の望むべく「結婚しても塩田姓で」いる所などは、批判的ではあっても反抗はしていないという所だろうか。

どんな人物であれ、姉の捜索を依頼している相手に連絡を取ろうとする点では、常識的だと誠は思った。

さて返事を書く段になると、誠はかなりもたついた。散々書いては消し、を繰り返した後、簡潔に前回返事を書かなかった非礼を詫び、今後も彼女の姉について思い出した事があったら知らせて欲しい旨を申し入れた。

その短いメールを作成するだけで、気が付くと十一時半を廻っていて、誠は、自分は一生オフィスワークは出来ないかもしれないと、将来を悲観した。

数えるほどしか足を運んだことがない、ＵＨまでは車で十分程度だった。

浅井友子に教えられた通り、外来者も停められる立体駐車場にたどり着いたのは良かったが、空きを探して駐車場内を走り回っている内に、時間を食ってしまった。

ようやく陽の当たる最上階に車を停めて、約束のアッパーキャン

パスへ向かった。指定されたカフェテリアは図書館の前にあり、図書館の入り口付近にはすでにトレイシーと浅井友子が立っていた。
「遅いよ、あんたの奢りね。彼女、お昼はまだだって言うから」
トレイシーがむくれて見せた。誠を待つ間に、自己紹介は終えたようだ。
浅井友子が、紺のバックパックで水色のTシャツを着て来ると言った目印を、トレイシーに伝えておいて良かった。
「何でも食ってくれ」と英語でトレイシーに言い放って、誠は浅井友子の方を向き、日本語で挨拶した。
「遅れてすみません。桜井誠です。お時間取って頂いてすみません」
内気そうに笑ったその顔は、塩田綾のコンドミニアムで見付けた写真の顔に間違いなかった。
冷房の効いたカフェテリアに移動して、それぞれランチを買った。遠慮する浅井友子を制し、誠のポケットから財布を取って、トレイシーが支払いを済ませてくれた。
広いカフェテリア内の窓の近くに腰を下ろすと、誠は改めて礼と、予めトレイシーという同席者がいる事を知らせなかった事を詫びた。ついでに持参していた委任状等も見せた。
「いえ、いいんです。女の人がいる方が安心します。あの、実は今、ファイナルの前で、それで電話では失礼しちゃったんですけど、よく考えたら、綾さんが困っているかもしれないのにって反省したんです」
浅井友子はぺこりと頭を下げた。写真ではセミロングの髪を縛っていたが、今はもっと短くなっている。化粧はしていないようだ。
彼女の言うファイナルとは、期末試験だ。五月は学年末で卒業式も行われる。学生にしてみれば、一年の内で最も大切な時期という訳だ。
誠は恐縮したが、双方で詫びてばかりでは話が進まない。食事をしながら、質問に入った。
「学校の事務の方は、浅井さんが塩田さんと一番仲が良かったと仰

ってましたけど、クラスが一緒だったんですか？」
「いいえ、クラスは全然違ってました」
浅井友子は即座に首を振り、誠は首を傾げた。クラスが一緒でなくて、それでどうして親しくなったのだろう。年齢的にも塩田綾が三十一歳、浅井友子は二十歳前後に見える。
もっともクラスが一緒だったとしたら、ＵＨに入学出来た浅井友子と、同レベルの英語力を塩田綾は持っている事になる。その件に関しては、誰にも質問した事がなかった。
誠の疑問を察したのか、浅井友子は続けた。
「仲良くなったきっかけは、学校の紹介で、不動産屋さんにアパートを探してもらった事なんです。私と綾さんは全く同時期に入学して、手続きなんかも重なって。来たばかりって心細いでしょう？話をするようになって、一緒に不動産屋さんにも行ったんです。私は学校の近くの安い所で、綾さんは、知ってますよね？　私が『いいなぁ』って言ったら、すぐに『遊びにおいでよ』ってことになったんです」
見知らぬ土地に来たばかりの者同士なら、そういうものだろう。事務の女性、ユウコから聞いてはいたが、誠は確認した。
「それは、去年の八月の初めですね？」
丁度ジュースのストローを口に運んでいた浅井友子は、軽く頷いた。それまで黙っていたトレイシーがふいに口を開いた。流暢な日本語はネイティブ並だ。
「塩田さんはアウトゴーイングな性格の人でした？　うちの店に来た時は明るい人だと思いましたけど」
聞かれて浅井友子は少し考える様子をし、言葉を選ぶようにして話し出した。
「アウトゴーイングというか、そうしようと努めているみたいでした。自分でもそう言ってたし。日本にいた時は、小さくなって暮らしてたんですって。信じられないでしょう？　綾さんみたいに美人で、お家もいいお家で、いい大学出ていて。私、よくその事を言っ

てたんですけど、綾さんは私の事を『若いからいいね』って、それ
ばっかり。でも、私の引っ込み思案を良くないって言ってくれたし、
自分でも積極的に人の中に入ろうとしてたと思います」
小さくなっていたというのは、おそらく妹のよこしたメールにあ
った、年齢の事と不倫の関係によるものに違いない。ハワイに来て
からは、違った生き方をしようとしていたようだ。
「じゃあ塩田さんとは、ずっと仲が良かったんですね？」
単に続きを促すつもりの質問に、浅井友子は、はいと答えそうに
なって取り消した。
「あれ？　私、何だか綾さんと、長い間親しかったような気がして
たんですけど、違ってたみたいです」
自分でも今、気が付いたという表情だ。
「一時期、毎日一緒にいて、よく綾さんの家にも泊まりに行ったか
ら、長く感じたのかもしれません。二か月ちょっとの事だったんで
す。十月の中頃から、私はＵＨに入る為の小論文なんかで忙しくな
って、ＴＯＥＦＬの点数は取ってあったんですけど、とにかく勉強
に力を入れるようになったし、綾さんは、その、ナイトクラブとか
によく行き始めたみたいで。十一月になった頃には、学校の方はあ
んまり熱心じゃなかったと思います。でも二日か三日に一度は、顔
を出すだけでも来てました」
「浅井さんは、ナイトクラブには興味がなかったんですか？」
トレイシーの質問に誠は、どう見ても彼女はそういった方向に興
味はなさそうだが、と内心呟いた。ファッショナブルな物に無縁だ
というのではない。
浅井友子は確かに、塩田綾程の華はないが、整った顔をしている
し、着飾れば人目を引くに違いない。ただ見るからに真面目そうで、
加えて内気そうだ。
「私、その頃はまだ二十歳だったんです」
はにかんだように浅井友子は笑った。笑顔はなかなか可愛い。
こちらのナイトクラブでは、カレッジ・ナイトと称する特別な夜

でない限り、入場は二十一歳以上と制限されている場所が多い。アメリカでの飲酒年齢は二十一歳だ。ナイトクラブの入場も、アルコールの購入も、身分証明書の提示を要求される。

「今でも好きじゃありません。その頃は特に、絶対にＵＨに入らなくちゃって必死でしたから。うちは普通のサラリーマンで、無理して海外に出して貰ってるので。でも、入ったら付いて行くので必死です」

もう一度恥ずかしそうに笑うと、ジュースを一口飲んで浅井友子は黙ってしまった。黙々と目の前の皿をつついている。つついているだけで大して口に運んでいない。

「どうかしました？　何か思い出したんじゃありません？」

トレイシーに来て貰って本当に良かった。

誠は彼女が、何か言いにくい事に思い当たったと推測はついたが、どう聞き出してよいか見当も付かなかった。

「私、自分が薄情だなぁって思って。ずっと綾さんに電話してなかったし、行方不明って聞いて、でもファイナルの事を考えちゃったり」

細い声で浅井友子はトレイシーに向かって言い、トレイシーはカウンセラーの様な口振りで慰めた。

「でも、こうして時間を取ってくれたわけですし、塩田さんからも電話はなかったんでしょう？」

「そうですけど、私、入学のお祝い貰ったりしたのに、すっかりそのままになっちゃって、失礼な事をしちゃいました」

誠は首を捻った。そう言えば、浅井友子は一体いつＵＨに入学したのだろう。学年が始まるのは八月の下旬の筈だ。

「ちょっと聞いてもいいですか？」と誠が口を挟んで疑問を口に出すと、トレイシーは小馬鹿にしたような顔をした。

「あのね、大学には一月入学のシステムもあるの。浅井さんは今年の一月に入学したのよ」

無知さ加減を浅井友子に詫びつつ、誠はトレイシーの言葉を受け

て、もう一度質問した。
「入学のお祝いって事は、一月に塩田さんに会ったんですね？」
「そう、それからは会ってません。その時に、何か綾さんすごく変わったな、って思ったんですけど、行方が知れなくなってる事と、関係あるかどうかは……」
誠とトレイシーは同時に「変わった？」と聞き返した。勢いが良すぎたせいかもしれないが、浅井友子は驚いたように目を開き、一瞬遠くを見てからゆっくり話し出した。

第二章・第三話　「変化」

「会ったばっかりの頃も、綾さんはすごく親切だったんですけど、時々困りました。宿題を手伝ってあげただけなのに、ブランド物のお財布を買おうとしたり、外食するにも、何百ドルもするレストランに連れて行ってくれたりしたんです。お金を使う感覚が全然違ってて……。

綾さんがよくナイトクラブに一緒に行ってた人達は、お金出して貰うの、気にしない人達みたいでしたけど。

でも一月に、すごく久しぶりに電話をくれて、入学祝いをくれるって。高い物じゃないから、って言うから、素直に受け取る気になったんです。会った時、前よりもずっと静かな感じでした。プレゼントもハワイアンのCDで、知ってます？」

浅井友子の挙げたアーティストの名前を誠は知らなかったが、トレイシーは軽く頷いた。

「そうだ忘れてましたけど、綾さん、その時、車持ってなかったんですよ。彼氏が迎えに来てました」

さり気なく付け足した言葉に、誠は漸く当初の予定の質問を思い出した。わざわざ会ったのは、写真を見てボーイフレンドの確認も頼むつもりだった。

「やっぱりボーイフレンドがいたんですね。それはこの人じゃありませんでしたか？」

素早く写真を出して見せたが、彼女は弱々しい笑みを浮かべて首を振った。

「ごめんなさい。私、その彼には会っていないんです。ただ、十二月に学校がクリスマス休みに入る前に、彼氏が出来たとは聞いていたんです。本当に嬉しそうでした。サーファーだって言ってたから、ハワイアンのCDも、彼の影響かなと思って。CDを貰った時は、迎えが来ると聞いただけで、私は彼に会わずに帰りました」

「そうですか、他に塩田さんが彼について、何か言っていた事はありませんか？」

眉間に皺を寄せ、宙を睨んで浅井友子は暫く黙った。

トレイシーが素早く誠に「車の事も聞かなきゃ」と耳打ちする。

ややあって、浅井友子は視線を戻して苦笑した。

「あの、綾さんがね、すごく大事なことみたいに言ったんですよ。『彼って、実は鮫なの』って。でも、参考にはならないですよね？」

正直言って落胆した。付き合っている者の事で「鮫」などという単語を使う場合、ベッドの上の話ではないのか。違ったとしても、サーファーという事を考えて、せいぜいサーフィンが上手いという意味だろう。

もっとも、浅井友子のような年若い友人にそんな自慢をする位だから、塩田綾は余程そのボーイフレンドとの関係にはまっていたと見える。

気を取り直して誠は質問を変えた。

「話を変えますけど、一月のその日だけ、自分の車で来ていなかったのとは違うんですか？」

答えは即座に帰って来た。

「違います。だって綾さん、『車はもうないの』って言ってました。どうしたのか聞いたんですけど、答えてくれなかった」

誠は胃の辺りに嫌な物を覚えた。トラブルの予感がした。

始終自分の車で移動することに馴れてしまうと、そう簡単に車を手放したりはしない筈だ。事故でも起こしたのかもしれない。誠は頭の中で素早く仮説を立ててみた。

塩田綾が、自動車事故を起こす。彼女は当然加害者だ。相手とは警察に通報せずに示談にしようと交渉し、一旦は成立するが後でこじれる。

車は処分し、被害者と連絡を取りたくない一心で、一時的に姿を眩ましているのかもしれない。誠は塩田綾の留守番電話と、郵便受けを調べなかった事を後悔した。

いずれにせよ、浅井友子から聞くべき事は聞き終わった。三人共、それ程進まなかったが、食事も終えたため、誠はもう一度彼女に礼を言った。

カフェテリアの外に出ると、柔らかい風が吹いていた。

「あんまりお役に立てなかったみたいですけど」と言ってから浅井友子は、眩しそうな顔で、歩道の先にあるシャワーツリーを指さした。咲き零れるという表現がぴったりだ。

「綾さんが、あんな花みたいになりたいって言った事があります。明るくて元気で、楽しそうな感じでしょう？　お花屋さんで売ってる、高いバラみたいな人がそんな事を言うなんて」

「自分を変えたかったんでしょうね」

再び誠の頭を、塩田文美からのメールが過ぎる。浅井友子は遠いどこかを見て笑った。

「私が、あの花は躍ってるみたいって言ったら、綾さんは、あれは唄ってるんだって、言ってました。人目を気にせずに、気持ち良く唄っているようにしか見えないって」

二ヶ月少しとはいえ、思い出は沢山あるのだろう。トレイシーが頷いたのを見て、少し頬を染めた浅井友子は、初めて誠の目を真っ直ぐ見て言った。

「綾さんに会ったら、私が会いたがってたって伝えてくれますか？」

別れ際、バックパックを胸に抱えるようにして浅井友子は頭を下げた。

同じ駐車場に車を停めたというトレイシーと構内を歩きながら、誠はさっきの仮説について考えたが、すぐに矛盾に気が付いた。

仮に塩田綾が、事故の被害者を避けているのだとしても、家族に連絡位は取るだろう。事故の事など言わずに、適当な理由を付けて送金だけ頼めばいい。

「それで、これからどうするの？」

浅井友子の話を聞いて、トレイシーはトレイシーなりに何か考えがある筈だが、口に出さない所を見ると、誠と同じく確信が持てな

いのだろう。
　具体的にどうするという案は何もなかった。彼女の学校で会った女の子が言っていた、ナイトクラブに行ってみる位だろうか。
　もうこの辺りでいいだろうという気持ちと、やはり捜さなくてはという義務感が半々だ。ぼそぼそとそういう気持ちを口にすると、トレイシーは対照的にはっきりと提案を出した。
　期間を決めて、市内の有名なナイトクラブを廻ってみて、それで何も手掛かりがなければ一切手を引くと兄に告げてはどうかと言うのだ。悪くない案だと思った。
「今晩から始めなよ。金曜だから丁度いいよ」
　付き合うから、仕事が終わる頃に店に来て、とトレイシーは付け加えた。彼女も話を聞いて釣り込まれているようだ。
　駐車場でトレイシーと別れた後は、する事が無くなってしまった。時間は充分あるから、先日のようにビーチへ行く事も出来るが、何となく気が向かなかった。
　とりあえずアパートへ戻ると、管理人が書留めを預かっていると言う。薄いがしっかりした封筒の中身は、小為替と委任状の原本だった。
　小為替の額面には千ドルとある。兄が自腹を切ったのに違いないが、院長先生から経費が支払われる際に、兄のところで千ドル分差し引いてもらうよう頼もうと思った。
　それを決めると本当にすることがなくなったので、あろうことか掃除をした。
　重たいカウチをずらして掃除機を掛けたり、バスルームの床をモップで擦ってみたりした。ジェームスが帰って来たら、誠が発狂したと騒ぐだろう。
　そのジェームスは八時近くになって帰って来た。予測通りに大騒ぎをし、ついには「悩みがあるならいいカウンセラーを紹介する」とまで言ったので、さすがに誠も日頃の行いを反省した。
　塩田綾を捜すためにナイトクラブへ行く件について、ジェームス

は賛成も反対もしなかった。
「何か厄介事が起きた時に、日本人はすぐ弁護士を雇う事を考えないんだろうか？」
彼女が何かのトラブルを抱えているかもしれない話をすると、ジェームスは不思議そうに尋ねた。
「弁護士を頼む種類の物じゃないかもしれないし、日本人がイメージする弁護士てのはアメリカと違うかもな。日本では弁護士の地位は、多分もっと高いよ。それにアメリカ人ほど訴訟好きじゃない」
実際に日本の弁護士について、よく知っている訳ではない。しかし、アメリカの方が人口の比率から言っても、圧倒的に弁護士の数は多いだろう。
「訴訟まで行かないケースも多い。俺達は便利屋だよ。安い料金で済む事もあるし、自分で苦しみながらトラブルに対処するよりも、プロを雇って任せた方がずっと楽な筈だ」
「アヤ・シオタを見付けたら、そう言っておくよ」

トレイシーとは、十一時半過ぎに落ち合い、午前三時位までワイキキ内のクラブを数軒廻った。
留学生らしい日本人を見付ける度に声を掛け、写真を見せて尋ねたが、はかばかしい答えは一つも帰って来なかった。
大音量で音楽が掛かっているクラブの中で、ナンパでもないのに面識のない人間と話すのは疲れる。終いには、誠もトレイシーも喉が痛くなってしまった。そもそもナイトクラブで人捜しをするなんて、笊で水を掬うような行為ではないのか。
豪快な空振りに誠は虚しさを覚えたが、あと数回はナイトクラブ巡りをしようと渋々思った。
日付は変わっていたけれど、浅井友子の話も含めて、失望続きの一日だとも思った。

第二章・第四話　「サーファー」

当たりは翌日やって来た。

誠はナイト・シフトを終えた後、昨夜決めた通りに再びナイトクラブ巡りに出て、二軒目で塩田綾とそのボーイフレンドを知る女の子に出会った。

仕事中、ジョージに塩田綾の話と、ナイトクラブ廻りの話をした所、彼は意気込んで同行を申し出てくれた。日本人の母を持つ彼は、日本人の女性にえらく優しい。

彼の母もハワイに仕事で来ていて、父と知り合って結婚したそうなので、塩田綾の話は他人事ではないと言う。

「君代も同じだって？　でも彼女をクラブに付き合わせるのは、旦那に悪いだろ」

そんな事を言いながら、得々としてその晩行くべきナイトクラブの名前を挙げ始めた。

ジョージの選択が良かったのか、運の問題か、そのクラブはワイキキではなく、ダウンタウンの近くにあった。映画館やレストラン、ナイトクラブが一階、二階に入り、上の方はビジネス・ビルになっている。

綾を知っていると言った女の子は、友人らしい二人と一緒で、ジョージが声を掛けるとナンパだと思ったようだ。大分酔っていたけれど、綾という名前だけで既に「あの綾さんかな？」と思い出してくれた。最初に塩田綾だけが写っている写真を見せ、次いでボーイフレンドと一緒のものを出した。

「そう、この人。最近会ってないけど、前はしょっちゅうこういう所で会って、奢ってくれたの」

「この男はボーイフレンド？　名前知ってる？」

由美と友人から呼ばれた彼女は、セミロングの髪を揺らして頷いた。

「知ってるよ、ナナウエっていうの。ハワイアンの名前なんだって。ええっとね、ハーフ・ハワイアン、ハーフ・ジャパニーズだって言ってた。珍しいよね。でもさ」

彼女が急に言葉を切ったので、誠は先を促さなくてはならなかった。

ジョージが素早くウェイトレスに五人分の飲み物を注文し、誠が「内緒の事なら絶対言わないから」と念を押すと、ようやく続きを口にした。

「別れたか、でなければ浮気してるよ」

つい先週、彼が他の女性と実に親しげにしているのを、別のナイトクラブで見たと言うのだ。

木曜日が盛り上がるという噂の、新しいナイトクラブだ。それ程重大な秘密ではないかもしれないが、由美はさも深刻そうに言った。誠は彼女に合わせて深刻そうに聞き、次いでナナウエという男の特徴を聞き出した。

身長は百八十五センチ前後、写真では分からなかったが、右上腕部に女性の顔の大きな刺青がある。長髪をいつも後ろで括っていて、顔は写真で分かる通りのハンサムという事だ。生憎、由美も彼の職業迄は知らなかった。

一緒に遊ぼうよと言う彼女達の誘いを丁重に断って、誠とジョージはナイトクラブを出た。

その時点で時計を覗くと午前二時で、誠は次の日がモーニング・シフトだった事を思い出し、慌てて帰ることにした。週末だから起きているかとも思ったが、ジェームスは例によって、眠ってしまっていた。

ナイトクラブでは、全く聞こえなかった携帯電話を確認する。兄からメールが入っていた。

塩田綾が持っていたデビットカードについての報告だった。彼女は父親の口座から引き落とされる、子カードを預けられていたのだが、以前は全く使用していなかった。それが四月に入ってから、何

度か使用されている。

「院長先生は大した金額ではないと言っているが、彼の金銭感覚は我々とは少し違う」と、兄はコメントを添えていた。

塩田綾は、金銭的に困った状態にあるらしい。もっとも、彼女がハワイに引っ越した際、まとまった額を持って来たのか、それとも月々日本から一定の仕送りを受けていたのかは、聞いていない。

兄か、塩田文美に聞いてみようかとも思ったが、疲れていて眠かった。

明日は、いや正確には今日はモーニング・シフトなのだ。「明日、明日」と呟いて、誠はマットレスを敷いた。

翌日の日曜は疲れていてモーニング・シフトをこなすのが精一杯で、次の月曜にナイト・シフトの後で行ってみた、ナイトクラブでの収穫は皆無だった。

その間、塩田文美にメールで綾の預金等についての問い合わせをした所、軽く十万ドル以上の金を持ってハワイには行った筈だという答えが帰って来た。

文美からのメールを読んだのは、月曜の夜、正確には火曜の朝で、疲労とアルコールで鈍った頭にも十万ドルという数字は響いたけれど、それ以上考える気力が無く、マットレスに倒れ込んだ。

幸いにして、火曜日は休みだった。

昼まで熟睡して頭をすっきりさせ、前夜読んだ塩田文美からのメールを思い出してみた。

十万ドルと言えば、日本円が高いとはいえ、およそ八百万にはなる。塩田文美は「どう少なく見積もっても」と書いていた。どうやら塩田綾は、その金を大分減らしてしまったようだ。

しかしなぜ彼女は、日本にその旨を連絡しないのだろう。

あれこれと頭を悩ませ、仮説を立てては打ち消すのを繰り返して、誠は考えに行き詰まった。

全ては塩田綾と連絡が取れれば解決するのだ。いっそ塩田綾の父

親を焚き付けて、テレビコマーシャルでも打てばどうだろう。いや、警察や興信所を頼むのも嫌がる人間が、逆立ちしたってそんな事はしない。

誠はふと、我が身を振り返ってみた。もし自分が失踪したらどうだろう。両親や兄は仕事を放り出してハワイまで来るだろうか。また日本へ行ってしまったとしたら、日本語を全く解さないジェームスは、自分を捜しに日本まで来るだろうか。

気分がくさくさしてしまったので、誠は安価な気分転換をする事にした。

素早く着替え、バックパックに必要な物を突っ込んだ。ビーチに行くのだ。今日も天気がいい。

アラモアナ・ビーチパークへ行く途中、スーパーに寄ってサンドウィッチと出始めたばかりのサクランボを買った。サンドウィッチは自分用だが、サクランボはライフガードへの差し入れだ。

以前何度か、差し入れのお裾分けに与って以来、誠も時々何か持って行くようになった。顔見知りのライフガードでなくとも構わない。

見知らぬ同士が物を与え合うのは珍しいことではないのだ、この土地では。

定位置とも呼べる辺りに車を停めて、誠は膝の高さの堤防を乗り越えた。ビーチサンダルを履いた足の裏にも、焼けた砂の熱が伝わって来る。

今日のライフガードは誰かと監視台を覗く前に、声が降って来た。

「ほぅい、誠じゃねぇか」

梯子をガタガタ言わせながら降りて来たのは、ローランドだった。ハワイアンとフィリピーノのハーフの彼は、もう六十歳近くだが、サーフィンで鍛えた体はとてもそうは見えない。

「久し振りだぁな、兄弟。こないだジェームスには、アラモアナ・ボウルで会ったっけが」

彼はジェームスの事もよく知っている。アラモアナ・ボウルはサ

ーフィンのポイントだ。
その名前を聞いて、誠は閃くものがあった。ローランドは生まれも育ちもオアフ島で、サーフィン歴は五十年以上だ。当然サーファーの知り合いも多い。
彼ならサーファーだという塩田綾のボーイフレンド、ナナウエを知っているのではないか。
水道で洗ったサクランボを勧めながら尋ねると、ローランドは十粒ほど食べた所で、首を振った。
「知らねぇね。腕に刺青のある男なんざ、吐いて捨てるほどいるよ。それに顔見知りでも、名前は知らねぇのも多いしよ」
続けて話好きのローランドは、一くさり最近のサーファーについて批評を述べた。
「始末に負えねぇのが、始めたばっかのと他所から来た連中でよ。人が乗ってる波に平気で後乗りしゃぁがったりすんのよ。順番もわきまえねぇしよ」
「喧嘩になったりしないのかい？」
「たまーにはあるわな。けど、大抵は土地のもんが、黙って辛抱すんのよ」
彼が古き良きホノルルと、当時の、気は優しくて力持ちのビーチボーイ達の話を気が済むまで話し終えた頃には、１パウンドのサクランボは種しか残っていなかった。誠も大分食べたのだが。
ローランドはサーファーを捜すなら、彼らが集うバーに行ってみるとよいと助言をくれ、三軒ほどの場所と名前を教えてくれた。
「今は皆、島の南側に来てらぁ。その男がいなくとも、知ってる奴はいんだろう」
一瞬、またそういう所を回るのかと、誠はうんざりした気分にもなったが、取り敢えずは覗くだけでも行ってみようと思った。

第二章・第五話　「遭遇」

「ありがとう、ローランド。夕方になったら行ってみるよ」
黒く大きな瞳を二、三度まばたきさせて、ローランドは「五時まで待ちな」と言った。
「一緒に行ってやっからよ。ああいう所は気の荒いのも多い」
何も知らない日本人が、常連客の多いバーに入って行って、誰かの事を聞き回る。アロハ・スピリットに溢れる街でも、そう親切な人間ばかりとは限らない。
因縁でも吹っかけられたら、誠としては走って逃げるしかないだろう。
ローランドはそれを心配しているのに違いなかったが、言葉の終わりに少し伏せ目勝ちになった事で、心配の理由が日本人だけでない事も伝わった。
何かの拍子に誠がゲイだと分かったら、即座に袋叩きに遭うかもしれないと考えているのだろう。
ローランドは、ジェームスと誠の関係を知っている。彼自身は敬虔なクリスチャンで、彼の宗派では同性愛は罪だと教えられている。けれども彼はジェームスや誠を、決して邪険に扱わない。
いつだったか言った事がある。
「俺にゃ、絶対理解出来ねぇ。神様が下さったおめぇの体は、女の子を好きになるよう出来てる筈だよ。けど、おめぇはいい子だから、俺は嫌いじゃねぇよ。もしもおめぇが同性愛嫌悪症（ホモ・フォビア）の奴らに、どうかされるような事になっちまったら、俺ぁ泣くだろうなぁ」
頼むから自分の前でキスしたりはしないでくれと付け足して、苦笑していた。
誠は彼のような人間に出会うとほっとする。
理解出来なくとも、頭ごなしに否定せずに、受け入れようと努力してくれる、そういう人間が増えれば、もっと住み易い世の中にな

る事だろう。
しかし誠がゲイだと知ると、途端に唾を吐いたりする人間が多い事は、動かし難い事実で、ローランドはそれを心配しているのだ。素直に好意に甘える事にして、誠は五時までビーチでひたすらごろごろして過ごした。
ローランドの勤務時間の終わる五時には、別のライフガードがトラックで、ライフガード専用のサーフボードを回収しに来た。監視台に入り込まれないよう、蓋のようなものをして鍵を掛ける。
誠がTシャツとショートパンツの格好を気にすると、ローランドは顔の皺を増やして笑った。
「地元の子らしくていいさ」
一軒目のバーは、誠とトレイシーがよく行くバーの近くにあったが、雰囲気は少々違った。こちらの方が何と言おうか、より男性的なエネルギーに溢れている。
まだ日が暮れてもいないのに、二十人以上の男達がいた。多少は期待していたのだが、ナナウエという男は見当たらなかった。
それにしてもローランドの顔の広さに、誠は改めて舌を巻いた。店にいる全ての男達が、彼に敬意と親しみを込めた挨拶をした。
彼らは、ローランドの連れが誠だと知ると怪訝な顔をしたが、「甥っ子みてぇなもんだから」との説明にそれ以上追求しなかったし、尋ね人の事も取り合ってくれた。
「あいつかな？　背中にでっけぇ鮫の口の刺青がある奴」
「ああ、確かそんな名前だったかなぁ」
誠はナナウエの背中に、刺青があるかどうかまでは分からない。
「あの、右腕のこの辺に女の人の顔の刺青がある筈なんだけど」
恐る恐る口を挟むと、彼らは頷いた。
「そうだよ、あいつだ」
しかし、ナナウエが何処に住んでいるか、又は何の仕事をしているか知っている者はいなかった。
一軒目の店の近くに誠の車を停めたまま、ローランドのピックア

ップトラックに同乗して二軒目に向かった。目指す二軒目のバーは、ワイキキの反対側、つまりダイヤモンドヘッドに近い端だった。

ワイキキの東端はカパフル・アベニューという道路で仕切られており、その向こうに動物園とカピオラニ公園がある。

ローランドが誠を連れて行ったバーは、細い路地を少し入った場所にあった。賑やかな音楽が外まで聞こえている。

入り口までの三段程の石段を上ろうとした時、急に店の中から男が飛び出して来た。ローランドにはぶつからなかったものの、後に続く誠までは避けられず、軽く肩がぶつかって男は蹈鞴を踏んだ。

「あ、悪い」

と言った相手に、自分も謝ろうとして誠は息を呑んだ。彼だった。

「あんた、ナナウエだろ？」

いきなり見知らぬ人間から名前を呼ばれて、彼はぎょっとした顔をした。

「何だよ、おめぇ」

「ミス、アヤ・シオタを捜してるんだ。居場所を知ってるかい？」

今度はあからさまに不愉快そうになった。誠の事など無視して立ち去りたいようだったが、背後に立つローランドを気にしている。

「付き合っているんだろ？」

もう一押しすると、彼は唇をねじ曲げた。そういう顔をしても、不思議とハンサムな顔は崩れない。自分の好みではないが、こういう所が塩田綾は好きなのかもしれない。

「確かに付き合ってたけどよ、たった三、四ヶ月だぜ。もうとっくに別れたし、今、何処にいるかなんて知らねぇや」

下唇を付き出して言った仕草が、幼く見えた。

誠が重ねて質問しようとすると、彼は路上に唾を吐き、何か呟いて急に身を翻して走り出した。誠は後を追うよりも、呆気に取られてしまった。今のリアクションからすると、彼は塩田綾の失踪について何か知っているのかもしれない。

だが、反応があまりに唐突で、誠はただ後を見送ってしまった。

恐ろしい勢いでナナウエが走り去った後、誠は我に返ってローランドに礼を言った。

いずれナナウエとは再度接触を試みなければならないだろうが、足掛かりは出来た。このバーに時々来てみればいい。

ローランドの勧めでバーに入り、ナナウエがこの店の常連だという事を確認して、その日は切り上げる事にした。誠を車まで送ってくれる短い間に、ローランドは危ない事には関わらないようにとアドバイスをくれた。

「ハワイはよ、本当に色んな人間がいっから、それだけ問題も起きやすいっていやぁ、起きやすいよな。普段はアロハ・スピリットなんて言って上手くやろうとすっけど、そんなの糞食らえって思ってる奴もいんだよ。そういう奴は、まともに相手しちゃ駄目だかんな」

誠が塩田綾捜しのために、ナイトクラブへ行く事を再び思い立ったのは、一日置いた木曜の午後だった。

三時に出勤して早々、何組かの客を立て続けに捌き、一息ついた所で、忙しいのはその日が木曜だからだと思い当たり、同時にナナウエを知っていると言った由美の言葉が甦った。

彼女がナナウエを見掛けたナイトクラブは、木曜が盛り上がると聞いている。ちなみに土日に到着、出発する観光客達も、木曜か金曜に買い物をする事が多い。

生憎、トレイシーとジョージは二人共モーニング・シフトで、付き合わせても良さそうな同僚は働いていなかったし、ナイトクラブへ行く着替えも持って来ていなかったが、誠は覗いてみるだけのつもりで、仕事の後に足を向けた。

そのナイトクラブがワイキキ内にあり、店からわずかしか離れていない事も理由だった。

以前トレイシーと一緒にナイトクラブを回った際、そこには入らなかった。一応近くまで行ったのだが、入店待ちの行列を見た途端に、入る気を失くしてしまった。

それだけ人気のあるクラブなら、塩田綾も行っているかもしれないとは思ったのだが、待ち時間の間に何軒のナイトクラブを回れるかと考え、敬遠した。

ナイトクラブはビジネス・ビルの二階にあった。入り口から吹き抜けエントランスに、瀟洒な階段が曲がりくねって一階まで延びている。階段一杯に行列が並び、一階のエントランスだけでも収まり切れずに歩道にはみ出している。

先日よりも長い行列だ。誠は再び入る意志を失くした。一本吸って帰ろうと、エントランスから少し離れた場所にある灰皿まで行き、煙草に火を点ける。

何の気なしに並んでいる人々を眺めて、思いがけない幸運に飛び上がりそうになった。

丁度、階段を下り切った辺りに日本人のグループがいて、頭一つ飛び出たナナウエが、端正な横顔を晒していた。

観光客や、ハワイに来て間もないアジア人ならば、服装などから大体どこの国の人間か分かる。ナナウエの連れは、いかにも流行りの格好をした日本人の若者達だった。

彼にぴったり寄り添うように立っている、茶髪の女の子が新しいガールフレンドなのかもしれない。ナナウエはハワイでは珍しい革のパンツを履き、Tシャツの上からベストを来ている。

第二章・第六話　「性格」

見付けたのはいいが、何と言って話し掛けたものかと誠は逡巡した。

一昨日のように逃げられては困る。良い案も浮かばないまま煙草を揉み消し、誠はゆっくりナナウエに近付いた。

ナナウエが誠に気が付いた様子はない。近付くにつれて彼らの会話も耳に入った。もう既に大分アルコールが入っているようだ。

一人の男が日本語で野卑な冗談を言い、ナナウエを除いた四、五人がどっと笑った。

「ちぇっ、英語で言えよ。ここはアメリカなんだぜ」

ナナウエは実に不愉快そうに言ったが、周囲は耳を貸さない。どうも英語はあまり得意でない観光客か、来たばかりの留学生のようだ。

彼らは逆に、日本人の女の子に声を掛けた割には、日本語を解さないナナウエをからかい出した。

かなり酔っている一人が、「ただのセックス・マシーンなんじゃねぇの」と大声を出し、これはさすがにナナウエも分かったようだ。発音が悪くとも、「セックス」位は伝わる。

腕にしなだれかかっていた女の子を振り解き、ナナウエは形相を変えて男の襟首を掴んだ。悲鳴を上げる女の子と、ナナウエを止めようとする男達の怒号が一瞬入り交い、列を作っていた他の客達も注目し始めた。

バウンサーと呼ばれるナイトクラブの屈強なドア・マンが、階段を下りて来ようとしている。

全てはほんの二分ばかりの間に起こった。

今だとばかりに誠は大声を出しながら、揉み合っている男達の間に腕を入れた。

「ナナウエじゃないか、こんな所で何やってんだよ、行こうぜ」

何だ知り合いか、と男達が騒ぐのを無視して、誠はナナウエの腕を掴んで引っ張った。誠の顔を見て、ナナウエは毛虫か何かを目の前に突き出されたような顔をしたが、やって来たバウンサーに目をやり、黙ってされるがままになった。

誠はバウンサーに「友達が騒いでごめんよ、でもこいつは帰るから」と言い置き、ナナウエの腕を掴んでビルのエントランスを出た。歩道へ出るまで待っていたらしい。ナナウエは誠の腕を払った。

「何だよ、お前。人のこと尾けてるのか？　言っておくが、助けて貰ったなんて思っちゃいないぞ」

一昨日はあまり気が付かなかったが、彼の喋る英語はアクセントが少なく、聞き取り易い。外国人と付き合っていて、自然に相手が聞き取り易い喋り方を身に付けたのだろう。

ナナウエはカラカウア・アベニューと平行して山側を走っている、クヒオ・アベニューに向かって大股で歩き出した。

「尾けちゃいないさ。ホノルルがどんなに狭い町か分かってないのか？　アヤ・シオタの事が知りたいんだ」

ナナウエは速度を緩めない。

「お前、綾の男かよ？」

「そうじゃない、家族に頼まれたんだ。連絡が取れなくて、困ってる」

クヒオ・アベニューの歩道は決して広くない。ナナウエのすぐ脇を歩こうと思うと、いきおい向かい側から歩いて来る歩行者を押し退ける形になる。

暫くナナウエの斜め後ろをダウンタウン方向に付いて行くと、彼は変わりつつあった信号を悠然と渡り、大きくない道をさらに山側へ向かった。その先にはアラ・ワイ・ブールバードと運河がある。

「あのな、別れた女の事なんか、一々知るかよ。二か月前に別れてからは、一遍も会っちゃいないんだ。日本に帰ったんじゃないのか？」

アラ・ワイ・ブールバードに出る少し手前で、ナナウエは足を止

めた。細い道の左右には古いアパートが並んでいる。ここが彼の住まいだろうか。

「日本に帰ってたら、家族と連絡が取れない訳ないだろう」

誠がむっとした口調で咎めると、ナナウエは地面に唾を飛ばした。無言で茂みの脇から、アパートの敷地に入って行く。

誠は付いて行くべきかどうか迷い、立ち止まってしまった。もしナナウエが此処に住んでいるのなら、後日出直してもよい。

見たところセキュリティーなど無さそうな古めの建物だ。

そう思っていた所へ、とてつもないエンジン音が響き渡った。ライトが葉の広い木の間から洩れて来る。怪物のようなバイクに跨って、ナナウエが現れた。両足を前に突き出すようにして乗るクルーザー型だ。

「まだいたのか、とにかく綾の事は知らねぇよ。俺は日本人が嫌いなんだ。それも、少しの間、ハワイで楽しい思いだけしようって奴らには、我慢がならねぇ」

それならほんの十分前、一目でそうと分かる日本人とナイトクラブの列に並んでいたのは何なのだ。なぜ塩田綾と付き合ったのだ。

誠がそれらの疑問をぶつける前に、バイクは恐ろしい唸り声を上げ、アラ・ワイ・ブールバードに向かって滑り出して行った。

店の後ろの駐車場まで歩く間、誠はナナウエの言動を考えた。

ハーフ・ジャパニーズで、日本人と付き合いながら、日本人が嫌いだという男。短気なのも充分分かった。やはり子供染みたものを感じさせる男なのだが、「別れた女の事なんか」知らないと言う一語は説得力があった。

別れたのが二月前なら、確かに四月に入ってからの塩田綾の動向は知るまい。これ以上ナナウエから得られる情報はないかもしれない。

同時に塩田綾を捜す事自体も暗礁に乗り上げたようだ。

コンドミニアムに学校、友人、別れた恋人と当たって、全く綾本人とは連絡が取れない。

トレイシーが回数を決めてナイトクラブを回ってみろとアドバイスをくれた時からまだそれ程経っていないが、ナナウエはともかく綾とは接触出来ていない。

アパートに帰ると、誠は珍しく兄に宛ててメールを書いた。微に入り細に入りとまでは行かなかったが、かなり詳しく今までの経過を書き、これ以上の捜索は不可能だと思うとまで書いた。

要するに「ここまでやったんだし、勘弁してくれ」というメッセージだ。どの情報を「院長先生」の耳に入れるかについては宜しく選択してくれと書き添えたが、これは蛇足だろう。それを済ませると、ひどくせいせいした気分になった。

鼻唄混じりでシャワーを使い、ついでに足を滑らせて壁で強か肘を打った。

さっぱりした気分で眠りに落ちた筈なのに、夢見は良くなかった。会った事のない塩田綾が、店の前の路上で座り込んでいる。ここに居たんだ、皆が心配していますよ、と言う誠に、綾は首を振る。逃げなくちゃ、と何度も繰り返して今にも泣きそうだ。

靴がないの、と言われて足元を見ると、ミニスカートから伸びた白い足の爪先が血で染まっていた。

白い肌と真っ赤な血のコントラストに、誠は目眩がした。

起きた時には頭の後ろに、重い痼りのようなものを感じた。塩田綾の肌と血はやけに生々しく、思い出しただけで鳥肌が立った。

仕事に出てもその幻影は付いて来た。

クロージング・シフトで、マークと一緒に一階の担当だったのだが、接客をしていて後ろから声を掛けられ、振り向くと真っ赤なワンピースを着た女性が立っていた。

誠は飛び上がりそうになり、マークに不審な顔をされた。

「どうしたの？　顔色悪いよ」

マークもゲイだが、誠とは全くタイプが違う。日本語ほど男女の話し方が違わない英語でも、はっきりそうと分かる程に、彼は女性的だ。

誠よりも年は上だが、白人でも背は低く、細くて女の子のような顔をした彼が、そんな風に喋ってもあまり違和感はない。日本語は出来なくても、優しい話し方と丁寧な物腰で客を安心させる。

「昨夜、嫌な夢を見たんで調子が悪いんだ」

「そうなの、女の子に追い掛けられる夢かしら？　それって怖いよね。僕、一度、無理やり酷い目に遭わされたことあって、その女に似た人は、怖いの」

誠が肯定も否定もしない内に、マークは自分の体験を少しばかり話し、肩を震わせた。

「他人の事に、ふざけ半分で干渉したがる人が多いと思わない？好きなように生きてるんだから、放っておいて欲しいよね。ゲイと犯罪者を同列扱いする奴とか、地獄に堕ちりゃいいのよ」

同じゲイだという事もあって、マークは誠相手だと饒舌になる。誠は自分にとって自然と感じるために、一般的な男性と変わらない言葉遣いをしているが、マークのようにはっきりしていれば、すぐにゲイだと分かる。

例えば誠とジョージがナイトクラブへ行った時も、ゲイだとは思われなかった。しかしマークだったら、トレイシーと仲良く話していても一目瞭然だ。さぞかし嫌な目にも遭って来た事だろう。

それでも自分の好きなスタイルを貫いているマークは、強い人間だと思う。

その夜は、スーツと革の旅行鞄を同時に買う客に当たったお陰で、売り上げは上々だった。明日の土曜日が休みだという事を思い出して、機嫌良く接客していたせいかもしれない。反対にマークは小物ばかり売っていた。

第二章・第七話　「ランチ」

金曜の夜という事もあって、ジェームスは起きて誠の帰りを待っていたが、リビングルームのテーブルにはレストランのテイクアウトの容器が並び、カウチにはファイルが何冊も開きっ放しになっていた。

「ひどいな、これ。仕事は書斎でやれよ」

一度仕事の資料をひもとくと、他の事が一切気にならなくなるのは、ジェームスの悪い癖だ。

「ああ、ごめんよ。こんなに散らかすつもりはなかったんだが」

資料と共にジェームスを書斎に追いやり、残ったテイクアウトの料理を胃袋に詰め込む。

携帯電話で確認すると、兄からのメールは来ていない。

何となく所在なさを感じながら、誠はシャワーを使い、テレビを見ながら水割りを飲んだ。ベッドに潜り込んだのは三時を回っていたが、ジェームスはまだ仕事をしていた。

目覚ましの音が聞こえた時には、何かの冗談だと思った。唸り声を上げて毛布を頭から被ろうとして、ジェームスに揺さ振られた。

「さあ、サーフィンに行こう」

「あんた一人で行ってくれ。俺はまだ眠い」

「何だって？　君、昨晩聞いた時、行くって言ったじゃないか」

ジェームスは、半ば眠っている誠に尋ねたに違いない。そんな時は、何を聞かれたって「うん」と答えるだけなのに。

「ありゃ、嘘だ。行かない」

「何、偽証したな。偽証罪は風呂掃除一年だぞ」

何時に寝たのか知らないが、ジェームスは恐ろしく元気だ。誠はうんざりしながら、彼が掴んでいる毛布を引っ張った。

「分かった。行くけど、後から行く。俺はサーフィンしないからね」

渋々ベッドルームから出て行くジェームスに時間を聞くと、八時

だと言う。誠は黙って枕を抱え込んだ。

次に目が覚めると十一時だった。ジェームスはまだ帰っていない。誠は寝間着のTシャツのまま、下半身だけショートパンツに着替えた。あまり遅く行くと、本当に風呂掃除を言い付けられる。頭が働いていないままで、煙草と財布に携帯電話だけでアパートを出た。

ジェームスのいる場所は分かっていた。アラモアナ・ビーチパークの東側に、マジック・アイランドと呼ばれる小さな半島がある。そこから遠くない沖に、サーフィンのポイントがあるのだ。

アパートの前の道から、誠は車をベレタニア・ストリートに入れた。ラジオをハワイアン・ミュージックだけを流すステーションに合わせる。休みのリラックスした気分には、もってこいだ。

マジック・アイランドの中は、ジョギングを楽しむ人や、芝生の上でピクニックを楽しむ人々で賑わっている。誠は半島のさらに東端へ歩いた。

先にあるポイントで腕を競っているサーファー達が、水鳥のように見える。堤防の端まで行って、誠は目を凝らした。ジェームスは赤いショート・ボードを使っている筈だが、よく見えない。

運良くジェームスが誠を見付ければ上がってくるだろうし、そうでなければ堤防の内側にある砂浜でごろごろしていればいい。ボードもない誠には、ポイントに近付く事も出来ない。

ぼんやりサーファー達を眺めていて、誠は中に一際上手い男がいるのを見付けた。

波が崩れ始めるピークと呼ばれる場所を巧みに捉え、器用に滑り出して行く。ショート・ボードで波の腹を上下に滑るその様は、音のない音楽を聴いているような気すらしてくる。

暫くそうして、彼の巧みなボード捌きに見惚れていた。

数回波を捉えた後、彼は岸に向かってボードを漕いで来た。誠は見るともなしに見ていたのだが、近付くに従って眉間に皺を寄せた。

元々視力はあまり良い方ではないが、かなりのスピードで水上を滑って来るのはナナウエだった。奇妙な偶然に誠は唖然とした。

いつかローランドと一緒にバーで会った男が言っていた通り、背中の中央に大きな刺青がある。

波が打ち寄せて、下手をするとボードを岩にぶつけそうな浅瀬で、ナナウエは器用に足のストラップを外し、ボードを抱えて上がって来た。

知らん顔をしようかとも思ったが、ナナウエの方で誠に近付いて来た。

「おいおい、これも偶然だってのか？」

口調はきついが、目つきは先日ほど険しくない。

「当たり前だろ。俺はルームメイトの付き合いで来ただけだ。まあ、あんたのサーフィンが大したもんだったから、つい見惚れてたのは認めるけどね」

彼が塩田綾の居所を知らない以上、誠としては彼に偶然会おうが会うまいがどうでもいい、とも付け足した。

「そうかい、そんならいいとするか。俺がサーフィン上手いって言ったな。教えてやってもいいぜ」

ナナウエの申し出に、誠は口を開きそうになった。

二日前に出会った時は、敵意とはいかない迄も不愉快さを隠そうともしなかったくせに、今日はサーフィンを教えてもいいと言う。

「生憎だけど俺は根性なしで、とてもサーフィンなんか出来ない。ルームメイトにも匙を投げられたんだ」

白けた風に言う誠に、そうか、と言った後、ナナウエは様々な質問を投げて、誠を面食らわせた。学生ではないのか、どういう身分でアメリカに滞在しているのか、日本に帰る予定はあるのか、といった事だ。

一体全体、何故彼がそんな事を聞きたがるのだろう。誠は一々質問に答えながら、何かの動物を連想した。

見知らぬ相手に遭遇した時、最初は警戒心を剥き出しにして見せるが、少しすると寄って来て匂いを嗅ぐ等の調査をする。それにしても彼は「日本人が嫌い」だと、誠に向かって二日前に断言したの

ではなかったか。呆れている誠に、彼は駄目を押した。
「飯でも食いに行くか？　奢るぜ」
答えに迷って口ごもっている所へ、後ろから聞き慣れた声が掛かった。誠が堤防でナナウエと無駄話をしている間に、ジェームスが水から上がって来ていた。
「誠、来たのか。友達かい？」
誠の説明を遮るようにして、ジェームスは早口で続けた。
「忘れてたんだが、これからクライアントと会う約束があったんだ、すぐ帰らなきゃならない。君は友達と食事でもして、ビーチでのんびりすればいい」
更に誠の耳元に口を近付け、小声で「浮気するなよ」と囁くと、せかせかと公設シャワーの方へ歩いて行く。途中で一度振り返った。
「偽証罪だとか言うなよ。どうせ俺が風呂を洗うんだから」
予想外の展開に、誠は毒気を抜かれてナナウエの方を向いた。彼は唇の端を曲げて、皮肉っぽい笑いを浮かべた。
「お前の名前はマコトってのか。まあいい、丁度良かったじゃないか」
何がまあいいのかは聞く気も起きなかった。
ナナウエが近所に良い店があると言ったのは、ローランドと行った一軒目のバーだった。まず運ばれて来たビールを一気に半分ほど空けて、ナナウエが言った。
「お前、ゲイだろう。あの男、俺をちょいと睨んで行ったぞ」
その口調が僅かだが優越感を含んでいたので、誠は席を立ちたくなった。
異性愛者である事は、同性愛者よりも優れていると信じて疑わない人間の何と多い事か。誠にとっては、人種問題と同次元の事なのだが、人種差別に反対を唱える人間でも、同性愛者を平気で差別する人間もいる。
いずれにしろ、自分を疑う余地を持たない相手に議論を吹っかけるのは、徒労に過ぎない。

「そうだよ、気持ち悪いだろう。飯なんか食ってないで帰るか？」
ナナウエは肩を竦めて、軽薄そうな笑いを浮かべた。
「怒るなよ、聞いただけだ。別にゲイだっていいさ。一人で飯を食うのは最悪だからな」
どうもこの男は分からない。誠は続いて来たチーズバーガーを頬張りながら考えた。
この男はどんな風に塩田綾と付き合っていたのだろう。不愉快そうな顔をしたけれど、誠が尋ねるとナナウエは少しずつ塩田綾の事について話し始めた。
出会ったのは、去年の十月の終わり頃だそうだ。
ナナウエがよく行くサーフ・ショップでは、ハワイアン柄をプリントした服やバッグ、サーファーに人気の時計等も扱っている。塩田綾は友人へのプレゼントを探しに来ていて、彼に声を掛けられた。
日本人の女の子と付き合い馴れたナナウエにとっては、美人の綾は「ちょっとした幸運」だったが、綾はナナウエに夢中になったらしい。ナナウエが欲しがる物を迷わず与えた。
四か月程、贅沢三昧の付き合いをし、いい加減、塩田綾の顔色が冴えなくなってきたのを感じたナナウエは、彼女と別れた。塩田綾は別れたがらなかったそうだが、貰った携帯電話を返し、綾の知らない友人宅に暫く転がり込んでそれっきりだと言う。
「彼女は大金を持ってたそうだけど」
塩田綾がいい顔をしなくなったのは、ナナウエが金銭目当てだという事を感じ取ったに違いないが、それで別れたがらなかったのが、腑に落ちない。
上手い鎌の掛け方ではなかったが、ナナウエは乗った。
「いくら持ってたって、お前、派手にやったからな。あの、モーターサイクルもそうだし、サーフ・ボードもいくつか。ああ、ラスベガスでは凄くすっちまった」
まさかあのバイクまで、彼女の買ってやった物だとは思わなかった。ラスベガスでは幾ら遣ったのか知らないが、塩田綾が日本から

持って来た金を使い果たしていた可能性もある。十万ドルとして、それを四か月で使うのに一月に二万五千の計算だ。

ナナウエは平気な顔で、指に着いたケチャップを舐めている。

「彼女、車を手放したらしいな。何でだ？」

車の件を思い出したのは上出来だ。

「ああ、そりゃ俺のダチが事故って壊したのよ。綾はしょうがねぇって言ってたぜ」

廃車にする程の事故ならば、かなり大きな事故だったに違いないが、ナナウエは涼しい顔をしている。

「いつもそんな事して生活してるのか？　そりゃ、笑いが止まんねぇな」

押さえたつもりが、語気が荒くなった。

第二章・第八話　「繋がり」

売春とまで露骨ではないが、金銭が繋いでいる関係の話はよく聞く。出す方も受け取る方も、納得しての関係ならば、傍から文句を言っても仕方ないのだろう。

しかしそれだけの大金を巻き上げた挙げ句、波のうねりを読むように相手の顔色を読んで逃げ出す男には、嫌味くらい言ってもよかろう。

ナナウエは顔を上げた。今、舐めたばかりの指で、付け合わせのフレンチフライを摘む。

「あのな、俺、前に日本人は嫌いだって言ったよな。俺、半分日本人なんだ」

「知ってるよ。あんたの事を話してくれた女の子に聞いた」

ふうんと呟きフレンチフライを口に放り込んで、ナナウエは誠のビールに手を伸ばした。自分のグラスはとっくに空だ。

「俺の親父は、日本のヤクザだったらしいよ」

Ｙａｋｕｚａ　という言葉は、立派にアメリカで通用する。誠の嫌味から、ナナウエなりに何かを話そうとしているらしい。

「らしい、って？」

「俺は会った事がない。お袋の話だと、左手の小指が無くて、肩から背中に刺青があったんだと。そりゃあ、ヤクザだろう？」

誠としては、多分と言うしかない。昨今は日本でも、刺青を入れた若者も増えている。しかしナナウエの親に当たる世代で、となると少ないだろう。

「何だかまずい事をしてハワイに逃げて来たってお袋は言ってたな。けど、お袋と散々楽しんで、ほんの何ヶ月かで帰っちまったとさ。後に残ったのが俺だ。お袋も産むには産んだけど、俺の事が忌々しくて仕方なかったのさ。だから、ナナウエなんて名前を付けやがった」

生憎と誠は、ハワイ語の知識がほとんどない。意味を尋ねるとナナウエは、フライを銜えた唇を突き出して首を振った。

「俺だって意味なんか知らねぇよ。ハワイの伝説さ。シャーク・マンの伝説があるんだよ。そいつの名前がナナウエってんだ。とにかくな、そういう訳で俺は、日本から少しの間いい思いをしに来てる奴らが嫌いだし、そういう奴を食い物にしたからって、何だって言うんだ」

最後の方は得意気に言い放ったナナウエに、誠は嫌なものを感じた。刹那的な生き方はいいとして、「食い物にする」とは、たかっているのに過ぎない。

ナナウエに限った事ではなく、自分の外見や身分を利用して金銭的に施しを受ける人間を、誠は尊敬出来ない。

以前、知り合いに「くれると言う物を貰っているだけ、私といて良い思いをしているんだから当然でしょう」と誇らし気に言った女の子がいたが、彼女は裕福な男性しか相手にしていなかったし、相手の事を好きだとは聞いたこともなかった。

援助交際とどこが違うのか、さっぱり分からない。むしろ援助交際のほうが、自分を切り売りすると割り切っている分、潔いのではないか。

誠は鼻を鳴らした。

「気に入らないな。やってる事はヒモみたいなもんじゃないか」

「俺は親父に復讐してるつもりだ」

鼻に皺を寄せて、ナナウエは噛み付きそうな顔を作った。何故かそんな顔の方が、却って彼を幼く見せる。

「そんなら日本に行って、親父さんを見付けてぶっ殺せよ。あんた幾つだい？　子供っぽい言い訳は止した方がいいぞ」

極めて平坦な口調で言ったのだが、ナナウエの癇には充分障ったようだ。彼は大きな音を立てて舌打ちした。

「説教するなよ、オカマ野郎（ファゲット）が。いいんだよ、どうせ俺の人生なんて、最後は誰かにぶち殺される事になってんだからよ」

「何でそんな事が言える？」
「伝説だって言っただろう。俺の名前は呪いさ。そういう人生しか、生きられやしないんだ」
言うだけ言うと、ナナウエはそっぽを向いた。
誠は席を立った。多少は慣れたつもりでも、面と向かってオカマ野郎と吐き捨てられて、笑っていられる程ではない。
見当を付けて財布から金を引き抜き、テーブルに置いた。
「俺の分。俺はオカマ野郎かもしれねぇが、自分で稼いでる分、ヒモよりはましなんだ。あんたが日本人から巻き上げた金で、飯なんか食ってたまるもんか」
捨て科白を吐いて誠が脇を通る間、ナナウエはずっとそっぽを向いたままだった。
ころころと変わる気分といい、自分の生い立ちや名前にひどく拘泥する所は、やはり子供っぽいとしか言いようがない。何かが欠落したまま、体だけ大きくなってしまったのだろう。
あんな男と付き合うなんて、塩田綾の気が知れない。店を出て、誠はぷりぷりしながら車へ向かった。
ダッシュボードに内側から日除けを載せるのを忘れたため、日向に停めてあった車の中はサウナのようになっていた。窓を開け、冷房を最強にして、誠はとりあえず車を発進させた。頭の中ではまだ、塩田綾の事を考え続けていた。
ナナウエは塩田綾にとって、そんなに価値のある男だったのだろうか。短期間に大金を使うような付き合いの将来に、光を見出していたとは到底思われない。
大変下世話な考えだが、仮にベッドの上の彼がどれほど素晴らしかったにしても、大金を注ぎ込むとは自棄的だ。塩田綾は浅井友子にナナウエは鮫だと言ったそうだが、彼のどの部分を指して言ったのだろう。
確かに彼の背中には、大きく口を開けた鮫の刺青がある。ナナウエという名はシャーク・マンの伝説によるものだとは、きっと彼女

も聞いただろう。

気が付くと誠は、ワイキキのカラカウア・アベニューを東に、ダイヤモンドヘッドへ向けて走っていた。店の前を走り抜ける。今日も客足は上々のようだ。

そのまま走って、右手にワイキキ・ビーチが見えて来た頃、誠はカハラ・モールへ行こうと思った。大きな本屋が入っている。ナナウエ自身とはもう会う気もしないが、そのシャーク・マンの伝説とやらを読んでみようと思ったのだ。

ワイキキ・ビーチの脇を通り抜け、車はカピオラニ・パークへ入った。道路の両脇にすらりと高い木が並んでいる。カラカウア・アベニューが途切れる地点を右折して、ダイヤモンドヘッド・ロードに入る。

ふと塩田文美のメールを思い出した。妹から見て、塩田綾は「不器用な」人間だった。不器用だったから、ナナウエのような男に入れ上げてしまったのか、他に、好きな男を側に置く術を知らなかったのだろうか。

寂しかったのかな、と考えて、急に塩田綾への同情がこみ上げた。ナナウエに別れを切り出されて、彼女はどう思っただろう。彼の付き合い方は、正に金の切れ目が縁の切れ目だ。ナナウエと離れて、あんな男と付き合っていても仕方がないと、割り切れたなら幸いだが。一体部屋にも帰らずに、何処で何をしているのだろう。

急にある仮定が頭に湧いた。塩田綾はもう生きていないのではないか。ナナウエは別れたと言っていたが、実は彼に殺されてしまったのかもしれない。或いは振られた事を悲しんで、自ら命を絶ったか。

誠は頭を振った。それでは辻褄が合わない。

ナナウエは友人宅に転がり込んで、塩田綾の前から姿を消した。人一人手に掛けるよりも、遙かに簡単だ。それに四月に入ってから、塩田綾のデビットカードが使用されている。

自殺の線だとしたら、ごく最近という事になる。場合によっては

身元不明の遺体として収容されている可能性もあるだろう。
今朝アパートを出る前にメールをチェックして来なかったから、兄から連絡が入っているかどうか分からない。次には必ず警察への届け出を勧めようと思った。
そんな事を考えている内に、カハラ・モールに着いた。こぢんまりとしたショッピング・モールだが、比較的大きな本屋がある。ハワイの本屋にはどこでも、地元関係の本のコーナーが設けてある。観光案内書から写真集、歴史書、ハワイ語の辞書が並ぶ中、誠は伝説関係の本を手に取った。目次を開いてそれらしい話を探す。
一冊は小学校高学年から中学生向けの物、もう一冊は普通のハワイの伝説の本に、それと思しき話が見付かった。何冊も捲った訳ではないのに見付かったのは、ナナウエが言った通り、知られた話だからだろう。
誠はその二冊を手にして、空いた椅子を探した。ハワイの本屋にはあちこちに椅子があり、そこに腰掛けて、売り物の本を読んでもよいことになっている。
木製の椅子に腰を落ち着けたが、長くはかからなかった。

第二章・第八話　「繋がり」（後書き）

本文中、登場人物の台詞に同性愛者に対する差別発言が含まれていますが、発言者の性格を表すための手段として用いておりますので、ご理解頂ければと思います。
また、社会的交際の形、ことに「援助交際」に関しての表記がありますが、あくまで主人公の価値観である事をお断りしておきます。
本作では特定の交際形態を推奨及び否定することは、意図しておりません。

第二章・第九話　「伝説」

二冊の本に載っていた伝説は、ほぼ同じ内容だった。

舞台はオアフ島ではなく、ハワイ島。ワイピオ渓谷の美しい娘に、鮫の王が恋をする。

彼は自分の姿を、その特別な力で人間に変え、娘と結婚する。やがて時が経ち、鮫の王は海に戻らなければならなくなる。

別れに当たって王は妻に、間もなく生まれる赤ん坊の背中には鮫の口があること、その子には、決して肉を食べさせてはならないこと等を言い渡して去って行く。

予言通りに生まれた息子に付けられた名前は、勿論「ナナウエ」だった。

東西の文化を問わず、こうした伝説で、禁忌は実によく破られる。幼い頃は母親が全てに注意を払う事が出来たが、成長するに従い、ナナウエは村の男達と食事をするようになり、彼は肉を口にする。

それから、村人達にとっての怪異が起き始めた。

泳ぎに行った若者が帰らない。一人、また一人と村の人間が鮫の餌食になって行く。肉の味を覚え、自分の姿を自在に鮫に変える事が出来た、ナナウエの仕業だ。

怪異が続く中、どんな暑い日にも上着を取らず、水にも入らないナナウエは次第に周囲の注目を引くようになる。示し合わせてナナウエの上着を剥ぎ取った若者達が見たのは、彼の背中にある異形の牙だった。

子供向けの本では、ナナウエは海に帰り、彼の父はナナウエが二度と島へ近付かない事を約束する。

もう一冊では、海に逃げたナナウエは放浪する。

別の土地へ、島へ行き、人間として暫くの間生活する。そして村

人達が鮫に襲われ始め、誰かがナナウエに不審を抱く。噂と警告は島の間を飛び交い、人喰い鮫を退治するのに乗り出した漁師達の手で、ナナウエは最期を遂げる。

丘に引き摺り上げられた彼の体は、小さく刻まれて竈にくべられた。

本文には「鮫（シャーク）」とあるだけで、どの種類の鮫かは分からないが、誠はハワイの海に多いタイガーシャークだろうと思った。

名前の通り胴に縞模様がある。パニック映画などで有名なグレート・ホワイトほどは大きくないが、以前マウイ島の水族館で見た一頭は、十五フィート、四・五メートルという大きさだった。

タイガーシャークの外に、リーフシャークと呼ばれる鮫も何種類かいるが、それらに比べて格段に大きい。破壊力もありそうだ。

モデルの鮫がどの種類にせよ、二つのエンディングの内どちらが、あのナナウエの頭に張り付いているかは言うまでもない。誠はやり切れない気分で、本を棚に戻し、本屋を出た。

強い冷房で冷えた体に、外気が心地よかった。入り口近くに設置してあるベンチに腰を下ろし、「グレるよな、そりゃ」と独りごちた。

一体、ナナウエの母は何を考えて彼の名前を付けたのだろう。子供向けのストーリーから善意に解釈するとしても、ハワイに居られなくなる事を望んでいたという事か。

ナナウエが最初にその伝説を知ったのはどういう形だったかは、想像するしかないが、母親から聞かされたのだとすれば、恐ろしい体験だ。正に母親にかけられた呪いだ。

体は暖まって来ていたのに、身震いしてしまった。

ナナウエの支離滅裂な部分と子供っぽさは、呪いをかけられた時に成長を止めてしまった場所があるからだろう。

伝説にのっとるならば、彼は父親と同じ日本人ではなく、母親と同じハワイアンを食い物にすべきだが、彼は日本人を憎んでいる。しかし、計画性もなく食い散らかしている点は同じだ。

伝説の「ナナウエ」は将来をどう見ていたか知らないが、ナナウエは破滅するに違いないと思い込んでいる。

彼がこれ迄どんな人生を送って来たのかは知る由もないが、精神的に満たされたものでなかった事は確かだろう。

大穴の空いたようなそれを満たすには、じょうろで植木に水をやるような訳には行くまい。水道を出しっ放しにする位の愛情が要るだろう。徒労に終わるかもしれないけれど。

塩田綾は、自分の水道を出しっ放しにしたのだろうか。

誠はベンチから立ち上がった。ナナウエとは、もう会う事もないだろう。仮に何処かで出喰わしても、それだけだ。

ああいう人間に、半端な同情を寄せても仕方がない。自分の人生を丸ごと差し出す気がないなら、関わらない方がお互いの為だと思う。

携帯電話が鳴って、誠は慌ててポケットを探った。ジェームスからだった。

「やあ、今クライアントとの用事が済んだよ。放っぽったお詫びに、夕食は何かいいものを御馳走しよう」

いいものと言われれば、誠の答えは決まっている。

「スシ」

「分かってたさ。君がそれ以外の料理を言った事ないもんな」

笑いながら、じゃあこの次は焼き肉って言うよ、と誠は言い、やはり自分はハードボイルドには向いていないと思った。

日曜はモーニング・シフトだった。

前夜は鮨を食べた後、ジェームスと一緒にバーやナイトクラブを数軒ハシゴして遊んだ。食事に出掛ける前に、メールをチェックすると、兄から返事が届いていた。

相変わらず生真面目な文面で、誠が「奔走」してくれた事を感謝し、近々立て替えた塩田綾の家賃の残額と礼金を送るとあった。塩田綾の父親からのメッセージは何もなし。兄もどう伝えて良いのか

困惑しているのかもしれなかった。
しかし、もう出来る事もないのだしと、誠は客の少ないフロアでぼんやり考えていた。
今日は二階の受け持ちで、同じフロアにはジョージとジャネットが働いている。
いつもの日曜と変わりなく、客足はあまり良くない。それでも人気のバッグや財布を求める客の相手をし、ジョージやジャネットと無駄話をしながら午前中を過ごした。ナイト・シフトは、モーニング・クルーが帰る直前に皆で一斉に食事に行くが、モーニング・シフトは交替で行く。
その日誠は、一番遅い二時の食事に回された。一応店の二階のロッカールームには、小さな椅子とテーブルが置かれて食事が出来るようになっている。誠は近所のハンバーガーショップで食事を買い、ロッカールームで食べた。余った時間で昼寝が出来るので、このランチルームの存在は有り難い。
あわや寝過ごしそうになったのを、ジャネットに起こして貰い、誠はフロアに戻った。
いくら厚手のカーペットが敷いてあるとはいえ、床に転がって熟睡する誠をジャネットは信じられないと言う。
マネージャーのポールが、ジャケットに皺が寄っていると小言を言った。枕代わりにしたからだ。
ポールの小言から逃れる為に、誠は新たに二階に上がって来た客の方へ小走りに近付いた。
流行りのイタリアン・ブランドのTシャツにミニスカート、踵の高いサンダルを履いた日本人の女の子は、誠が声を掛ける前に、「あらぁ」と大きな声を出した。
「お兄さん、ここで働いてたんだ」
ナイトクラブで会った、由美だった。ナナウエの事を教えてくれたのは、彼女だ。
「そう。うちの店、贔屓にしてくれます?」

愛想笑いを浮かべると、彼女も屈託のない笑いを返した。
「ここのブランドは大好きよ、でも高いじゃん。あのね、今日はお財布欲しいの」
彼女を財布の並んだショウ・ケースへ案内し、幾つかを出して簡単なセールス・トークをする。由美はその中から茶色の革の一つに決めた。数多い商品の中でも、人気のシリーズだ。値段は三百五十ドル。
ストックルームに新しい商品を取りに行こうとした誠を、呼び止めて由美は小さい声で尋ねた。
「ねぇ、綾さん見付かった?」
無言で頭を振る誠に、彼女は上目遣いをしてみせた。
「てことは、まだ捜してるよね。あたし、ちょっとした情報あるんだ。教えてあげたら、
お兄さんの社員割引(エンプロイー・ディスカウント)使わせてくれる?」

第二章・第十話　「情報提供」

考えたのは一瞬だった。

兄は、塩田綾の父親からのコメントは触れていなかったし、もう捜索を打ち切っていいとは書いていなかった。ここで新しい手掛かりが掴めるなら、出来ることはしておいた方がいいだろう。

社員割引の枠は決まっているが、今年に入ってからほとんど使っていない。

「いいですよ」

今、話すのかと思いきや、由美は誠の勤務時間は何時までかと聞き、二ブロック程離れたコーヒーショップの名前を出した。そこで会おうと言う。

「そんなに込み入った話ですか？」

「ううん、でも今、時間ないの。下にいるおじさんとちょっと付き合わなきゃ。あ、お財布もそのおじさんが払うから、下に持っていって」

言われるままに、誠は商品を持って彼女と一緒に階下へ下りた。一階ではトレイシーが、日本人の中年男性に新しいブリーフケースを見せていた。

「決まったのか？」

彼は由美の姿を認めると、極めて鷹揚そうに尋ねた。

「うん、前から欲しかったやつなの。もう、すごい嬉しい」

誠はトレイシーに商品を渡し、由美に軽く頭を下げて二階へ上がった。本来、こうして二人のセールスが別々に接客した場合、それとなく客に頼んでレシートを二枚にして貰うか、或いは片方がそのセールを自分のものにして、後で他の売り上げを相手に回すという事をするのだが、誠は何も言わなかった。

由美とあの日本人男性の関係は、薄々察しがつき、塩田綾とナナウエを思い出して、複雑な気分になった。

とはいっても、仕事に手が着かなくなるような事はなかった。ぽつぽつとやって来る客を同じフロアのスタッフと交替で接客し、出勤して来たナイト・シフトの連中と世間話などをしている内に、退社時間となった。

五月は一年の内でも日が暮れるのが遅い。

ハワイでは冬でも、日没は日本より遅い。その代わり夏でも日の出が遅い。六時を回ったというのに、まだ太陽は傾いたばかりに見える。夕食前のそぞろ歩きを楽しむ人々で、カラカウア・アベニューは賑わっている。

由美は先に来て、フラペチーノを飲んでいた。誠は急いで自分の飲み物を買い、彼女の前に腰を下ろした。

店で会った時と、彼女は着ている服が違う。今は薄手のワンピースを着ていた。

「早かったんだね」

「うん、あたし、人待たせるのイヤなの」

待つのが嫌なタイプに見えたが、そうではないらしい。誠は早速本題に入った。由美が提供すると言った情報とは何だ。

「ゴールデンってホテル知ってる?」

「知ってるよ」

ゴールデンはワイキキの中では中流、サイズも大きくはないホテルだ。誠の店では、客の宿泊先と部屋番号を尋ねる。万が一のレシートの渡し間違い等の為だ。

以前、レシートを失くしたが返品したいと言ってきた男に、ホテルの名前と部屋番号を尋ねた。購入した本人であることを確かめるためだったが、男は返答に窮して逃げ出した。男が持って来たのは、購入した客から置き引きした商品だった。

商品を客に返して大いに感謝された事もあり、ホテルを尋ねるのは、必ずしなくてはならない事とされている。お陰で、オアフ島の殆どのホテル名を覚えた。

ゴールデンは、誰もが泊まりたい憧れのホテルではないが、それ

なりにレストランなども入り、場所も悪くない筈だ。
「あそこのオーナーって日本人なの。面白い人で、若い子集めてワイワイやるのが好きなのね」
由美は説明を始めた。
誘われるのは主に日本人留学生で、女の子に限らず、人を集めてパーティーなどを開いているらしい。馴染みの学生達は、いつもゴールデンの二階にあるバーに溜まっている。ナイトクラブで時々顔を合わせる学生に誘われて、由美が出入りするようになったのはごく最近の事だが、すぐにオーナーにも気に入られ、彼のクルーザーにも乗せて貰った。
「でね、この間、前にクルーザーで撮ったビデオを見せてもらったの。そしたら、綾さん、写ってたのよ。綾さんがゴールデンに出入りしてたなんて知らなかったもん。でもね、今は来てないよ」
「由美さん、頻繁に行ってるんだね」
肩に掛かった髪を払って、由美はにっこり笑った。
「うん、毎日。オーナーさんね、金田さんっていうんだけど、色んな有名人や偉い人と知り合いなんだよ。お金持ちの人もよく来るから、紹介してくれるの。コネとか作っておけば、就職にも便利じゃない？」
彼女の「情報」はそれだけだった。塩田綾はゴールデンのオーナーと親しくなっていた。しかしそれも今現在の話ではない。誠はいささか失望したが、約束通り由美に、社員割引は使わせると告げた。
「店に電話して」
「携帯の番号とか、教えてくれないの？」
由美は軽く首を傾けて、誠の顔を覗き込んだ。自分がどうしたら愛らしく見えるか分かっている仕草だ。誠も例のセールス・スマイルで答えた。
「俺、彼女と住んでるんだ。彼女、日本語分かんないから、俺が日本人の女の子と仲良くするのを嫌がるんだよ」
白けるだろうと思ったが、由美は逆に驚きの声を上げた。

「そうなんだ、すごい真面目だね。彼女、大事にしてるじゃん。いいなぁ。分かった、お店にかけるね」

別れ際、由美はこれからあのおじさんと食事なんだと告げ、さらに付け足しのように言った。

「誠さん、ゴールデンのバーにも来なよ。何だったらオーナーにも紹介してあげる。金田さん、不細工な男は嫌いだけど、誠さんなら絶対、オーケイだから」

ひらひらと手を振って去って行く由美を見送って、誠は苦笑した。危なっかしいのか、ちゃっかりしているのか分からない。

彼女の口振りでは、塩田綾もよくホテルに出入りしていたようだが、彼女が有名人とのコネに惹かれた口だとは思えない。ナナウエと別れて寂しかったせいではないか。

アパートへ戻ったのは、七時過ぎだった。当然ジェームスはまだ帰っていない。誠は書斎に入り、メールをチェックした。兄からのメールはない。

思い立って誠は、塩田文美にメールを書いた。

まだ綾には会えていない事などを書き、ナナウエの事は「親しくお付き合いしていた友達もいたようですが」とぼかしにもなっていない表現をした。「大分お金を遣ってしまっていたようです」という一文に、文美が反応してくれる事を願った。

金が無くなったのなら、父親に請求している筈だとか、或いは実際にそういう事があったとか、教えてくれれば何か手掛かりになるかもしれない。

誠は塩田綾のコンドミニアムに入った時の様子を思い出した。確かに彼女の持っていた筈の、ブランド物のバッグや靴は見当たらなかった。しかし、電気も電話も通じていたから、一文なしになっていた訳ではない。

もしかすると、ゴールデンに出入りしていて新しいボーイフレンドでも見付けたのかもしれない。どういう相手かはさておいて、そのボーイフレンドの家に入り浸りになっているとも考えられる。捜

索を続行する上で、次なる場所はゴールデンしかない。
翌日も誠はモーニング・シフトだった。
昨日と同じく、ジョージも同じシフトでおまけにフロアも一緒だった事から、接客の合間を縫って、誠はこれまでの経過を彼にして聞かせた。以前付き合って貰った手前、何となく経過を報告しておく気になったのだ。
自分も時々日本の女の子を引っ掛ける癖に、ジョージはナナウエの話を聞いていきり立った。
「何だよ、そんな奴、ぶっ飛ばしてやれば良かったじゃないか」
雲突くような白人の父親の遺伝子を受け継ぎ、日本人の母親の勧めで柔道をやっていたジョージなら、あるいはナナウエを「ぶっ飛ばす」事も可能かもしれない。誠は肩を竦めた。
「自分だって時々、日本人相手に一晩限り（ワンナイト・スタンド）してるじゃないか」
「俺は物なんかねだったことはない。金目当ての付き合いなんて、反吐が出る。とにかく、ゴールデンのバーに行ってみようぜ」
勢いが付くと止まらないというか、義侠心に溢れているというか、ジョージは誠を頼りない弟位に思っているから、これは正直言って有り難い。
ローランドにしてもそうだったが、性別嗜好、肌の色を問わず、親しくなった相手には優しくしてしまう人間が、ハワイには多い。仕様がないと思っても、突き放せないのだろう。

第二章・第十一話　「ホテル」

仕事を終えた後、一度帰って着替え、誠とジョージはゴールデンの近くで落ち合った。

ナイトクラブではないので、ジョージは膝までのショートパンツにスニーカーという出で立ちだが、そういう格好をすると、二十六の彼も誠と同じ年に見える。

ゴールデン・ホテルのエントランスは思ったより広かった。正面の車寄せが狭く、大きな団体用バスは前の道路で客を乗せたり降ろしたりしなければならない程なので、もっと小さい設計かと思っていた。

正面玄関を潜ると、二階までが吹き抜けになっていて、二階の一部が目指すバーだった。エントランスに張り出す形になっており、そこから一階に向けてカーブを描いて階段が伸びている。

階段の下には別のレストランが入っている。席の半分は屋内だが、半分は屋外に設置してあるようだ。きっとプールがあるのだろう。フロントの正面には、どこのホテルにもあるようなソファーセットが置かれ、客が数人新聞を読んでいる。

階段を上がってみると、バーというよりは、アルコールも出す日本の喫茶店という雰囲気だった。御丁寧に、「氷」の旗まで下がっている。席数はそれ程多くない。

誠はわざと、日本人の若者達の隣のテーブルを選んだ。ジョージは黙って正面に腰を下ろす。

ウェイトレスが氷水の入ったグラスとメニューを持ってやって来た。真っ先に水とメニューが出てくる所を見ると、やはり日本式の喫茶店風だ。

メニューによると、軽食も扱っている。内容も日本風。二人は、チキンカツカレーとビールをオーダーした。

最初に、隣のテーブルに声を掛けたのはジョージだった。

いつもなら誠とは英語でしか話さないジョージが、日本語を交えて綾の話をし出し、声高に一しきり「ここによく来てるんだろ?」「そうだけど、今日はいないみたいだな」「お前、誰かに聞いてみろよ」「お前が聞けよ」といった会話を交わして彼らの注意を引いた後、おもむろに話し掛けたのだ。

「すみません、ここにはよく来られます?」

ハーフの顔に正しい日本語。若者達はジョージの顔を注視した。いずれも二十台前半の男女が五人だった。警戒というよりも好奇の色を浮かべて、一人が聞き返した。

「そうですけど、どうしてですか?」

髪を金髪に近い色に染め、片耳に五つか六つピアスをした若者だが、言葉遣いは丁寧だった。誠がジョージの代わりに答えた。

「人を捜しているんです。友達の上司のお嬢さんなんですけど、最近日本に連絡を入れていないらしくて、頼まれちゃったんですよ」

いかにも厄介事を持ち込まれて困っている、という風に誠は言い、持参の写真を見せた。塩田綾との繋がりは、本当の事を言う必要はないだろう。

「この人です。塩田綾さんというんですが」

御存知ですかと最後まで言う前に、近くに座っていた三人の内二人が「ああ」と声を上げて遮った。残りの二人も身を乗り出したので、誠は別の写真をテーブルの上に滑らせた。

「綾さんじゃん、最近見てないけど、どうしちゃったの?」

「あたしに聞かないでよ。でも本当に、しばらく会ってないよね」

五人の内、四人が塩田綾を知っていた。現在出入りしていない事は由美から聞いていたが、誰かが彼女の居場所を知っているのではないかと、一抹の期待もないではなかった。誠は失望を隠して彼らの話を聞いた。

由美の教えてくれた事と重複してもいたが、彼らが口々に言った所によると、塩田綾は二か月程前から足繁くゴールデンへ来るようになった。誰の誘いがきっかけだったかは分からない。

ここで人脈を作り、出来る事ならハワイでビジネスをしたいと言っていたそうだ。仲間内でも、突然日本に帰ったり、ゴールデンへ来なくなったりする人間は珍しくないので、誰も不思議に思わなかった。

「ずっと前に来てた子で、見ないなと思ったら、実は、ビザが切れてたのがイミグレに見付かって、強制送還されてたって事があったっけ。急に誰かが来なくなるのは、珍しいことじゃないんです」

真っ黒に日焼けして、パーマをかけた長髪を結んでいる男が言う。イミグレとは移民局の事だ。Ｕ．Ｓ．　Ｃｉｔｉｚｅｎｓｈｉｐ　ａｎｄ　Ｉｍｍｉｇｒａｔｉｏｎ　Ｓｅｒｖｉｃｅｓ　の一部を取って、日本人の間ではイミグレが通称になっている。

「あ、でも、ちょっと前に金田さんと、綾さんの話したよ。『最近来ないねー』って。そしたら金田さん、何か知ってるっぽかった」

そう言ったのは、奥に座っていた女の子だ。目の周りの化粧が特に濃い。下手ではないので、滑稽な印象は与えないけれど。

「金田さんというのは、こちらのオーナーですよね？」

「そう、ショウジさんて呼ぶ子もいるけど。ええっと、何て言ってたかなあ、ううん、悪い事じゃなかったよ。だからあたし、そうか、って忘れちゃったんだもん」

この女の子がよほど物覚えの悪い人間でない限り、おそらく平凡な理由に違いない。驚くような話だったら、大抵覚えているものだ。

「ボーイフレンドが出来たとか、そんな話でした？」

「そんな気もする。時間あるならちょっと待ってみれば？　金田さん、来るかもしれないよ」

彼女は良い提案だと思ったらしく、「そうしなよ」と付け加えた。他の一人も「金田さんなら、知ってるかもね」と言う。

誠はジョージの顔を見た。あまり長時間付き合わせるのは悪い気がする。ジョージは早口の英語で、

「いいよ、待とうぜ。その代わり、ここはお前持ちな」

と言い、わざと片方の眉を上げて笑った。

ビールをもう一本ずつ頼み、それから暫くは彼らとの雑談になった。

彼らは明るく、無邪気だった。最初から警戒心なく、塩田綾について知っている事を話してくれたように、開けっ広げに自分達の話をし、ついでに誠とジョージについても聞きたがった。

隠しても仕方ないので、勤務先だけ教えたが、彼らの興味は何故日本人の誠が、アメリカで仕事を持てるかという点に集中した。

アメリカ生まれなので市民権があるという誠の答えに、彼らは羨望の溜息を洩らした。

「いいなあ、俺、あと半年でビザ切れるよ。どうしよう」

タカシと呼ばれた金髪がソファーの背に体を投げ掛けた。

「俺ね、日本で専門学校行ってたんだけど、つまんなくて辞めちゃって、こっちに来て語学学校行ってるんだけど、そこでも落ち零れなんすよ。日本に帰っても景気悪いし、何とかしてアメリカにいられる方法ないですかね？」

誠は移民専門の弁護士でも相談すれば、と笑って誤魔化した。自分が日本から出た理由も、ここに留まっているのも全てはゲイだという一点に尽きるが、日本に帰りたくない日本人は多いらしい。

どんな理由にしろ、新天地を目指す人間はいるのだ。居心地が良ければ帰りたくないのは当然だろう。また元の場所で順風満帆の人間が、新天地を目指す筈もない。

君代の言ったように、行った先でも物事が上手く進まない場合、駄目でしたと失敗者のままで帰りたくないという思いもあるだろう。

およそ一時間も彼らと無駄話をして過ごした頃、突然ケイコという女の子がバーの入り口を向き、腰を浮かせて手を振った。

「金田さーん、こっちこっち」

慌てて振り向くと中肉中背の男がバーに入って来る所だった。アロハシャツではない水色の半袖のシャツに、ベージュのスラックスを履いている。遠目ではっきり分かる程、肌の色が黒い。近付いて来るに従って、頭に白い物が混じっているのも見えた。多分五十代

半ばだと誠は踏んだ。
ジョージがあるイタリアン・ブランドの名前を誠に耳打ちした。
「あのシャツ、そこのだぜ。洒落てるな」
テーブルの近くまで来ると、彼は快活そうな笑みを浮かべて一座を見回した。
「おや、見掛けない子がいるね。誰かの友達?」
「や、この人達、金田さんを待ってたんですよ」
タカシが言ったのとほぼ同時に、誠は立ち上がった。一礼して名前を名乗り、塩田綾さんを捜しているんです、とまず言うと、金田氏は右手を差し出した。明らかに日本人同士と分かっている場合、直ぐに握手を求める人は少ないものだ。
しかも金田氏の仕草は、あまり堂に入っていない。もしかすると仕事の上で、アメリカ人との付き合いが多く、初対面であれば誰彼構わず右手を差し出すようにしているのかもしれない。
次いで塩田綾捜索の理由を説明しようとしたが、これはタカシを始めとする留学生達が、次々と口を挟んで話してしまった。所在ないような気分で、誠は「御家族が心配していらっしゃるので、御存知の事がおありでしたら教えて下さい」と結んだ。
「あれあれ、綾ちゃん、何やってるんだろう」
言いながら金田氏は、テーブルの空いた椅子に腰を下ろした。直後にウェイトレスが飲み物を運んで来る。
「僕が最後に会ったのは、一か月位前かな?」
ここでも一か月だ。それよりも後に、塩田綾に会ったという人物には遭遇していない。
「一か月ですか?」
誠は鸚鵡返しに確認した。気取った手付きでグラスを口に運び、金田氏は頷いた。
「そう、一か月位。きちんとした日付までは覚えていないけど、綾ちゃん、別れた彼氏とよりが戻ったって言ってたよ」
えっ、と言ったなり誠は暫く絶句した。ナナウエは別れてから会

っていないと言っていたではないか。そういう誠に構わず金田氏は続けた。

「いっぺんダンプされたんだけど、何だかやっぱりカム・バック・トゥギャザーだってさ。ハーフ・ジャパニーズでハーフ・ハワイアンの彼。彼の事は知ってる?」

会話に英単語が入って来るのは、アメリカ生活の長い日本人にはよくある事だが、どうも金田氏のそれは芝居がかっている。ただ、発音が完全に日本語発音で、Ｔｏｇｅｔｈｅｒ　のｔｈの音がただのザになっていた。

ジョージが目を白黒させたが、誠は彼の話し方に構っている場合ではないと気を取り直した。

「ナナウエという男ですか?　よくサーフィンをしている?」

「さあ、名前までは聞いてないけど、サーファーだとは言ってたな」

まずナナウエしかいないだろう。誠は無性に腹が立った。

妙に子供っぽい所に気を取られて、ころりと騙されてしまった。彼が言っていた、塩田綾の所持金を使い果たしたという話も嘘かもしれない。もしかすると塩田綾は計画的に姿を消し、家族を散々心配させた上で、ナナウエとの将来を認めさせようとしているのではないか。

憶測が頭の中を飛び交ったが、誠は取り敢えず平静を装い礼を述べた。

第二章・第十二話　「推測」

「ああ、そんな事いいんだよ。そう、綾ちゃん見たら日本にコンタクトするように言うからね。ところで、君達これからビージー？このホテルの上、ペントハウスのスイートになってて、そこでパーティーするんだけど来ないか？」

歓声を上げた留学生達に一拍子遅れて、誠は丁寧に断った。誠は明日が休みになっているが、ジョージは仕事だ。聞くべき事は聞いたので帰ることにした。伝票を頼むと金田氏が支払いは無用だと言う。一、二度押し問答をした後で、好意に甘えた。

バーを出て、エントランスの階段を下りながら、ジョージが小声で話しかけて来た。

「妙な場所だな、月曜からパーティーだってよ。あんな風に学生ばかりが溜まってる場所、見たことがない」

ジョージの言うとおり、ゴールデンのバーは特殊な雰囲気だ。客層に特定の人種が多い店や、常連が多い店というのは珍しくもないが、くつろいでいたのは、金田氏のおとりまきばかりだった。異様といえば異様だろう。

しかし誠は、今聞かされた話ですっかり頭に血が昇っていた。

「そんなこた、どうでもいい。ナナウエの野郎、俺に嘘吐きやがった」

よりを戻したというナナウエの件が、胃の底に焦げついた様に残り、つい声高になる。ジョージは唇の端を上げてみせた。愉快がっている訳ではない。

「ろくでなしは何処にでもいるさ。今度見かけたら、半殺しにして吐かせろよ」

目つきがきつくなっているから、冗談を言っているのではないと分かったけれど、それが出来たら苦労はないのだと誠は思い、気の抜けた溜息が出た。

ジョージとはホテルの近くの路上で別れ、誠は冷めやらない怒りを抱えたまま家へ帰った。

ジェームスは書斎に籠もっていた。シャワーを使って、カウチに横になった。ＴＶを見ながら、明日は何をしようかと考える。特にこれといった趣味を持たない誠の休日は、大概ビーチでごろ寝が相場と決まっている。立ち仕事なので水泳が腰痛の予防になると聞いてからは尚更だ。

今日、金田氏からナナウエの話を聞いた後では、また彼に会うために労力を使うのは業腹な気がしたから、明日はまたアラモアナ・ビーチにでも行こうと考えた。幸いここの所、上天気が続いている。

十一時を回った頃に、ジェームスが書斎から出て来た。いつになく荒れた雰囲気を漂わせているので、自分の不愉快な気分を忘れて誠は少し驚いた。

「どうしたんだよ？　怒ってるみたいだな」

「今、抱えてるケースのせいさ。クライアントはわがままだし、相手の弁護士は遣り手ときてる」

鼻息も荒く言って、ジェームスは真っ直ぐキッチンへ向かった。乱暴にウイスキーをグラスに注ぎ、コーラで割る。

誠が飲む水割りを邪道だと言い、必ずコーラで割るかストレートだ。しかも、ダイエットは味が悪いなどと利いた風な事を言って、普通のコーラを使う。腹が出るのはそのせいだと誠がからかうのも気にしない。

大きめのグラスを一気に半分程空けて、ジェームスはケースについて話し出した。資産家の依頼人は妻と別れたがっている。新しいガールフレンドと再婚したい為だが、妻との間の二人の子供の親権は是非とも欲しい。

「その上、奥さんに金を払うのは嫌だときた」

カウチの上に起き直った誠の隣に腰掛け、コーク・ハイを一口飲む。

「法律じゃ、離婚の時は財産を半分こするんじゃなかったっけ？」

「基本的にはね。ついでに親権を争うのは、母親に有利な傾向になってるんだよ。全く、誰かあの男に、世の中には思い通りにならない事もあるって事を教えてやって欲しいよ」

珍しく弱音めいた物を吐くジェームスは、普段より可愛らしく見える。

「でも、あんたは便利屋だから、何とかするのが仕事じゃないか」

冗談ぽく言った言葉に、「それはそうだが」と少し言葉を濁して一瞬黙った後、ジェームスは、ああっと大声を出した。

「そうだ、忘れる所だった。君、車のセーフティー・インスペクションが切れてるぞ。今日、ビルのマネージャーに言われたんだ」

誠のアパートにも、常駐の管理人はいる。住人の事をよく覚えている中年の白人男性だ。セーフティー・インスペクション、つまり車検の期限を記したステッカーは、車の後部バンパーに貼ってあるから、駐車場を掃除している時にでも見付けたんだろう。

「何て事だ。それで毎日走り回ってたなんて。警察に取っ捕まったら高くつくぞ」

言われてみれば確かに、四月一杯が期限だった。たちまちの内に口うるさい母親のようになったジェームスの前で、誠は頭を掻いた。まず明日の休みにする事は、一つ決まった。

翌朝は早めに起きた。

と言っても十時に近く、ジェームスはとっくに出勤した後だった。軽い朝食を摂った後、書斎に入りメールをチェックする。いくつかの広告に混じって、塩田文美からのメールが届いていた。誠が塩田綾を捜し続けている事への丁寧な謝辞に続いて、姉の性格について触れていた。

姉が人の心をつなぎとめたり、気をひいたりするのにお金を使ったりすることは、ありそうだと思います。

日本を離れて寂しい思いをしていれば、なおさらです。

どれくらいお金を遣ったのかは分かりませんが、もしも、たくさ

ん使ってしまったのだとしても、姉は父に援助を頼まないのではないかと思うのです。

言えばきっと怒られますし、それ以上に「だから結婚もできないんだ」などと言われて、ダメ人間扱いをされてしまいます。私もそういう父を怖いと思っているので、よく分かるのです。

そして姉は、一日でも長くハワイに滞在していたいんだと思います。

父の元へ、この町へ帰ってくるのは辛いことですから。

もし姉に会うことができたら、私が父に内緒でお金を送ると言って下さい。そんなにたくさんは無理ですが、できるだけのことはしたいと思います。

結びには改めて礼の言葉が記してあった。二度読み返して、誠はメールを閉じた。直ぐには返事が書けそうになかった。

ジェームスがいないので室内で吸っても構わなかったが、何となく誠はベランダに出た。今日も抜けるように空が青い。ビルの間から遠くに見える海が、眩しい程光っている。

深々と煙を吸い込んで、読んだばかりのメールを思い返す。塩田綾と文美は、どれ程親しい姉妹なのだろう。

例えば誠の兄が他人に、弟について語ったとする。そこには実に重要なポイントが抜けている筈だ。兄は誠がゲイだと知らない。もっとも、自分を基準にして他人を測るのはどうかとも思うが。

塩田文美の書いている事がその通りだとすると、塩田綾はかなりのっぴきならない状態にある。金をどの程度残してあるかは不明だけれど、援助も頼みたくない、日本にも帰りたくない、ではどうにもならないだろう。就労ビザの取得は難しいし、時間も掛かる。

おそらく一番手っ取り早いのはアメリカ人と結婚をする事だ。それならば在住許可も下り、仕事も出来る。彼女には好きな相手もいる。彼女はそのつもりなのだろうか。昨夜、誠が思いついたように、計画的に姿を眩まして、ナナウエとの将来を進めようという心積も

りか。

待てよ、と誠は煙草を揉み消しながら思った。

ナナウエの言った事を鵜呑みにしたため、塩田綾が経済的に困っているのではないかと考えた訳だが、ナナウエがそれに関しても、本当の事を言ったとは限らない。別れてから会っていないという事からして、嘘だったではないか。

もっとも今現在、付き合っているかどうかについては疑問が残る。円満に付き合っているならば、ナイトクラブで出会った夜のように、他の女性と出掛ける事はないだろう。

一度はよりが戻ったが、やはり別れてしまい、バツが悪いのでゴールデンにも顔を出さないでいるという仮説はどうだろうか。

親の口座から引き落としのデビットカードを使用したのにも、実は何か意図があるのかもしれない。彼女の本当の経済状態を知るために、銀行に当たってみる事も考えたがやめた。

銀行は語学学校や不動産会社とは比べ物にならない位ガードが固い筈だ。せめて警察にも届け出たという書類位は必要だろう。

あれこれと考えて、起きて間もないというのに疲れたような気分になってしまった。

見えたかと思った糸口、ゴールデンの事がそれ程役に立たなかった。ナナウエの所に逆戻りしてしまったけれど、この上彼に接触するのは気が進まなかった。どうせ本当の事は言わないだろうし、不愉快な思いをするのも目に見えている。

第二章・第十三話　「偶然」

誠は部屋に戻り、外出の支度をした。塩田綾の件は頭が痛いが、自分の生活も大切だ。車の車検を受けなくてはならない。ジーンズとTシャツに着替え、財布を開いて保険のカードが入っている事を確認する。

ハワイ州では保険に入っている証明と、州の車両登録証が無くては車検が受けられない。車検と言っても実に簡単なもので、ちょっとした設備のあるガソリンスタンドでも受けられる。

サンダルを突っかけてアパートを出ると、誠は近所のオート・メンテナンス店へ車を走らせた。

粋なつなぎのユニフォームを着た青年が、てきぱきと応対してくれる。受付付近のベンチに腰を下ろし、備え付けの新聞を拾い読みながら時々整備工達の姿を眺めた。

空調はないけれど、好きなラジオ局に合わせて音楽を流し、冗談を言い合いながら仕事をする彼らはとても楽しそうに見える。腕一本で稼いでいるという風だし、冗談のように高価な靴やバッグを売るよりは世の中に必要とされる仕事だろう。

仕事の後のビールは美味いだろうな、と誠は思った。

そして肩を竦めた。誰にでもある事だろうが、自分のしている事が下らなく思えることがあるものだ。ジェームスだって、犬も喰わないような夫婦の諍い事の処理などさせられてこぼしている時がある。

仕事ではないけれど、塩田綾は自分が不倫をしていた頃に、下らない付き合いだと思ったことはあるのだろうか。

「兄ちゃん、終わったよ。あんたの車は古いけど、まだまだ大丈夫」

声を掛けられて、誠は我に返った。いつの間にか、また塩田綾の事を考えていた。

受付で料金を払い、車検合格の証明書を受け取って車に乗り込ん

だ。このままアパートへ帰り、ビーチへ出直すという手もあったが、何となく誠は車を走らせた。

東へ流れるフリーウェイに乗り、カイムキ、カハラ地区を過ぎると、高速道路は途切れ、そこからはカラニアナオレ・ハイウェイになって更に東へ続く。

更に東のハワイ・カイ地区に入ると、右手に海も見えて来る。左手のココマリーナ・ショッピングセンターを横目に真っ直ぐ進むと、信号を挟んでそれまでの平坦な道とは異なって、急な上り坂になって行く。車線も両面一車線ずつになる。

まだまだ大丈夫と太鼓判を押されたばかりだが、少々年のいった誠の車はエンジンを喘がせて坂を上った。ほぼ登り切った辺りに、ハナウマ湾への入り口がある。珊瑚礁とそこに集う魚で有名なこの場所は、州が特別に保護している。

レンタカーが行列を作っているハナウマ湾の入り口を過ぎた時、後ろから凄まじい勢いでクラクションを浴びせられた。

咄嗟にスピードメーターに目をやり、バックミラーを見た。のんびり走り過ぎたかと思ったのだが、針は規定の速度より十マイルも上を指している。そもそもハワイのドライバーはのんびりしていて、ちょっとやそっとの事ではクラクションなど鳴らさないのが普通だ。

バックミラーには、どこかで見たような大型のバイクが写っていた。ドライバーは大きめのサングラスをしているので顔が見えない。

ハワイ州の法律は、十八歳以上ならばバイクやスクーターの運転に、ヘルメットの着用を義務付けない。彼は大きく口を開けて何か叫んでいる。多分もっとスピードを上げるか、脇に除けて先に行かせろと言っているのだろう。

誠はむっとした。常識で考えて迷惑になる程のスピードではあるまいし、この道路を越えて行くとあるクイーンズ・ゲイトやカラマ・バレーに急用があるのなら、上り坂の手前の信号から伸びるルナリロ・ホームロードを通った方が早い。

要するにバイクの彼は、ただ飛ばしたいだけなんだろう。アクセ

ルを踏む足を、誠はわざと緩めた。制限速度以下に落とし、ついでに煙草を取りだして火を点けた。

道路は一車線のまま海沿いに向かって延びている。暫くは海に面した崖をカーブが続いて、見晴らしは実に良いがそれに気を取られれば大事故になる。追い越しなどは以ての外だ。

バイクのドライバーはついに中指を立てた。車体が大きいため、スクーターのように歩道側をすり抜ける事は出来ないし、対向車も途切れないので誠の車は追い抜けない。

煙草の煙を出す為に窓を少し開けると、それだけで彼の罵声が耳に入った。聞き覚えのある声に、誠はバックミラーを注視した。

ホノルル、というかオアフ島の狭さは時々嫌になる。ナナウエだった。

ナナウエは、車の運転手が誠だとは分かりようがない。声を張り上げて罵りつつ、車を煽り始めた。バイクの前輪を車のバンパーぎりぎりにまで近付ける。同時にクラクションも鳴らした。

対向車のドライバーが驚いた顔をしたのが、一瞬だけ見えた。海沿いで一度カーブを回ると、下り坂になる。

誠は対向車が来ているのを確認して、車内で右手の中指を立て翳してみせた。車外に出すと、対向車へのものだと思われる可能性もある。後ろへ引くようにしたから、ナナウエには見えた筈だ。クラクションが一際大きくなった。

カーブを数回通り抜け、右手にある最初の展望台を過ぎてから、誠は次の展望台に車を乗り入れた。頭に血が上ったナナウエは追い掛けて来るだろう。殴られる前に言ってやりたい事は幾つもあった。

海への眺望が素晴らしい展望台には、他にも何台か車が停まっている。予想通り、ナナウエがついて来た。他の車と少し離れた場所を選んで車を停め、エンジンを切って素早く車外へ出る。

ナナウエはバイクに跨ったまま、少し意外そうな顔をした。しかし、表情から怒りが消えた訳ではない。

「よう嘘吐き野郎、もっと静かに走れねぇのか」

機先を制するつもりで怒鳴りつけた。ナナウエの顔が歪む。
「何だよ、オカマ野郎。やるってのか？」
言いながらナナウエはバイクから降りて、スタンドを立てた。やはり肉体的な威圧感では、とても敵わない。
こっちを見ている人もいるから、いざとなったら息が絶える前に警察か救急車を呼んで貰えるかもしれない。つまらない慰めだけを心に描きつつ、誠は虚勢を張り続けた。
「ふざけんなよ、下らねぇ嘘言いやがって。何が別れてから彼女と会ってないだ。何がシャーク・マンだよ。襲うんなら、ハワイアンを襲え。それが伝説だろ？　出来ないから、新参で弱い日本人の女の子を食い物にしてんだろう。お前は、臆病者の玉なしだ」
怪訝そうな顔をして、ナナウエは誠に近付いた。
「何を怒ってやがんだ。お前、後ろにいるのが俺だと分かってて、ちんたら走りやがったな」
肩でも掴もうとしたのか、ナナウエが伸ばして来た手を、誠は邪険に振り払った。
「当たり前だ。おい、塩田綾はどうしたんだ？　よりを戻したんだろう、知ってるぞ」
鼻息も荒く言いながら、誠は逆毛を立てている猫を連想した。大きな犬を相手に、威嚇の声を上げているのは自分だ。
「何だよ、分からねぇな。俺は嘘なんか吐いちゃいねぇ。誰がお前にそんな下らねぇ事を吹き込んだ？　綾とは会ってねぇよ、もう金もないみてぇだったしな」
長身を屈め、下から誠の顔を覗き込むようにしてナナウエは言った。キスでも出来そうな距離だが、それどころではない。今にもボディフックを繰り出して来そうなナナウエに、誠は歯を剥き出して答えた。
「お前の知った事かよ」
「そうかよ、畜生、どうでもいいや。お前、ハワイアンを襲えって言いやがったな。言っとくが俺はハワイアンだって大嫌いだ」

両の眉毛を吊り上げたまま、ナナウエは誠を睨み付け、誠も負けじと強い瞳を向けた。
「嫌な野郎だ」
顔を傾けて地面に唾を吐くと、ナナウエは半歩下がって着ていたTシャツを脱いだ。今度は誠が困惑する番だった。ナナウエは後ろ向きになって、誠に背中を晒した。
背中の刺青が映画「ジョーズ」を思い出させる。大きく口を開き、牙を剥き出した鮫の絵柄はかなり大きい。口腔中の赤色が鮮やかでないのが、かえって生々しい。
「触ってみろ。鮫の牙の辺りと口の中だ」
ナナウエの意図がさっぱり読めない。しかし、背中を向けつつ殴り掛かるのは不可能だろうと判断して、誠は言われるままにした。
一メートルも離れれば分からないが、近くで見ると、刺青の下の肉には少しだが凹凸がある。指で触れるともっとよく分かる。かなり広範囲に渡って、彼の背中にはひきつれの様なものがあった。
「何だよ、これ？　怪我の跡か？　お前何が言いたいんだ」
ナナウエは振り返って、凄みのある笑みを浮かべた。その中には自嘲も混じっているのを、誠は見て取った。
「お袋が癇癪持ちでな。日本人だった親父を呪って、俺の事は邪魔でしょうがなかったんだよな。馬乗りになって、焼けたフライパンを押し付けやがった。近所の連中が駆け付けなかったら、死んでたろうぜ。俺はお袋も大嫌いだったよ。ハワイアンの文化が何だってんだ。フードクーポンでドラッグ買ってた女がよ。ふん、あいつら襲ったって何にもなりゃしねぇ」
現在では全てカード化されたが、ハワイ州では以前フードスタンプという物があった。低収入者に申請によって発行される商品券のようなもので、スーパーなどで使用出来るが、食料や必要品しか購入出来ない。しかし名前が書いてある訳でもないので、一部では現金の代わりに、そのスタンプを使って闇の売買があったという話は聞いている。

それにしてもわざわざ自分の生い立ちを語って聞かせる、この男はなんだろう。日本人の父親とハワイアンの母親のどちらも嫌っているのは分かったが、喧嘩を売っている相手にする事でもあるまい。

「俺の知った事じゃない。それより塩田綾だ。とにかく日本に連絡するように言え。会ってようが会ってまいが、どうでもいい。好きなだけ金を絞り取ったんだから、それ位したっていいだろう」

会話を締め括るつもりで吐き出すと、ナナウエは皮肉っぽい笑いを返した。

「そっくり返すぜ、俺の知った事じゃない。どうせあの女は金持ちのお嬢ちゃんだ。日本から金を送って貰ってどっかで遊んでるに違いないさ」

反論しても水掛け論になる。誠は黙って車に向かった。

誠が運転席に滑り込む前に、ナナウエはバイクをスタートさせた。

「今度はちんたら走るなよ」と叫び声を残し、走り去って行く。

ナナウエが消えた東側とは逆の、今走って来た方向に向けて、誠は車を動かした。東へ向かえばサンディ・ビーチに出る。ブギー・ボードをする地元の若者が多いビーチだ。ここへ来る前は、その辺りをぶらぶら散歩でもしようかと思っていたのだが、またナナウエと出喰わすような羽目になるのは御免だった。

生い立ちが明るいものでない事は、よく分かった。母親は「ナナウエ」という名前を付けただけでは飽き足らず、肉体的にも虐待していた訳だ。しかしそんな事を誠に言ってどうなるのだろう。

まるで自分の事を気に掛けて欲しいかのようだ。多分、心の何処かが虐待された子供の儘なんだろう。あの露悪的な所もそう考えれば納得出来ない事もない。ただ誠としては、アピールする相手を間違っていると思うだけだ。

明るい気分にはなれなかったが、誠は市街へ戻った。アパートへ戻って着替え、結局休みの残りはアラモアナ・ビーチでいつものように過ごした。

第三章・第一話　「翻弄」

翌日の水曜日はナイト・シフトだった。昨夜はナナウエの事を思い出して不愉快になり、眠りが浅かった。

三時の出勤で、さすがに睡眠不足ということはなかったが、だるさを抱えて店に出た。同じシフトのクルーが、トレイシー、マーク、ジョージに君代という実に気楽なメンバーなのが幸いだった。

ミーティングが終わってフロアに出ると、モーニング・シフトのジャネットが紙切れを手に近付いて来た。

「お客さんから電話があったよ。これ、コールバック・ナンバー」

そう聞いて、誠は首を傾げた。確かにお得意の客には自分の名刺を渡してあるけれど、電話があることはめったにない。記してある名前を見て、やっと分かった。誠にゴールデンの事を教えてくれた由美だった。

スーパーバイザーのティムに断りを入れて、電話を掛ける。二回の呼び出し音の後、由美の明るい声が聞こえた。用件を尋ねる誠に、彼女は甘えた声を出した。

「この間の約束、社員割引使わせて欲しいの。今日、行っていい？」

よほどご執心な商品があるらしい。誠は少し微笑ましい気持ちになった。

「いいよ。いいけど、勤務中はまずいから、休憩の時に来て貰えると有り難いんだけど」

何時でも構わないと言う由美と、時間を約束した。切る間際に彼女は、早口で商品番号と色を叫ぶように言った。

「欲しいのはそれだから、よろしくね」

人を待たせるのは好きじゃない、と由美が言ったのは嘘ではなかったようだ。約束の時間の十分前に、彼女は店に現れた。今日はヒップ・ハングのジーンズに、短いTシャツを合わせている。誠を待つ間、目的の商品とは違う物を次々と手に取って、ためつすがめつ

していた。
　ブランド物の好きな女の子達は、買う買わないに関わりなく商品に触れたがる。無論、触れるだけではなく、手に持ったり肩から掛けてみたりして鏡の前に立つ。それが堪らなく楽しいらしい。
　時間が来たので、誠は休憩に入った。予めティムに伝えてあったので、手回しよく由美の希望の物を購入出来た。特殊加工で革に型押ししてある、シルバーのハンドバッグだ。正規の価格は八百二十ドル。三十五パーセントの社員割引でも五百三十三ドル。それに州税が入った額を、由美は現金で払った。
　商品が入った袋を渡すと、本当に嬉しそうに笑った。
「ねぇ、ご飯の時間なんでしょ？　奢るし、一緒に食べようよ」
　腕を引っ張る由美は、無邪気そのものだ。塩田綾に関する話も聞けるだろう。誠は頷いた。「奢らなくていいけど、行こう」
　近所のハンバーガーショップでトレイを挟んで向かい合うと、由美は改めて誠に礼を言った。
「ありがとうね。このバッグ、ずっと欲しかったの。前ほら、お財布買ってくれたおじさんからお小遣い貰ったから、やっと買えた」
　前回彼女か店に来た時、連れの男との間にそういう雰囲気があったと思ったのは、気のせいではなかったようだ。あまりにも無邪気に言う彼女に、誠は苦笑した。
「そんなに欲しかったの？」
「そうよ、馬鹿にするかもしれないけど、でもこういうものには魔力があるの。一度頭に引っかかったら、買わなきゃいけない気になるの。誠さんは、『オヤジと寝てまで』って思う？」
　彼女の言う「魔力」とやらを持つ商品を売っている身としては、何とも言えない。誠はあやふやに笑ってフレンチフライを口に運んだ。
「いつもおじさんと付き合ってる訳じゃないよ。本当、こういうのは初めてでさ、でも薬も入ってたし、まあいいかって思ってさ」
　ナナウエといい、由美といい、告白週間かなと、誠は頭の中で呟

いた。咀嚼したフレンチフライを飲み込んで、優しげな顔を作った。
「本人がいいなら、俺がどう思うかは問題じゃないでしょ。でも酒や薬が入るとコンドームや色々付けるの面倒臭いって思いがちだから、そっちの方を気を付けないと。妊娠より悪い事もあるし」
こういう事を口に出すと、自分の過去も甦る。
幸い痛い目には遭わなかったが、ジェームスと出会う以前、東京で、あるいはホノルルで、酔った勢いで知らない相手とベッドを共にしたことがある。朝になってコンドームを使わなかった事を後悔し、相手がＨＩＶや他の性病の保菌者でない事を祈ったものだ。女性ならもっと心配する事もあるだろう。
相手の素性、薬物の量次第では命がけのアフェアになってしまう。
由美の顔から一瞬笑顔が消えて、真顔になった。
「嫌な経験あるの？　そういう事言う人、あんまりいないよ」
「誰でも言うよ、こんなこと」
「あたしの周りにはいない。……薬はあんまりやらない方がいいかもね」
そうだね、と誠が相槌を打ち、少しの間二人は黙々と食べる事に集中した。ハンバーガーを食べ終え、唇に残ったケチャップをナプキンで拭うと、由美が口を開いた。
「綾さんの事、何か分かった？」
昨日のナナウエとの遭遇が頭の中に甦り、誠は思わず眉間に皺を寄せてしまった。
「金田さんに会ったよ。塩田さんは元の彼氏とよりを戻したってさ。でも、その彼氏にはシラを切られた」
肩を竦めながら言うと、由美はソーダを啜り、一瞬虚空を見るようにしてから声を低めた。
「実はさ、あたしも気になってたから、あの後も何人かに綾さんのこと聞いたんだよね」
姿勢も低くし、顔をテーブルに突き出すようにして由美は喋る。
誠も釣り込まれて、顔を近付けた。

「そしたらさ、皆、知らないって言ったけど、一人いやな顔した子がいたんだ。いやなって言うより、青くなったって感じかな。何か知ってると思うの。でもその子、金田さんのお気に入りだから、無理に聞き出そうとしたら、ゴールデンに出入り禁止になっちゃう。あたしは出来ないけど、何だったら誠さん聞いてみてよ」

手掛かりが途切れたと思うと、予想しない形で別のそれが現れる。引き摺られているような、翻弄されているような感覚を味わいながら、誠は曖昧に頷いた。

「じゃあ、今日、仕事が終わったらゴールデンに来て。分かるでしょ、二階のバー。あたしもそこにいるから、どの子かこっそり教えてあげる。今日ならパーティーもないし、皆あそこで溜まってると思うの」

てきぱきと決めてしまって、由美は晴れやかな顔をして微笑んだ。悪人でない事は分かるのだが、どうも誠には彼女のような人間は今一つ理解しかねる。取引めいた事をしてみたり、金銭の為に誰かと寝たりしながらも、塩田綾の事を気に掛けている。

「親切なんだね」

皮肉っぽくならないように気を付けながら、言ってみた。驚く程大きな声で、由美は「そりゃそうよ」と反応した。

「あたしだって、何かあって家族に連絡しなくなったら、誰かに捜して欲しいもん。誠さんみたいに格好いい人だったら言うことないけど、そうじゃなくても心配して欲しいじゃない？　万が一の時のために、クドクは積んどこって感じ」

「クドク」が功徳だと分かるまで、数秒かかった。由美の口から「功徳」などという言葉が出るとは思わなかったせいだ。意外性に富む女の子だ。自分がストレートでも交際したいとは思わないだろうが、何処か憎めない。

十二時少し前にはゴールデンに行けるだろうと由美に告げ、誠は店に戻った。

第三章・第二話　「新たな情報提供者」

夕食前にワイキキの町を歩き、ついでに買い物をする客で、店は盛況だった。モーニング・クルーがほっとした顔で食事から戻って来たナイト・クルーを迎える。

今日の担当は一階だった。洒落たキャリーバッグを買おうか買うまいかと迷っているカップルに、それらしく説明していると、突然大声が聞こえた。

日本語が不得手なジョンが困惑仕切った顔で誠を呼んだ。ショウ・ケースの前で、初老の日本人女性が仁王立ちになっている。嫌な予感で笑顔を少し強張らせながら、誠は日本語で客に話し掛けた。

「あんた、日本語出来んの？」

日本語を使いながらも、手振り身振りを交えながら彼女が言うには、購入してから一度しか使用していないバッグが変色した。ついては同じ商品か、同額の物と交換して欲しいとの事だった。

誠はショウ・ケースの上に置かれたバッグに目をやった。どう贔屓目に見ても、かなり使い込まれている。変色したと彼女の主張する部分は革の縫合してある所で、そう言われてよくよく見れば、僅かに変色していないこともない程度だ。しかもバッグの型は定番ではなく、とっくに製造中止になっている四、五年前の物なのだ。

「モンスター・クレーマー」というヤツだろうかと思いつつ、誠はマネージャーのシルビアを呼んだ。

生憎とシルビアは日本語が出来ない。結局、客とマネージャーの間に入っての押し問答を、一時間以上通訳させられた。

不毛な平行線の通訳をしながら、もしも店で扱っているのが、五十ドル程度のバッグだったらこんな事は起きないのではないかと思ったが、クレーマーはどこにでもいるだろう。

散々汚い口を叩いた客が帰った後、同じフロアのジョンが驚く程元気な接客を続けたお陰で、閉店時にはすっかり疲れてしまってい

たが、トランクを含む旅行鞄を幾つか売って、一時間の無駄は取り戻すことが出来た。

閉店作業をしながら、今晩ゴールデンへ行くに当たって、又ジョージに同行してもらうかどうか考えた。言えば彼は来てくれるだろうが、そう度々付き合わせるのも気が引ける。子供でもあるまいし、と思い一人で行く事にした。

店を出る直前に、マークが馴染みのゲイ・バーで一杯やろうと声を掛けて来たが、断った。

ゴールデンの前の通りは路上駐車が許可されている。空いているスペースに車を停め、上着を脱いでトランクに放り込んだ。誠の愛車は年寄りなので、車上荒らしに遭う事はまずないとは思うけれど、どんな物にしろ車外から見える場所には置かない事にしている。

ホテルのエントランスに入ると、頭上からかなりの音量の唄が流れて来た。バーで流している音楽に違いないが、この時間にこのボリュームでは、宿泊客から苦情が出ないのだろうか。日本のバンドもしくは歌手だ。誠は聞き覚えがない。多分流行りの曲なのだろう。

階段を上り切って、バーに足を踏み入れたのと、由美から声が掛かったのはほぼ同時だった。周囲の若者達が「友達？」と尋ねている。入り口に近い席に座っていた由美は、素早く誠の所までやって来て腕を取った。

「ごめん、せっかく来てくれたけど、今夜は駄目そう」

音楽のせいもあるのだが、耳に口を寄せて小さい声で言うので、誠も自然に小声になった。

「何で？　例の子、来てないの？」

「来てるんだけど、薬入ってるらしいし、それにすごく酔っちゃってて、話なんか出来ないよ。とりあえず、どの子かだけ教えてあげるから、何か飲んでてよ」

腕を引かれるままに、由美の座っていたテーブルに腰を下ろした。同じテーブルに座っていた一組の男女に由美の友人として紹介され、名前だけ簡単に名乗った。ふと気が付くと、少し離れた席からしき

りと手を振っている男がいる。よく見ると、先日話をしたタカシだった。

注文したビールを飲みながら、由美と、その友人二人と他愛ない世間話を暫く続けた。

二十分程経っただろうか、由美が誠の肘をつついた。

「今、こっちに向かって来る子。あんまり露骨に見ないでね」

言われた通りにさりげなく首を回すと、テーブルの間をよろよろとカウンターに向かって歩く女の子が見えた。

身長は百六十センチ弱だが、おそろしく痩せている。ジーンズ地のミニスカートから覗く足は、棒のようだ。シャギーの入ったストレートの長い髪は金髪に近い色に染めてある。

カウンターで飲み物を受け取った彼女に、由美が声を掛けた。「緑ちゃーん」と呼んだ声はそれほど大きくなかったのに、呼ばれた方は、誠が飛び上がりそうになった程の声で返事をし、危ない足取りで近付いて来た。

「由美ちゃん、この人彼氏？　カッコいいね、緑もカッコいい彼氏が欲しいよー」

小さめの顔にぱっちりした目、顎のラインもすっきりしていて、今風の顔とでも言うのだろうか。化粧は濃いが、もし瞳の動きが正常で、きちんと呂律も回っていたら可愛いと思ったかもしれない。

緑は最初に由美に凭れ掛かり、ついで誠の方に倒れそうになった。体をぐらぐらさせながら「あー、気持ちいい」などと言っている。なるほど、とてもまともに話は出来まい。

由美と一緒に緑を元いた席までエスコートし、席を立ったついでに、誠はそのまま帰る事にした。

「綾さんの件じゃなくても、ここに遊びに来てね」

バーを出る際に由美はそう言って手を振った。

アパート迄のたった十分の間、ハンドルを握りながら誠は又もや、塩田綾について性懲りもない憶測を巡らせた。彼女は「前の彼氏」とよりが戻ったと金田氏に告げた。という事は、とにかくナナウエ

と接触があったのには違いない。
もっとも、塩田綾が金田氏に真実を告げていたと仮定しての事だが。逆に嘘だとするならば、理由は何だろう。ゴールデンに出入りしたくなくなるような事が起きたか、或いはもっとうがって、金田氏から遠ざかりたかったという見方も出来るかもしれない。
頭の中を整理する意味で、誠は仮説に番号を付けた。まず一番は、塩田綾が真実を告げており、ナナウエとの接触の上で姿を眩ました。
二番は、よりが戻ったというのは嘘で、ゴールデンに立ち入りたくなくなった。理由は日本人仲間との間にトラブルか何かが起きた。もしくは、ゴールデンではなく金田氏から遠ざかろうとした。
三番は、一旦ナナウエとはよりが戻ったものの、再び別れた。ゴールデンに出入りしないのは、別な理由による。考えられるのはこの位だろう。そして、緑はおそらくそれに関わる何かを知っているらしい。
これは断言出来ない。素面の時に聞いてみたら、実は他愛もない誤解だったという可能性も高い。
誤解の可能性について考えると、急に疲れが出た。仮説の三番目のケースであれば、今までの努力は徒労になる。アパートの駐車場に車を入れ、エレベーターを待つ間も壁に寄り掛かってしまった。
ジェームスはとっくに白河夜船の時間だ。大きな音を立てないように気を使いながら、キッチンへ行って水を飲む。冷蔵庫の扉には例によってジェームスからのメッセージが貼ってあった。
「明日、君はモーニング・シフトなのでさっさと寝るように」
短いメッセージに、誠は舌打ちした。明日が、正確には今日だが、モーニング・シフトだという事をすっかり忘れていた。
シャワーを使って寝間着のTシャツとショートパンツに着替え、マットレスを敷いた。念のために携帯を確認すると、兄からのメールが入っていた。

第三章・第三話　「有名人」

「返事が遅れてすまん。塩田院長のお嬢さんの件だが、本当に迷惑をかけている。お前に愚痴を言うのはおかしいが、俺は少々呆れてきた。この前メールをもらってから、何度か院長先生とその話をしたが、『何とかならないか』の一点張りだ。

院長先生は、お嬢さんにはかなり立腹している。心配しているから怒っているんじゃない。自分を煩わせていることに立腹している。彼がどういう人間か分かっていたつもりだが、呆れる。

しかし、俺が呆れてばかりいても始まらない。段々に警察と領事館に届けを出すように説得するつもりだ。その届け出はお前に頼まなくちゃならんだろうが、それ迄に、もしお嬢さんが見付からないならそれで仕方ない。

万が一何か情報が入ったら知らせてくれ。　最後に、美穂が送って欲しい物はないかと聞いている。今回、迷惑を掛けているのは、あいつも承知だから、何でも遠慮なく言ってくれ」

珍しく自分の感情を露わにした書きぶりだ。兄も一杯やりながら、腹立ち紛れに書いて寄越したのではないかと誠は思った。塩田綾の父親は、塩田文美のメールにあった通り、なかなか分からない人物のようだ。

しかし、塩田綾が不倫をして病院に勤めていられなくなったという過去を、兄は知らない。家族は必死で隠したのだろう。念書まで書かせたという相手の妻と、綾の父親の間で取引があったのかもしれない。

ベランダに出て、煙草を吸った。何故か今日、由美の言った言葉が甦った。「功徳は積んどこ」というそれは、エコーがかかったように頭の中で反響し、煙草を消して室内に戻る時も、誠は「功徳、功徳」と呟いていた。

いくら若かろうが、ナイト・シフトに続いてのモーニング・シフトというのは疲れるものだ。第一、ジェームスが言う程には、自分は若くないと思う。

そんな事をぶつぶつ言いながら誠はマットレスを畳んだ。睡眠足りて元気一杯、誠を叩き起こしたジェームスはやたらと爽やかな顔をしている。白い歯を零しながら、誠のトーストを焼いてくれた。

濃いコーヒーのお陰で、少しすっきりした気分で出勤したのだが、店に着いて、ミーティングでフロア担当の割り振りを言い渡されると、再びげんなりした気分に戻された。

二階の担当は良かったが、人の売り上げをさらうのが得意な雪子も一緒なのだ。仕方ない。今日の売り上げは諦めて、同じフロアのショーンと無駄話でもするしかないと誠は腹を括った。

とはいえ客が入店すれば、接客せざるを得ず、客が意思決定した瞬間を狙って雪子に滑り込まれるという、不愉快な目に遭った。

ショーンなどは英語で「在庫を確認しますので」と言っている間に、一足早くストックルームから商品を持って来た雪子に、セールを掠められて硬直していた。

三回も立て続けにセールを盗まれ、ついに頭に来たショーンが雪子に「話がある」と言ったのは、十二時近かった。二人の間に不穏な空気が立ち込め、ショーンが声を少し高めにした時、階段を上がって来る足音が聞こえた。

同時に雪子はもう、階段の上がり口まで移動していた。

大声で何か話しながらフロアに入って来た、三人の中年日本人男性を見て、誠は、おやと思った。その中の一人に見覚えがあったからだ。続いて上がって来たのは、今日は一階担当の君代で、手にパッケージから出していない商品を持っていた。

一階で商品を決めた客が、二階で引き続き買い物をする場合、最初に接客したセールスは客に付いて行く事になっていて、その後のセールも当然最初のセールスの売り上げになる。

ところが君代は、手にした商品を雪子に手渡した。

「あらっ、いいの？」
二オクターブも高い声を出した雪子に、君代はにっこり微笑んだ。
「いいんですよ、私、今日は風邪気味で、あんまりやる気ないんです」
いそいそと三人の客に近付く雪子を横目で見やり、君代は誠の方へやって来ると、袖を引っ張ってフロアの仕切りの影へ連れ込んだ。
「まこちゃん、あの客、誰だか知ってる？　あれ俳優よ」
見覚えがあった筈だ。言われると彼の名前も思い出した。性格俳優などと呼ばれてドラマに多く出ていたと思う。納得顔の誠に、君代は小さい、しかし厳しい声で言った。
「あいつ、性格最悪よ。客としても最低の部類ね。近付いちゃ駄目、雪子さんに接客させておくのよ。ショーンにも言っておいて」
君代が客をあいつ呼ばわりするのは、実に珍しい。よほど一階で嫌な目に遭わされたのだろう。言うだけ言うと、君代は身を翻して階段を駆け下りて行った。
それからおよそ三十分の間、誠は他の無難な客を相手にしつつ、雪子が冷や汗を掻く様子を見て溜飲を下げた。
彼らは商品を次々に手にとっては放り出し、決めたかと思えば、気が変わったと言い出した。ストックルームから商品を取って来る雪子に遅いと文句を付けたり、ディスカウントをせびったり、挙げ句の果てには「おばちゃんじゃ駄目だ。下から可愛い子呼んで来いよ」と言い出した。
何より言葉遣いが横柄なのに、誠も驚いた。何か言われる度に雪子は赤くなったり青くなったりしている。
有名ブランドともなると、当然有名人もやって来る。ましてハワイは日米の芸能人、スポーツ選手がよく訪れる。誠の勤める店では、客が誰でも特別な待遇はしない事になっているが、中にはそれを求める俳優や歌手もいる。
あるハリウッド女優が来店した際、自分が店内にいる間は他の客を入れるなと言い出して、マネージャーを苦笑させたことがある。

もっともそういった有名人は一握りで、人気商売という事もあってか、気持ちの良い客であるのが大半だ。バッグや靴を買って、本当に嬉しそうな顔をしているのを見ると、思わずファンになりそうになる。今日の雪子の客は、大はずれの部類だ。

店では最後にレシートを渡す際、ホテル名と部屋番号を聞く事になっている。雪子が俳優にホテル名を尋ねると、彼は「何で？　夜這いは迷惑だよ」と雪子をからかってから、ゴールデンという名を口にした。

彼らが出て行った後、ほんの少しの間フロアに佇んでいた雪子は、目をしばたかせながら一階に降りて行った。きっと君代に愚痴を聞いて貰いに行ったに違いない。誠はショーン目を見交わしてちょっと笑い合い、それから何となく落ち着かない気分になった。

ゴールデンの名前を聞いたからだ。由美は有名人と知り合う機会も多いと言っていたが、今の俳優のように横柄な人間と知り合っても、不愉快な思いをするだけではないか。無論、そうでない人も多いのだろうけれども。

午後になってランチ休憩を挟んだ後も、塩田綾や由美の事が頭の隅にずっと引っかかったままだった。仕事が手に着かない程ではないが、日本人の女の子が入って来るとはっとした。

終業時間が来ると、誠は急いでアパートへ帰って着替えをした。何となくゴールデンへ行ってみようという気になったためだ。運が良ければ、素面の緑に会えるかもしれない。

前回と同じようにホテルの近くに路上駐車し、エントランスを潜った。

馴れた足取りでバーに入る。時刻は午後七時近くになっていたが、店内は閑散としていた。観光客と思しき日本人客が二組ほどいる。すっかりあてが外れて気落ちした誠は、そのまま帰ろうかと思ったが、気を取り直してカウンターに座った。

バーテンダーは、気の良さそうな白人の若い男だった。ベストに蝶ネクタイではなく、アロハシャツにククイナッツのレイをかけて

いる。

「何にします?」と聞いてきた口調に、気が付いたが、何も言わなかった。彼も多分、誠と同じ、いや、より正確にはマークと同じ人種だろう。誠がボストン産のビールを頼むと「ああ、僕もそれは好き」と言ったその話し方で確信した。

彼が誠をゲイだと見破ったかどうかは定かではなかったが、手が空くと話しかけて来た。

「誰か待ってるんですか?　入り口を気にしてるようだけど」

どうも我知らず、何度も振り返っていたようだ。誠は苦笑した。

「待ち合わせじゃないんだけど、会えたらいいと思ってね。緑って若い日本人の子、知ってる?」

バーテンダーは急に白けた顔付きになった。緑が好きでないのか、彼女の名前を出した誠に興味を失ったのかどちらだろう。だが、すぐに商業的な笑顔を取り戻した。若いに似合わず、チップを貰う仕事をしているだけあって、笑顔を作るのは上手い。

「知ってますよ。彼女、ここの常連ですから。さっき女友達と待ち合わせて食事に行ったみたいですよ。知ってます?　近所のイタリアン・レストランだけど」

彼の挙げた名前には聞き覚えがなかった。バーテンダーは簡単に道順を教えてくれた。

「ここでも、食事は出来るでしょう?　この間食事したけど、美味しかったな」

礼のつもりもあって誠がそう言うと、彼は肩を竦めた。

「パスタはね、ここのは不味いってあのお嬢さん方は言ってますよ」

食事が終わっても、ここへ又やって来るとは限らないし、待ち続けるのも苦痛だ。食事中の緑にいきなり話し掛けるかどうかは別として、そのイタリアン・レストランを覗いてみる事にしようと、誠は席を立った。「後であのビールでも飲んでくれ」と、多めのチップを彼に渡す事も忘れなかった。

第三章・第四話　「待ち合わせ」

教えられた道順の通り、誠は海側へ向かって歩きながら、俺は馬鹿な事をしているのかもしれない、と考えた。

兄がメールでああ言って来た以上、塩田綾の捜索は打ち切ってもいいのだろうし、緑を追い掛け回す必要があるのだろか。カラカウア・アベニューを渡り、レストランが近付いた頃、誠は自分への言い訳を思い付いた。わざわざ出て来たから、空手で帰るのが嫌なだけだ。

レストランは小振りの気取らない雰囲気の店構えだった。通りから店内が見渡せる。緑は入り口から遠くない席に、友人らしい女の子と向かい合って座っていた。通りの方を向いているが、無論、瞳は友人の方に注がれている。

少し考えて、誠は店の入り口に立った。木製の代があり、メニューが広げられて載っていた。そのメニューの脇に、店の名前と電話番号などを記したカードが何枚かある。カードを一枚取って、テーブルに案内するためにやって来たウェイトレスに、愛想笑いをした。

「いや、俺は彼女達の連れなんだけど、ちょっとペン貸して貰えます？」

彼女がシャツの胸ポケットから出したペンを受け取り、誠はカードの裏に、自分の名前と電話番号を書いた。由美には教えなかったが、仕方ない。ウェイトレスに礼を言ってペンを返し、誠は緑に近付いた。

「食事中すみませんけど、緑さんじゃないですか？」

驚いて顔を上げた緑に、誠は笑顔を浮かべたままで構わず続けた。

「この間、ゴールデンでお会いしましたよね。覚えていませんか？

残念だな、本当に残念だ。せっかくお知り合いになれたのに。これ、僕の連絡先です。お暇な時に食事でもどうですか？」

意外だったが、緑は別に嫌そうな顔もせず、「ごめんね、覚えて

ないの」と笑顔まで見せ、対面に座っていた女の子は冗談ぽく「どうせ、また酔ってたんでしょ」と笑った。ただのナンパだと思われないように、誠はカードを手渡す時に腰を折って、緑に顔を近付けた。

「塩田綾さん、御存知ですよね？　話が聞きたいんです」

低い声で早口に言ったのだが、きちんと聞こえたようだ。緑は笑顔のまま硬直し、フォークを取り落とした。「いつでも、お時間のある時に」と誠が微笑みながら付け加えると、僅かに唇を震わせた。

「今日は……、今夜はパーティーあるから」

直ぐにと言った訳ではないのに、大した動揺振りだ。緑の反応には誠も内心大いに驚いていた。しかし顔には出さないように努め、笑顔のまま「じゃ、連絡下さいね」と、会話を締め括ってレストランを後にした。

車へ戻る道々、緑から連絡が来るのは、五分五分の確率だと考えた。

動揺するような話題だからこそ、話したいという場合もあればその逆もある。誠が緑にその話題をぶつけた事で、誰が緑の名前を誠に伝えたか、彼女がゴールデンの常連を詮索しない事を祈った。

由美に迷惑が掛かるのは心苦しい。彼女はゴールデンに出入り禁止になる事を恐れていた。

パーティーがあると言っていたため、当然その夜は、緑からの連絡は期待出来なかった。

翌日の金曜、誠はやや期待して、クロージング・シフトの仕事中もこまめに携帯電話をチェックしていたが、緑からの電話はなかった。どうやら彼女は、塩田綾についての話はしたくないようだと誠は踏んだ。

土曜日は休みだった。前の晩、随分夜更かしをし、ついでに体力も使ったというのに、ジェームスは件の「我が儘」な依頼人に呼び出され、朝八時にはアパートを飛び出して行った。誠はそのまま眠り続け、目が覚めると十二時を回っていた。

出掛ける際に、ジェームスは何時に用事が済むか言っていった筈だが、さっぱり覚えていない。彼の携帯電話に電話したが、まだ依頼人と面談中と見えて出なかった。電話をくれるようにと伝言を残した。

キッチンへ行ってコーヒーをいれ、リビングルームのカウチで煙草と共に楽しむ。ジェームスが帰ってくれば、サーフィンに行くと言い出すか、掃除をしようと言い出すに違いない。掃除は避けたい気分だったので、先手を打って映画にでも誘おうかと作戦を考えていた所へ電話が鳴った。

てっきりジェームスだと思い込み、表示も見ずに出ると、掠れた日本語が「もしもし」と言った。

「桜井誠さん？」

掠れた声のせいで、一瞬誰だか判別出来なかったが、分かった。緑だ。

「緑さんでしょう。塩田さんの……」

「あのさ、今晩十一時頃に『ブルー・カレント』に来てよ。友達といるから、『踊らない？』って声掛けて」

誠の言葉を遮って、緑は面倒臭そうに言う。

「今、時間ないのよ」

「分かりました。十一時に『ブルー・カレント』ですね」

確認の言葉も終わるか終わらないかの内に、電話は切れた。誠は頭の中で緑の口調を反芻した。苛立っているような、投げ遣りな風にも聞こえた。

「ブルー・カレント」は、ダウンタウンに程近い場所にあるナイトクラブだ。呼び出しておいて、いきなり怖い兄さんをけしかけるんじゃないだろうな、という不安が過ぎったがすぐに打ち消した。

例えバウンサーに幾らか握らせたって、人の多い週末のナイトクラブでそんな事は不可能だ。緑には、誠に会う事を知られたくない相手がいるのだろう。それこそ面倒な話だが、話題を振ったのはこっちだし、行かない訳にはいかない。

再び電話が鳴った。今度こそジェームスだった。「Ｗｈｙ　ｄｏｎ't　ｗｅ　ｇｏ　ｔｏ」と言いかけた誠を遮ってジェームスは早口で、かつ高らかに宣言した。

「これから昼飯を買って帰る。そしたら掃除と洗濯。出掛けるのはその後。君の考えてる事なんか、お見通しだ」

これだから休みが週末になるのは、あまり有り難くもない。

二十分程でジェームスは帰って来た。ジェームスの買って来たチャイニーズ・プレートランチを食べながら、今夜の待ち合わせについて話すと、彼は鼻を鳴らした。

「俺は日本人の女の子の考える事なんて想像もつかないけど、何かあんまり穏やかじゃないな」

今までは経過を話しても、そうかいとしか言わなかったジェームスが珍しく自分も行ってもいいと申し出た。彼も緑の提案に不自然さを感じているようだ。誠は柔らかく断って、何かあれば電話をすると約束した。

食後はジェームスが宣言した通りに掃除と洗濯を二時間もかけて行い、映画へ行き、帰りに日用品と食料品の買い出しをして、アパートに戻って来ると、もう八時過ぎになっていた。久しぶりに二人で、新婚の夫婦のような休日を過ごしてしまった。

十時を大分過ぎた頃になって、誠は出掛ける支度を始めた。支度と言っても大したものではない。着る服こそ違っても、仕事に行く時と似たようなものだ。財布に現金がある程度入っている事だけ確認して、誠はアパートを出た。

「ブルー・カレント」は、誠が最初に由美に出会ったナイトクラブと同じ敷地にある。他にもレストランやバーが軒を連ねているので、週末はかなりの賑わいだ。誠はまず駐車場が空いているかと心配し、ついで「ブルー・カレント」に入るのに並んで待たなくてはならないかと心配した。

六階建ての立体駐車場はほぼ満車状態で、誠は駐車スペースを見付けるのに二十分も駐車場の中を彷徨った。しかし、「ブルー・カ

レント」には十分程列に並んだだけで、あっさり中に入る事が出来た。

入ったはいいが、誠は途端にうんざりした。狭いナイトクラブではない上、おそろしく混んでいる。緑から話があった時には、なんとか見付かるだろうと高を括っていたのだが、実際来てみると非常に手間の掛かる作業だと気が付いた。

一々謝りつつ人を掻き分けてテーブル席を一つ一つ覗く。緑はテーブル席にいるとは言っていなかったが、そこの方が見付け易いという事位は考えているだろう。いや、考えていて欲しかった。

元々人混みは得意ではない。雑踏に身を置く方が安心する、というような都会派だったら、そもそもハワイなんかには長く住まない。そんな事を考えながら緑を捜していると、すぐに人いきれで汗が滲んで来た。

漸く緑を見付けたのは、約束の時間を二十分も過ぎた頃だった。奥まったテーブル席に座りながら、それでも緑は通路を向いて座っていた。連れは二人。どちらも緑と同じ年頃の女の子だ。一つ呼吸を整えて、誠は彼女達のテーブルに歩み寄った。

「ねぇ、踊らない？」

第三章・第五話　「密談」

隣のテーブルとの間に体を割り込ませるようにし、いきなり緑に向かって話し掛けたので、通路側に座っていた緑の連れ二人は面食らったような顔をした。薄暗い照明の下でも分かる程、二人とも可愛い顔立ちをしてはいるが、そんな照明の下でも分かる程、どことなく荒んだ雰囲気がする。

「なぁに、いきなり」

連れの内、ショートカットの女の子が眉を寄せた。緑は値踏みするような顔で誠を見ている。

一瞬、彼女は約束を忘れ去っているのではないかと心配したが、万一そうでも、ナイトクラブで女の子をダンスに誘うのは、別に悪い事ではない。誠はセールス・スマイルを作った。

「いいじゃないか、踊ってよ」

わざとらしく手を差し出すと、やっと緑が反応した。誠の手を取り、「しょうがないなぁ、ちょっとだけだよ」と、スツールから体を滑らせる。

もう一人のセミロングの連れに何か耳打ちすると、緑は誠の手を握ったまま、ダンスフロアに向かって歩き出した。声を掛けろという指示には従ったものの、本当に踊るとは思っていなかった誠は少々慌てた。

「約束、覚えてますよね？」

大音量の音楽の中、耳元で話しても大きな声を出さざるを得ない。緑も誠の耳に噛み付くようにして言葉を返して来た。

「覚えてるけど、ちょっと踊ってから抜けよう」

緑がどういうつもりでいるのかさっぱり分からなかったが、ここは言う通りにするより他ない。混雑するダンスフロアに引っ張り出され、緑と暫く踊った。

ナイトクラブで踊る事自体は決して嫌いではないが、こういう状

況では楽しいとは言い難い。緑は大分アルコールが入っていると見えて、時々誠が支えてやらなければならなかった。

芋洗いのプールのようなフロアで三曲立て続けに踊ると、汗だくになった。これで緑も多少アルコールが抜けて、塩田綾の事についての話をきちんと出来るのではないかと淡い期待を抱きつつ、誠は尋ねた。

「もっと、踊りたい？」

額の汗を拭って、緑は首を振った。「出よう」とだけ言って、再び誠の手を取り、今度はエントランスの方に向けて歩き出す。店内は誠が入って来た時よりも更に混雑していて、人の間を縫って歩くのも困難な程だ。

何とか外へ出ると、かなりの行列が出来て入場待ちをしている。思う存分新鮮な空気を肺に送り込んでから、誠は緑に話し掛けた。

「どこか他の店にでも入る？　静かな方が話し易いよね」

いつの間にか敬語を使うのを止めてしまっていたが、緑が気に留めるとも思わなかった。

「ここに来たのは、車で？」

落ち着かない素振りで緑が聞き返した。外に出て初めて気が付いたが、袖無しのトップもスカートも、緑はかなり高級な物を付けていた。サンダルと斜めにかけている小さなバッグは、誠の勤めるブランドの物だ。腕時計とブレスレットに至っては、誠の車よりも高い。

緑もいつかの由美のように、ゴールデンで知り合った「おじさん」と付き合ったりしたのかと、誠はあらぬ想像をしてしまい、それを打ち消して、「そうだよ」とだけ答えた。

「じゃ、それでどこかに連れて行って。早く行こうよ」

言いながら緑の足は既に駐車場に向かっている。誠は驚いて後に続いた。

「俺と会うのを誰かに知られちゃまずいのかな？」

駐車場のエレベーターに乗ると、ようやく息を吐いたような緑に

そう尋ね、尋ねた後で間抜けな質問だと誠は思った。問題がなければ、こんな回りくどい方法は採らないだろう。緑はまあね、と言ったきり車に乗り込むまで黙っていた。

「古い車だね」

口を開いたと思ったら、そんな事を言う。

「でも、ちゃんと走るよ。途中で壊れたりしないから安心しな」

二十歳かそこらで全身ブランド物を身に付けるような女の子にすれば、誠の車など走る段ボール箱にしか見えないかもしれない。誠は苦笑して、愛車の弁護をした。

「ううん、こういう車に乗ってる人の方が信用出来る」

お世辞にしてもなかなか良く出来た一言を呟いた後、緑はどこか屋外で静かな場所に行きたいと言い出し、誠は頭を捻った。

途中コンビニエンス・ストアでソーダを買い、誠は車をカハラに向けた。カハラに到着するまでに、簡単に塩田綾を探している理由と経緯を説明した。幸い緑は、誰が誠に彼女の名前を教えたかという事に関して、問い質すような事はしなかった。それよりも何か他の事を考えているかのようだった。

ビーチフロントの豪邸が建ち並ぶカハラでも、ビーチ自体は公共の場所だ。私有地などに囲まれてアクセスが難しい場所はあっても、ハワイにプライベート・ビーチなるものは存在しない。カハラも豪邸の間に何ヶ所か細い間道があり、ビーチに行けるようになっている。

車をカハラ・アベニューに停めて、ビーチへ歩いて行けば充分静かだろうと考えた。もっと先にある、ワイアラエ・ビーチパークへ行くという手もあったが、そこは時々若者が溜まって騒いでいることもある。誠の提案に緑はあっさり頷いた。

午前零時を回って、カハラの住宅街は静まり返っていた。路上駐車が禁止されていない事を確認して誠は車を道路の端に停めた。車の後ろに回ってトランクを開け、常備している古いバスタオルを出す。緑のために敷物にするつもりだった。

自分達の邸は美しくライトアップしていても、公共の間道はどうでもよいのだろう。豪邸に挟まれた洞穴のような間道を通って砂浜に出るまで、誠も何となく黙っていた。風が少なく、潮の香りが僅かにする。

半月だが、月が出ていた。

人工の灯りのない場所で月を見ると、それがどんなに明るいものだったかと痛感する。半分に欠けた月が、穏やかに打ち寄せる波を朧に照らしている光景は、なかなかロマンティックかもしれなかった。

間道からほんの十五メートル程離れた場所に大きめの木を見付けて、誠はその下まで緑を誘った。バスタオルを敷いて座る場所を作ってやり、自分もその隣に腰を下ろしてソーダの栓を開けた。

大きめのボトルを一気に半分飲み干して、喉が乾いていた事に気が付いた。「ブルー・カレント」では何も飲まずに、汗だくになって踊ったりしたのだから当然なのだが、大きな溜息が出た。

「一昨日の夜、パーティーだったのね。それが、きつくてさ。何だかもう、いやになっちゃった」

誠の溜息が合図だったかのように、急に緑が喋り出した。

「何だかなー、クスリ呑んでおやじの相手したり、あたし馬鹿みたい」

脈絡のない事を言っているようだったが、誠は由美の話と照らし合わせて納得した。やはり緑の服飾品も、入手の経緯は由美と似たようなもののようだ。

「そういうお付き合いと、塩田綾さんの事は何か関係あるのかな？」

元々その話を聞くために、言われるままに面倒臭い手順を踏んで、緑と二人きりになったのだ。悪いが、怪しげな付き合いの愚痴を聞くためではない。

「ねぇ、する？　してもいいよ」

緑が可愛らしく、多分本人はそのつもりで、首を傾げてみせた。

最初、誠は何の事か分からなかったが、どうやらセックスの事を言

っているのだと分かって、飛び上がりそうになってしまった。これまで様々な誘われ方をしたし、屋外での経験がないとは言わないが、これ程唐突で、かつ露骨なのは初めてだ。

屋外で静かな場所と指定があったにしろ、いかにもな場所に連れて来たのは自分だが、下心があったと思われるのは心外だ。

「何、言ってるんだ。俺は塩田綾さんの話が聞ければいいんだよ」

「したくない？　普通、男の人ってそう聞かれたらしない？」

生憎俺は「普通」じゃないからね、と内心毒吐きつつ誠は呆れた。緑はこれまで、ろくな相手と付き合って来なかったのに違いない。

「俺、ちゃんとした相手がいるから。するんなら、塩田綾さんの話にしてくれる？」

「じゃあさ、やくざの友達いない？　あたしの頼み聞いてくれたら、綾さんの話するよ」

脈絡のなさに面食らいながらも、今度は辟易してしまった。散々引っ張り回しておいて、交換条件を出してくるとは。

由美の時もそうだったが、緑も何かをしてくれなければ情報は与えないという訳だ。しかも、今回は由美の時のように簡単なものではなさそうだ。

もういいよ、と立ち上がって帰りたい気もしたが、どこか壊れているような緑を放り出すのは気が引けた。由美の言い草ではないが、後生が悪いとでも言うのだろうか。

もう一度溜息を吐いて、誠は穏やかに尋ねた。

「何でやくざが必要なの？　やくざって、日本のやくざ？」

「あのね、あたしゴールデンの人達と手を切りたいの」

誠は内心首を傾げた。由美は、緑はオーナー、金田氏のお気に入りだと言っていたし、ゴールデンで初めて緑を見かけた時も、彼女はその立場を甘受して、むしろ積極的に楽しんでいるように見えた。

第一そんな事に、何故やくざが必要だろう。自分で出入りを止めればいいだけの話ではないのか。

「どういう事かな？　話がよく分からないんだけど」

説明を促すと、緑は肩を竦めてから口を開いた。

第三章・第六話　「人間関係」

「ゴールデンの金田さんとか、お取り巻きの人達とかはね、ばれたら困るようなこと、色々やってんの。あたし、それ知ってるからさ。簡単には離れられないと思うのね。やくざの人に頼めば、何とかなりそうじゃん？」

多分非合法の薬物取引などを指しているのだろう。確かに日本に比べれば、そういった物は頻繁に裏取引されているようだ。それにしても、そういう状況で頼れる相手がやくざだと考える、緑の発想には呆れる。

「それで、今度はそのやくざに嚙られるって訳かい？　一番いいのはさっさと日本に帰る事だと思うよ。勉強がしたいなら本土の学校に移るのもいい」

諭すように言うと、緑は唇を突き出した。これも本人は可愛いと思っている仕草なんだろう。

「駄目。だってパスポート押さえられちゃってんの。だからやくざが必要なんじゃん。それに日本になんか帰りたくないもん」

「パスポート押さえられてるって？　誰かにパスポート取られたって事？　そんなの帰省するとか何とか言えばいいじゃないか」

「日本に帰りたいわけじゃないんだってば。ゴールデンの人達と離れて、でもハワイにいるにはやっぱ、パスポート必要でしょ」

アルコールを飲んでいる訳でもないのに、頭が痛くなって来そうだった。

緑は金田氏の後ろ暗い部分を知っていて、仮に金田氏とするが、金田氏は緑のパスポートを持っている。緑は金田氏からは離れたいが、ハワイには住み続けたい。誠には両者共に理解出来なかった。

金田氏の「ばれたら困るようなこと」が薬物に関する事ならば、摂取した緑も同じ穴の狢だろう。それにパスポートを取り上げるというのは、あまりにも子供染みている。そんなもの、紛失したと言

って再申請すればよい。
　誠が再申請の件を口に出すと、緑は「ああ、なんだそっか」と頷いたが、直ぐにまた口をへの字に曲げた。
「あのね、この際だから言うけど、金田さん、ホントに色んな人知ってんの。だから、ただパスポートを再発行したって、嫌がらせとかされると思うな」
「そんなに人脈がある人ならね、なおのことハワイにいちゃ繋がりは切れないよ。他の島にでも行くんならともかく、ホノルルなんて狭いんだからさ」
　緑は膝を抱え込んだ。拗ねているようにも見える。誠は話を締め括ろうと思った。彼女の言っている内容は分かるが、欲する所は理解出来ない。
「とにかく俺はやくざの知り合いなんていないし、いたとしたって君の要求を叶えるのは難しい。俺だったら取りあえず日本に帰るよ。塩田綾さんの話は、したくなければしなくていい」
　立ち上がろうとすると、緑が誠の腕を掴んで強く引いた。お陰で砂の上に豪快に尻餅を着いてしまった。文句を言う前に、緑が困ったように笑った。
「ごめん、でもさ、桜井さんだってハワイに住んでるってことは、日本よりもここが好きだからでしょ？　あたしの気持ち分かんないかな？」
「そういうトラブルに巻き込まれたら、俺は日本に戻る方を選ぶって言ってるんだよ。大体、どうしてそんなに日本に帰りたくないわけ？」
　緑は誠の腕を掴んだままだ。何となく振り解くのが躊躇われた。こういう所がジェームスに言わせれば、意味のない優しさ、つまり優柔不断なんだそうだ。
「こっちの学校もドロップ・アウト状態だし、日本に帰っても出来ることなんてないもん。それにね、うちのお父さん再婚してさ、新しい人、すごいケチなの。性格あたしと合わないし。優しい伯母さ

んいるけど、住んでるとこ田舎なんだもん」
「田舎だって何だっていいじゃないか。このままずるずるハワイで、学校にも行かないで暮らしてたって良い事なんかないぞ。今だって薬なんかやってるんだろ？　その内廃人になっちまうぞ」
「そんなに簡単に、中毒にはならないって聞いたけど」
「それ、誰の言葉？　どうしてそんな事分かるよ？　それにもっとひどい状態になるかもしれないだろ？　今だってまずいと思ってるから、わざわざ俺と会っているんでしょう？　まずいと思える内が花だよ」
　最後の一言に、緑は反応した。身体を震わせて、誠の腕から手を離しすと、自分の体に回した。
「そうだね、まずいと思える内に、何とかしないと」
　俯いてから、もう一度口を開くまで間が空いた。波打ち際から水音が響いた。
「分かった。ねぇ、どうやったら日本にすぐ帰れる？　一番早い方法って、どうしたらいいの？」
　どうやら緑は心を決めたらしい。誠は頭を振り振り、最も簡単な方法を教えた。
　ホノルルには日本の領事館がある。パスポートの再申請は時間が掛かるが、仮旅券のようなものなら直ぐに発行して貰えると聞いている。日本行きの便は、毎日数多く出ている。
「ねぇ、協力してくれる？　あたし見張られてんの。だから今日もわざわざクラブから抜け出すような真似したんだ。全然出歩けないわけじゃないんだけど、アパートにも帰ってないし。領事館てどこにあるのか知らないけど、遠いんだったら行けないよ」
　今度は誠が反応する番だった。アパートに帰っていないというのは、塩田綾の状況と一致する。緑は出歩けるが、塩田綾は軟禁されているのではないか。
「領事館はヌウアヌだよ。ダウンタウンから山の方に上がった辺りだ。ところでさ、塩田さんもゴールデンの何かを知ってて、閉じ込

められてでもいるんなら、二人一緒に帰ればどう？」
「綾さんは」緑は蚊の鳴くような声で言った。
「ゴールデンにはいないよ」
「なんだ、そうか。じゃあナナウエが関係してるのかな？」
緑の帰国に手を貸さざるを得ない展開になって来た以上、出来る限り塩田綾の話を聞き出したかった。
「誰、それ？」
「知らないかい？　塩田さんの彼氏なんだ。金田さんはよりが戻ったって言ってた」
力無く首を振って、緑は更にか細い声を出した。
「それは違うの。協力してくれたら、日本に帰る前に教えてあげる」
「どうしてさ？　今、教えてくれてもいいだろ？」
「駄目。桜井さんはあたしの生命線みたいなもんだから、今、教えられない」
弱々しそうに振る舞っても、実はしっかりしている。誠は舌を巻いた。彼女のような人間とは、あまり付き合った事がない。
肩の力が抜けた気分で、誠はもう一つ溜息を吐いた。
「分かったよ。日本に帰る計画を立てよう」

緑をゴールデンの近所で下ろし、アパートに帰り着いたのは午前三時を大きく回っていた。明日、正確には今日はモーニング・シフトなのだ。すぐにも眠らなければ、仕事が辛くなる事は分かっていたが、目が冴えてしまい。やむなくアルコールの力を借りることにした。
ベランダで濃い目の水割りを啜りながら、立て続けに煙草を吸う。無性に塩田綾という人間に会ってみたかった。
会って、これまでの経緯を話したら、彼女は何と言うだろう。家族の話もメールで貰ったし、学校の事務員、浅井友子や由美にも会った。ナナウエも捜し出した。豪華なコンドミニアムの寒々とした部屋の様子もまだ覚えている。足りないのは本人に会う事だけだ。

部屋に戻り、今度こそ塩田綾に会える事を夢想しながら、誠は眠りに落ちた。

予想してはいたが、目覚めは酷かった。ジェームスが文字通り叩き起こしてくれたお陰で、遅刻の心配はなかったが、朦朧として仕事に向かった。

朝のミーティングで、一階担当を言い渡されたのが有り難い程だった。入って来る客の、七割方は女性物が目当てだから、せっせと二階へ送るだけで済む。同じフロア担当のジョージが、「例の彼女捜しはどうなった?」と、声を掛けて来たが、説明するのも面倒臭く、誠はもうじきけりが着きそうだとだけ答えた。

時折やって来る、男性物目当ての客を相手にしながらも、誠の頭からは緑と立てた計画が離れなかった。

今日は日曜だから、実行は明日だ。協力すると決めたからには仕方がないけれど、体が疲れているせいか、自分は馬鹿々々しい事をしているという思いが何度も湧き上がり、その度にこれで最後だと言い聞かせた。

第三章・第六話　「人間関係」（後書き）

本作はすべてフィクションであり実在の人物・団体等とは一切関係ありません。
特に作中の一部日本人留学生、および日本人ホテル経営者等は、作者の創造である事を再度お断りさせて頂きます。
実際のハワイ在住者の方への誤解をされませんよう、お願い申し上げます。

第三章・第七話　「遂行」

昨夜、計画を立てた後、緑に釘を刺した。
「言っておくけど、どこかで塩田さんを見かけた、なんていう話はなしだよ」
強めの口調で言ったのに対し、緑はきっぱりと答えた。
「それはないよ。これ以上、綾さん、捜さなくて済むようになる」
誠の顔を見てではなく、暗い海を向いて言ったのが気になったが、格別意味はないのだろうと思いたい。
ランチの折にも、その後の休憩でも、大量にコーヒーを流し込む事で、誠は何とかミスもなく仕事を終えた。夕食を食べに行こうというジョージの誘いを断り、アパートへ帰る。
ユニフォームを脱ぐと、シャワーも使わずにベッドに潜り込んだ。ジェームスが帰って来て起こされたが、半分眠ったような状態で受け答えして、そのまま眠りこけた。
短い夢を幾つか見た。
その中で、誠は日本にいたり、ハワイで学生だったりした。写真でしか知らない塩田綾がいて、緑や由美も誠のクラスメイトらしかった。誠は彼らと笑い合っていたけれど、心の中はどこか別の場所へ行って、誰かと会わなくてはならない焦りで一杯だった。
朝まで眠るつもりだったのに、ジェームスが誠を揺さ振る。
「何だよ、夕食はいらないって言ったじゃないか」
「じゃあ、朝食はどうするんだい？　一体、何時間眠れば足りるんだ？」
言われて目を開けると、室内がすっかり明るくなっている。ジェームスはシャツにネクタイを締めている。今日は法廷に出るらしい。
「朝、起こせって、君が言ったんだぞ。今日はナイト・シフトじゃないのかい？」
体を起こし、顔を擦りながら、誠はやる事があるんだと答えた。

「あの彼女の関連かい？　いいけど、トラブルだけは避けてくれよ。俺はスーパーマンみたいには助けに行けないからね」

もう時間だと、わざと大きく音を立てて誠の唇を吸い、ジェームスは足音も高く部屋を出て行った。続いて玄関のドアが開閉する音が聞こえた。ベッドの脇の置き時計は、八時少し過ぎを示している。

今日は仕事の前に、緑に付き合ってしなければならない事がいくつかある。頭の中で手順を反芻した。大した手間ではないが、面倒臭いことは面倒臭い。

さっさと終わらせて、緑から塩田綾の話を聞き、それで一切を終わりにしたかった。

シャワーを使い、朝食を済ませてから、インターネットでいくつか情報を確認し、九時四十分になった所で誠は立ち上がった。緑との約束は十時だ。財布に現金が残っていることを確認し、アパートを出た。

アパートの前の道路から、車をダウンタウン方向に流れるベレタニア・ストリートに入れる。ほんの数分で着くアラモアナ・ショッピングセンターで、緑を拾う手はずになっている。

ケエアモク・ストリートからカピオラニ・ブールバードを渡って、ショッピングセンターの二階へ繋がる陸橋を上がり、駐車場内をダウンタウン側へ向かう。開店して間もない時間帯なのに、既に駐車場は混み始めていた。

誠はゆっくり車を進め、突き当たりに近い辺りで左折した。ショッピングセンターの西端、ダウンタウン寄りには全米でも有名なデパートが入っている。そのデパートの二階出入り口付近に車を停めた。他の店に行くのにはそれほど便利な場所ではないので、周囲はがらがらだ。

緑がまだ来ていない事を確認して、携帯で日本行きの航空券を扱っているチケットエージェンシーを検索し始めたときに、悲鳴にも似た緑の声が聞こえた。

慌てて顔を上げると、緑が重いガラス扉を押して、デパートから

出て来る所だった。今日も踵の高いサンダルを履いているが、物ともせずに誠の車めがけて走って来る。

誠は車のエンジンを掛けた。緑が勢い良くドアに取り付いた反動で、バッグが車に当たって鈍い音を立てた。

「出して、車。早く」

助手席に滑り込むのと、そう叫ぶのと同時だった。緑の出て来たドアから、日本人の男女が二人飛び出して、こちらに向かって来ようとしている。辺りに停車している車が少ないのをいい事に、誠は白線を無視して車を進めた。

ストップ・サインにも構わず、一気に海側のアラモアナ・ブールバードへ降りる陸橋を走り抜けた。

アラモアナ・ブールバードに入り、最初の角を右折する。ショッピングセンターの西側を通るピイコイ・ストリートに入ったが、ショッピング・センターに戻るつもりはなかった。そのまま山側へ車を走らせた。

「ああ、もうどきどきしちゃった」

まだ荒い呼吸のまま、緑が口を開いた。

「店の中、走り抜けたから、ディスプレイやショウ・ケースにもぶつかっちゃった」

案外明るい顔で笑う緑に、誠の方が眉間に皺を寄せた。

「あの二人は何だい？　追いかけっこなんて穏やかじゃないぞ」

キング・ストリートとヤング・ストリートを越えた所で、誠は左折し、ベレタニア・ストリートに入った。ダウンタウンへ向かうのは予定通りだ。

「金田さんがさ、何か気付いたかもしれないの。夕べのパーティー、パスしたせいかもしれない。今朝、買い物に行くって言ったら、あの二人がついて来るって言い出してさ。絶対、金田さんに何か言われてるって。そんでぴったり着いて離れないし、約束の時間は近くなってくるし。あたし、トイレに行くって言って、まこうと思ったの。でもあの女の方、ミカさんていうんだけど、一緒に来ようとし

たのね。だからもう、走っちゃった」

屈託無く笑う緑に、誠はああそう、としか言いようがなかった。

当初の予定では、航空券を買って、仮旅券を発行して貰ったら、彼女は自分のアパートに戻る事になっていたのだ。しかし、アパートに戻っても、ゴールデンの誰かがやって来るのは目に見えているようだ。

左手に州議会議事堂が見えて来た。ダウンタウンの入り口だ。

議事堂の庭は美しい芝生が植えられて、スプリンクラーが涼しげに散水している。道の脇に植えられた、シャワーツリーの花を横目で見ながら、誠は溜息を吐いた。どうも緑と一緒だと、溜息ばかり吐いている。

「一昨日のことはさ、クラブで会った男と踊ってるうちにその気になって、車の中でエッチしちゃったってことにしてあるんだけど、今日は、ちょっとまずいよね」

わざわざ監視者を付ける所からすると、緑はゴールデン、或いは金田氏の、よほどの秘密を知っているようだ。とはいえ彼らは一体どういうつもりなのだろう。監禁でもしない限り、緑は当然、外部と連絡が取れる。そこまで考えて、誠は嫌な物を感じた。

もしも今まで、彼らが緑は裏切るまいと考えて、念のための監視者だったとすれば、先程の行動で裏切ったと判断されるのではないか。

とすれば、セオリーからいっても、次なる手は口封じだろう。

「もうアパートにも、ゴールデンにも帰らない方がいいかもしれないな」

出来る限り穏やかに誠は言った。言いながら、今夜一晩緑が泊まれる場所を考えた。領事館で仮旅券を発行して貰ったその足で空港へ行くのは難しい。日本行きの便は午前中に殆ど出てしまう。

「そうだね。なんかさ、昨日くらいから金田さんやミカさんの目つきがきつくなっててさ。あたし、怖くなっちゃった。捕まったら薬漬けにされちゃうかもしれない。携帯だって取り上げられちゃった

んだよ」
　表示を確認して、誠はハンドルを右に切り、ヌウアヌ・アベニューに入った。山側へ向けて進んで行く。
「今日、すぐには日本に行けないよね。桜井さん、今晩泊めてくれる？」
　車はヴィンヤード・ブールバードを通り過ぎ、Ｈ－１フリーウェイの上の高架を越えた。少し考えて誠は言った。
「俺のアパートは彼女がいるから駄目だな。ホテル取ってあげるよ。ワイキキの外で、違う名前なら多分、大丈夫だろう」
　領事館に行く前にしておかなくてはならない事がある。誠は近くにある小さなショッピングセンターの駐車場に車を入れた。
　仮旅券の申請には本人の写真や、帰国のための航空券の予約確認書が必要だ。ショッピングセンターに入っているコピーセンターで緑が写真を撮っている間に、誠はチケットエージェンシーで片道の航空券を予約して、Ｅチケットの番号をもらった。
　日本総領事館は決して近代的なビルディングではない。古いコロニアル・スタイルの建物で、却って味もあるし、それだけ古くから多くの日本人に必要とされて来たという事だ。
　領事館の脇の道の路上に車を停めて、重々しく歴史を感じさせる、旧漢字の表示を左側に見ながら敷地内に入ると、腰に銃を差した警備員がすっと寄って来る。
「ご用件は？」と言う言葉は丁寧だが、態度は硬い。誠が笑顔で「仮旅券の申請です」と答えると、体を開くようにして後ろに下がり、日本語で「ドウゾ」と言いながら通してくれた。
　仮旅券の発行にはそれ程時間が掛からなかった。「失くした事に気が付かなかったが、急いで日本に帰らなければならない用事がある」と泣きを入れた緑に、窓口の職員は丁寧に応対してくれた。
　ゴールデンの人間に取り上げられずに緑が持って来た、日本の運転免許証も役に立った。パスポートの紛失届けを出し、仮旅券となる、「帰国のための渡航書」を作って貰った。日本へ帰国する際の

一回限り有効だ。
「今度からは気を付けて下さいね」
という職員の声に送られて建物を出た。時計は十一時少し前を指している。

第三章・第八話　「居場所」

次は緑のために、ホテルを確保しなくてはならない。

アラモアナ・ショッピングセンターから少し離れて、アパートやビジネス・ビルの間にひっそり建っているホテルがいいだろうと誠は思った。あまり敷居の高くないホテルだ。

電話を入れると、空いているとの即答が帰って来た。シングルはないので、ツインをシングル・ユースにして貰う。

料金を尋ねると、カマアイナ・レートと呼ばれる地元民用の値段で八十ドルだと言った。チェックインの時間が三時というのが難点で、誠は追加料金を払う事にしてアーリー・チェックインを申し込んだ。

煙突のように煙草を吸い続けながら、誠が電話をかけている間、緑は大人しくベンチに座っていた。時々バッグの中を覗いたり、化粧ポーチを引っ張り出して化粧を直した位だった。

「これでいいだろう。今晩必要な物の買い物でもしようか？」

段取りは整えたものの、一体航空券とホテルの料金は誰が払うのだろうと、若干不安に思いつつ誠は立ち上がった。航空券は自分のクレジットカードで買ってしまっていたし、ホテルも誠の名前で取った。緑に、支払えないと言われればそれまでだ。

「待って」と言って、緑も立ち上がり、近くに設置してあるＡＴＭを指差した。

「お金、下ろさなきゃ。でもさ、あれって四百ドルまでしか駄目なんだよね。小切手帳（チェック・ブック）はうっかりして置いてきちゃったし、どうしよう？」

どうやら諸々の費用は自分が持つつもりらしい。誠は胸を撫で下ろしながら聞いた。

「クレジットカードとか、デビットカードはないのかい？」

「あたし学生だから、こっちでクレジットカード作れないし、お父

さんの子カードは遣い過ぎて、奥さんに取り上げられちゃった。デビットカードも作ってないの。いつもはさ、ゴールデンで知り合うおじさん達がキャッシュでお小遣いくれるから、困んないのよね」

「ＡＴＭのカードは持ってるんだろう？　じゃあ、銀行に行けば下ろせるよ」

「そうなんだ、知らなかった」

ワイキキから離れた場所で、あまり人が多くない場所がいいだろうと、誠はマノア・マーケットプレイスに車を向けた。ハワイ大学マノア校よりも山の上にあるそこには銀行もあるし、スーパーマーケットもある。

銀行で金を下ろし、スーパーマーケットで買い物をし、ついでに簡単に昼食も済ませた。その間、誠は何度か緑に塩田綾の件を尋ねたが、緑は頑なに首を振った。

「今晩、仕事が終わったらホテルに来てよ。その時、話す」

塩田綾の話が出来なかったため、食事中の話題に困り、誠は緑自身の話を聞いてみた。

「何でハワイに来ようと思ったの？」

オープン・エアのカフェで、向き合って食事をする二人は、傍目には微笑ましい恋人同士に見えるかもしれない。緑はうーん、と考えるようにしてから笑った。

「南の島って、憧れるじゃない？　ハワイならお洒落だし、面白そうかなって思ったの。あたし高校出てから、ファッション系の専門学校行ってたんだけど、つまんなかった」

緑の口調には、いつか君代が話してくれた時の、人生を変えたいというような真剣さは窺えなかった。年齢のせいもあるかもしれないけれど、ちょっと二泊三日の旅行にでも行くような気安さだ。

「それで、ハワイに来て、面白かった？」

こんな状況で、これは愚問だろうとは思ったが、誠は聞かずにはいられなかった。

「最初はね、学校にも行ってたし、英語も頑張って勉強しようかと

思ってた。でもさ、やっぱ英語分かんないし、日本人の知り合いできると、日本語ばっかになっちゃう。ゴールデンでパーティーやったり、芸能人と飲んだり、楽しかったけどそれだけだね。日本に帰ってあたしの人生、どうなっちゃうのって感じ」

「このままハワイに居たら、もっとどうなっちゃうのって感じじゃないか？」

口調をそっくり真似た誠に、そうだねと緑は笑った。ふいに誠は浅井友子を思い出した。緑と同じ位の年齢だからかもしれない。

「日本に帰って、なんかいいことあるかな？」

「いい事は自分で見付けないとね。いい話を見付けるんじゃないよ。ちょっと苦労して、頑張った方が味わい深いんじゃないか？」

浅井友子の事が頭にあったせいだろう。柄にもなく説教めいた事を言ってしまった。ただ、浅井友子はそういう風にして「いい事」を自分のものにしているように感じた。

誠の言葉には何も言わず、緑は椅子の背凭れに体を預けて、聳え立つコオラウ山脈を仰ぎ見た。マノアは、マノア渓谷（パレー）と呼ばれるように、切り立った山の間に位置している。いつもは雨が多いが、今日は青空が山の上に広がっていた。

「こんな風景も当分バイバイだね」

さして感慨深くもなさそうに緑は言った。

食事の後、ホテルに向かい、誠の名前でチェックインして鍵を緑に渡した。何があってもホテルの部屋からは一歩も出るなと言う誠に、緑はさすがに神妙に頷いた。そのつもりでスーパーマーケットでは、あれこれと食料も買い込んだのだ。

別れ際、緑は「仕事が終わったら絶対すぐ来てね」とくどい程に念を押した。

大急ぎでアパートに戻ってユニフォームに着替えた。

こんな事なら予めユニフォームを持って来るのだったと後悔したが遅い。飛ばしに飛ばして何とか遅刻は免れたが、ミーティングでスーパーバイザーのティムに、シャツのボタンを掛け違えていると

笑われた。
すでに一仕事終えた気分で、精力的に接客をする気になれない。あまり混雑しない事を誠は祈った。
誰に祈ったという訳ではなかったけれど、とにかくその願いは空しいものになった。
土、日に店が暇なのはいつものことで、普段なら週明けの月曜もそれ程ではない。ところがその日に限って店内は大変な混雑振りだった。いつもなら一時間貰えるランチ・ブレイクも、早めに切り上げてくれとマネージャーのシルビアに泣きつかれたために、せっかく同じシフトに入ったトレイシーとは、ロクに話が出来なかった。
混雑した店内では、客もセールスも一種の興奮状態になる。セールスが商品を勧める口調も熱を帯び、かつ短時間で客を捌こうとするから断定口調になる。客は客で、外の客がどんどん商品を決め、クレジットカードや現金が飛び交っているのを見ると、釣られるようだ。
緑の目に映ったお洒落なハワイというのは、こういう部分もあるのだろうと誠は思った。
ただし、ごく一部の客を除いては、ブランド・ショップで何百ドルもの買い物をするのを日常の事としていない。その非日常の部分ばかりが目に付くので、誠もこの仕事を始めた時は、世の中には金持ちが大勢いるものだと感心した。
緑がどういう視点で捉えていたのかは知らないが、ホノルルにはこんなに金持ちがいて、それなら自分も何かおいしい話にありつけるのではないかという期待があったのかもしれない。
裕福な人間は確かにいる。しかし下手にそのお零れに与ろうとすると、人間が卑しくなると誠は思う。
客足がようやく緩やかになったのは、十時半を回った頃だった。
元のディスプレイ場所から遙かに離れた場所に置かれたバッグ、試着の後でショウケースの上に乱雑に置かれた洋服など、滅茶苦茶になったフロアは、正に台風一過の趣があった。まだやってくる客

を捌きながら、フロアを片づけ、小物等が盗まれていないかチェックする。幸い、警備員が十一時きっかりにドアを施錠する前に、全ての客が帰ったため、その後の閉店作業はスムーズに行えた。

十一時半過ぎに全ての作業が終了し、タイムカードを押した時、誠は一度アパートに帰るかどうか考え、そのまま緑の部屋へ行く事にした。

車の中からホテルに電話し、部屋に繋いで貰う。部屋に繋がると、驚いた事にワン・コールで緑が出た。これから行く旨を伝える。

普通どんなホテルでも、建前上は宿泊客以外が部屋に入るのは困るという規約を設けている。とても観光客の宿泊客には見えない出で立ちで、フロントの前を通過するときは呼び止められるかと思ったが、フロント・マンは眠そうな微笑みを送って来ただけだった。

第三章・第九話　「真実」

緑は相当アルコールが入っていた。
昼間スーパーマーケットで買ったウイスキーが大分減っている。それを籠に放り込む時に、そんな大瓶は要らないだろうと誠が言ったのに対し、残ったら桜井さんにあげると緑は言い訳したのだが、彼女の酒量は大したものだ。
「一人でいると、色々考えちゃってさ。いっぱい飲んじゃった」
それだけ飲んだにしては、酔っていない素振りで緑は言った。備え付けの小さな冷蔵庫から、これも買い置いたサンドウィッチを取り出す。ベッドの脇のテーブルセットに腰を下ろした誠に勧めて、バスルームからグラスを一つ持って来た。
「何で割る？」
車だからというきれい事は言わないことにした。
「水でいい」
やけに濃い水割りを手渡し、ベランダへの窓を開けてから緑は尋ねた。
「あのさ、持ってない？」
彼女の言わんとするところは分かったが、誠は念のためにとぼけた。
「何を？」
「ポット」
誠は眼球をくるりと上へ向けた。ポットとはマリワナの事だ。ハワイの人間はパカロロとも呼ぶ。
「俺、そういうのは一切やらないんだ」
「そうなの？　こっちに住んでるのに、珍しいね」
今度は苦笑いが洩れた。違法なドラッグと関わりを持たない人間を珍しいと感じる緑のこれまでの環境がよく分かる。誠のような人間が大半だというのに。

誠がサンドウィッチを口に運び始めたのを見て、緑はポテトチップスを食べつつ、ぽつりぽつりと今後の具体的な相談をした。学校とアパートはどうしようか、という話だ。学校には日本から電話を入れて、急に帰国しなければならなくなったので退校したいと言えばいいし、アパートも不動産会社に連絡して、部屋の鍵を郵送すればいいと、誠は答えた。

「家具付きの部屋なんだろ？　どうしても送って欲しい物があるなら、手数料を送ればきっと日本に送ってくれるよ。家賃溜めてたわけでもないんだろ？　入居する時に保証金払ったんなら、大概の事は大丈夫」

緑はひどくほっとしたようだった。

サンドウィッチを二切れ食べ、水割りを半分程空けた所で誠は本題に入った。

「そろそろ塩田さんの話をしようか？」

それまで僅かに浮かべていた笑みを吹き消して、緑は頷いた。テーブルの上に置かれたウイスキーを掴み、無造作に自分のグラスに注ぎ入れる。ストレートで飲んでいるようだ。

「綾さんね、初めてゴールデンに来たのは二か月よりちょっと前じゃなかったかなぁ。誰の紹介だったかは忘れたけど」

琥珀色の液体を見つめて、時折それを口に運びながら話す。誠の顔を見ないようにして話しているようで、嫌な感じがした。

「彼女、美人じゃない？　すぐに金田さんのお気に入りになったよ。なんかね、ヤケになってたからさ、そういうのを利用したがる男もいるじゃん？」

「何でヤケになってたか知ってる？」

あらぬ方向に目線をやって、緑は首を縦に振った。

「うん、彼氏にふられたって。それは桜井さんも知ってるんじゃなかったの？　何ていったっけ、あのハワイアンぽい名前」

「ナナウエ」

「そうそう、コークやってる時に話してさ、綾さんハイになって言

ってた。彼氏に貢いじゃって、お金全然ないんだって。貯金も使ったし、車は壊されちゃって、ブランド物の靴やバッグや、あとアクセサリーも売って生活費にしてるって言ったの。驚いた」

飲んだ分のアルコールが一気に醒めた気がした。

塩田綾がナナウエの為に、大金を使ったのは知っていたが、身の回りの物を売る程に困っていたとは。コンドミニアムの部屋にブランド物がない訳が分かった。

どんな気分でそれらの品を、リサイクルショップなどに持って行っていたのだろう。そうまでしながら、日本に帰ることは考えなかったのだろうか。

「だからさ、当然、誰かとしちゃうことなんか抵抗なかったみたい。お小遣いを貰うっていうのもあったし、ああ、綾さんね、ハワイでビジネスやりたいんだって、資本金出してくれる人を捜してたの。小さいブティックかカフェがいいって。それで成功したら、例の彼氏ともう一度付き合いたいって、そりゃあ切なそうに言ってたよ」

「ちょっと待って。例の彼氏って、そのナナウエの事？」

思わず大きな声を出してしまった自分の口を塞いだ。

「そうでしょ？　何それって思うよね。散々貢いで捨てられた相手とまだ付き合いたいなんてね。でも綾さん、『可哀想な人だから』ってそればっか言ってたよ。何かね、あたしはそういう綾さんが可哀想だと思ったけど。それに、その彼といると、つまんない事を気にしないで伸び伸び出来るって。何だっけ、あれ。シャワーツリーの花みたいに唄えるって、面白いこと言ってた」

そこまで言うと、緑は口淀んでしまった。

「で、塩田さんは今、どこなんだ？」

押して尋ねると、一瞬上目遣いで誠の顔を見、直ぐに視線を逸らせた。

「海に、いる、と思う」

比喩か、一種の詩的表現か、と眉を顰めた誠をまた一瞥してグラスを煽り、緑は話し始めた。

――金田さんが大きいクルーザー持ってるのは知ってる？　そう、大きい奴。三階建てっていうの？　下の方にいくつかベッドルームがあって、真ん中はパーティー出来るリビングルームみたいになってて、上はオープン・エアなんだけど、何人も座れるの。

船でパーティーするの、金田さん好きなのよ。

一か月位前だったかな？　日本から金田さんの友達が何人か来てさ。あたしたちも呼ばれて、その船でパーティーしたの。ううん、そんなに人数はいなかった。夜で、結構、沖に出てたと思う。だって、沿岸に近い所をふらふらしてたら、パトロールとかにチェックされるかもしれないでしょ。そりゃ、薬とかアリだったからさ。

何時だったか覚えてないけど、あの時、パーティールームにいたのは、あたしと金田さんと、ミカさんと綾さん、それに綾さんの相手のおじさんだったの。あたしはコークだけだったけど、綾さんはアイスもやってたかもしれない。

とにかく薬やって、お酒もいっぱい飲んでてね、綾さん、気持ち悪くなったって、デッキに出て行ったの。あたし、綾さんが外に出て、船の後ろの方に歩いて行くのは見たよ。

それが、最後。

ずーっと戻って来なくて、おかしいなって事になるまで大分たってた。あたしね、綾さんは、そのおじさんとするのが嫌で、どこか別の部屋にでも逃げたんじゃないかと思ったの。

でもさ、金田さんに様子を見て来てくれって言われて、船の後ろに行ったらさ、綾さんのサンダルが片っぽ落ちてたの。手摺りの近く。

体がすーって冷たくなっちゃって、とにかくサンダル持って、金田さんのとこに戻ったよね。そしたら、金田さん、綾さんのバッグを海に投げろって言ったの。綾さん、バッグはパーティールームに置きっぱなしにして行ったんだよね。

え？　泣いてないよ。

捜しに戻ったりしたら、綾さんが海に落ちたのがみんなにばれちゃうって、それで綾さん見付からなかったり、死んでたりしたら困るって。

クルー？　うん、船を運転する人達は二人くらいいたけど、何て言うの、操舵室？　に入ってて、前しか見てなかったんでしょ。

ううん、綾さんがいなくなった時は、エンジン切って流してたみたい。スクリューって、怖いこと言わないで。

あたしパニクっちゃって、がたがた震えてただけ。ミカさんが、綾さんのバッグをチェックしてたけど、お金かカードか取ったかもしんない、分かんない。

あのね、ミカさんが本当に本当の金田さんのお気に入りなの。やばいことも色々相談されてるみたい。あたしなんか薬もらって、おじさん達と寝てただけだもん。見てなかったけど、綾さんのバッグとサンダルは海に捨てられたと思う。

その後はミカさんに勧められてさ、薬でぶっとんじゃったよ。だって、怖いじゃん？

ハーバーに戻った時はね、ミカさんは綾さんと一緒にベッドルームに籠もってる振りをしたの。二人、まあまあ仲良かったから、まだ二人で薬やってるように見せかけたわけ。

それで他の子達と、パーティーのゲストを帰してね、あたしは綾さんの相手だったおじさんと、そのまま船で一回してから金田さんの車で帰った。

落ちたの、薬のせいかなぁ、綾さん、他の船に見付けて貰えないかなって思ってたんだけど、駄目だったみたいね――。

第三章・第十話　「空港」

緑の言葉が途切れてから、誠は大分長い間黙っていた。ひどい衝撃を受けた気もしたし、心の何処かでは予測していたような気もした。

「金田さんは、誰かが綾さんのこと聞いても、知らないって言えって。あの夜のパーティーには来てたけど、無事に帰って、その後はゴールデンに来ていないってことにしろって。でも、誰も綾さんのこと、聞いた人いなかったよ。そういえば見ないねー、くらいで」

「そうか」

やっと短い一言を絞り出した。

警察に届けようと思わなかったのか、というような言葉は、この際意味がないだろう。そんな真っ当な考え方が出来る位なら、あんな事があった後、なおもゴールデンに出入りしている訳がない。塩田綾が海に落ちたのは緑のせいではないし、彼女を責めるのはお門違いだろう。

責められる人間がいるとすれば、塩田綾に薬物を提供した人間、そんな場所に彼女が出入りする理由となった人間だ。

「桜井さん、泣いてるよ」

自分も赤い目のまま緑が指摘した。涙を抑えるように、誠は指で眉間を押さえた。

塩田綾の人生がひどく痛ましかった。

どうしてそこまでナナウエを好きになったのだろう。どうして父親に援助を乞わなかったのだろう。誹られても貶されても、命を縮めるよりは良かったのではないか。

彼女は自分を心配する人間がいることに気付かなかった。たった一言でも、あの学校の事務員や、浅井友子、それに自分の妹に相談していれば、こんな寂しい最期は迎えずに済んだ筈だ。

今となっては全てが遅い。

誠は、塩田綾に会えなかった。

「日本に帰ったらさ」

遣る瀬ない気分で誠は緑に話しかけた。

「伯母さんの所で暮らして、何でもいいから地道にお金稼げば？お洒落かどうかなんて、どうでもいいじゃないか。緑さんを利用せずに、大事にしてくれる人を探しなよ」

塩田綾に言いたかった事を緑に言っているという自覚はあった。

本人とはとうとう会えなかったけれど、誠は塩田綾を知っていた。彼女の学校も、過去も、家族も、コンドミニアムの部屋も、友人も、そして愛した男も。

塩田綾が生命を落としたような事が、緑に起こらないようにと説教めいた事を言うのは、自分への慰めに他ならなかった。

「あのね、綾さんのことがあってから、ずっと忘れたいと思ってたの。だから、ずいぶん薬やったりお酒飲んだりしてさ、でも、先週やっぱりおんなじようなパーティーを船でやったのね。急にもっとすごく怖くなっちゃって。桜井さんが『まずいと思える内が花だ』って言ったでしょ。あたしもいつか、綾さんみたいに死んじゃうかなって思って」

初めて会った時、薬物とアルコールで緑が恐ろしく出来上がっていたのを誠は思い出した。あれも綾の事があった故だった訳だ。

頷いて見せながら、誠は再び塩田綾を思った。薬物とアルコールを大量に摂取していたのなら、水に落ちても泳げなかったに違いない。長時間苦しまずに逝ったと思いたかった。

僅かな沈黙の後、緑はふいに顔を歪めて泣き出した。

「なんでかなぁ？　なんでこうなっちゃうかなぁ？」

先程よりも大量の涙に、より一層化粧が崩れる。誠はベッドサイドにあったティッシュを取って手渡した。

「あたし、絶対いいことあると思ってハワイに来たの。綾さんもきっとそうだよ。なのに、なんでこんなことになっちゃったんだろ？」

誠は答えを持たなかった。場所がどこであろうと、思った通りに

生きて行ける人間と、そうでない人間がいるのだ。
それを今の緑に言っても仕方がない。真面目に学校に行かなかったからだとか、違法な薬物に手を出したり、売春紛いの事をしたからだと説教するのは、もっと仕方がない。
黙ってさらにティッシュを数枚取り、手を伸ばして緑の顔を拭ってやった。ファンデーションの下から現れた肌は、ひどく荒れていた。
「ハワイが嫌いになった？」
我ながら驚いた事に、誠の口から飛び出したその質問は、事ある毎に地元の人間から聞かれたそれだった。彼らはいつもその後に、嫌いにならないでくれと付け足した。
緑はしゃくり上げながら首を振った。
「好きだけど、こんなに好きなのに、あたしもうここにはいられない」
「また来られるよ」
出来る限り真摯に言うと、緑は泣き止む事こそしなかったが、涙を流しながら微笑もうとした。何度もそうだよね、また来られるよね、と繰り返し自分に言い聞かせるように囁いた。
聞くべき事を聞いた後は、アパートへ帰るつもりでいたのだが、このまま緑を放って帰る事も出来ず、誠は緑の思い出話に付き合う羽目になった。
見晴らしのいい展望台や、よく行ったコーヒーショップ、レストラン、日本にはないブティック、緑の話は尽きなかった。一つの場所を挙げる度、彼女は涙ぐんだが、それでもこのままハワイに残るとは言い出さなかった。
緑の為に昼間中奔走し、夜は仕事でかなり疲れていた筈なのに、眠気は差して来なかった。塩田綾の話で神経がすっかり逆立ってしまったせいだろう。緑を空港に送って行かなければならなかったから、途中でウイスキーをコーラに変えて、彼女の話を聞き続けた。
時刻が五時を過ぎた頃になって、誠は緑の話を遮った。フライト

は八時だ。遅くとも、六時前には空港へ到着していなくてはならない。支度をすると言い置いて緑はバスルームに消え、誠はその間に、部屋に備え付けの湯沸かし器を使ってコーヒーを入れた。

二十分ほど経って出て来た緑は、別人かと思う位印象が変わっていた。

化粧品がないせいで、顔は眉を描いただけだし、昨日スーパーマーケットで購入したTシャツは、セクシーとは言い難かった。数時間前に彼女の涙を拭ってやった時も思ったことだが、肌の色つやは良くない。

「このTシャツ、ださい。でも帰るだけだから、いいか」

Tシャツの裾を引っ張り、唇を歪めて緑は笑った。それは確かに何処かで見た表情だったが、誠は思い出せなかった。

コーヒーを飲み終わって、二人は部屋を出た。緑の荷物は昨日から持っているバッグだけだ。貴重品と、昨日買った伯母さんへのお土産のチョコレートが入っている。

ホノルルの日没は一年を通して日本より遙かに遅いが、同時に日の出も遅い。五時を過ぎても辺りはまだ暗かった。空港へ向かうフリーウェイは渋滞もなくスムーズで、時折、帰国する観光客を乗せたバスが目に付いた。

搭乗チケットがない誠は、航空会社のカウンターまでしか入れない。緑とは出発ロビーに面する道路で別れなくてはならなかった。

助手席から降り立った彼女に、車の中からさよならと言うのは薄情に思えて、誠は空港警備員の渋い顔を見ない振りで車から降りた。

「伯母さんの家に着いたら、電話してもいい？」

「うん、気を付けて」

空港という場所は、何だってこんなに扇情的なのだろう。緑は既に感極まった様子だったし、誠もつい言うべき言葉をあれこれと探してしまった。けれども相手は店の客ではない。

心にもない事は言ってはいけないと思う内に、何も言えなくなってしまった。

「最後に見送ってくれる人が、桜井さんみたいにかっこいい人で良かった」

涙目になった緑に、無言のまま誠は手を差し出した。アメリカ人は、強い友情を示すのに同性、異性の境無く抱擁するが、抱擁したい程、緑に友情を感じてはいない。握手というのが今は、最も誠実な形だろうと思った。

握った手を離すと緑は、身を翻して小走りに航空会社のカウンターへ行ってしまった。

今度こそ文句を言いそうな空港警備員と目が合って、誠は別れの余韻もなく車へ戻って走り出した。フリーウェイをホノルルの街へ、つまり東に向けて走って行く間に前方の空が明るくなって来るのが見え、同時にひどい疲労感と虚脱感に襲われた。塩田綾の死が冷たく心に横たわり、緑にも自分は、要らぬおせっかいをしたのではないかと気落ちした。

沈んだ気分のままアパートへ帰り、ユニフォームを脱ぎ捨て、下着姿のままカウチに横たわった。わざわざマットレスを敷く気にもなれず、毛布だけを掛けた。

頭が沢山の事で混乱しているような、逆に空っぽになったような気分を暫く味わった後に、意識を失った。

第三章・第十一話　「思案」

足元が揺れている。黒い水にわずかに白い軌跡が曳かれて行く。
周囲を見回す前に、誠は目の前のワイヤーに気付いた。そうか船の上なんだ、とワイヤーに手を掛けてみようとしたのに、手がワイヤーの下を潜り抜けてしまった。途端にバランスが崩れ、誠は水面目掛けて投げ出された。
落ちて行く間、ほんの一秒か二秒の間に、背後から楽しげな笑い声が聞こえた。
誰か気付いてくれ、このままじゃ俺は死んじまう。こんな所で死にたくないのに。誰か。思いながら水に落ちた。
悲鳴を上げて誠は飛び起きた。
肩で息をしていると、ジェームスがバスルームから飛び出して来た。
「どうしたんだ。歯ブラシを呑み込みそうになっちまったぞ」
口の端から歯磨き粉の泡を垂らしているジェームスの顔を見て、誠は大きく息を吐いた。やっと現実に戻って来られたような気がした。
「悪い、変な夢を見たんだ。俺、今日はクロージング・シフトだからもうちょっと寝るよ」
何か言いたそうにしながらジェームスはバスルームに戻り、誠は再び横になった。
ジェームスがセットしてくれたアラームが鳴る迄に、それから二度ほど誠は魘されて起きた。
真っ暗な海に落ちて行く綾の姿も見たし、彼女が遠ざかる船を追って、動かない体で必死に泳ごうとするのも見た。アラームで目覚めた時には、眠る前よりも疲労感が激しかった。
シャワーを使い、トーストとコーヒーの朝食兼昼食を用意する。あまりにだるいので、ふと今日は仕事を休もうかという考えが頭を

過ぎったが、休んで家にいても仕方がないと打ち消した。もっと、益体も無いことを考えそうだ。仕事に行って、体を動かしていた方が良いかもしれない。

まともに頭を使って、考えなければならない事がある。塩田綾の家族には何と報告するか、ゴールデンの事を警察に通報するかの二点だ。

食欲はなかったが、コーヒーでトーストを流し込み、ついでに胃薬も呑んだ。クリーニングから戻っている新しいシャツを着ると、少し気分が引き立った。それでもカウチに座り込んでいると、仕事に行きたくなくなりそうで、誠は早めにアパートを出た。

今日も上天気だ。ラジオからファルセットの声が流れる。ハワイアンの歌詞なので何と唄っているのかは分からないが、陽気に美しく伸びる旋律からすると、明るい内容なのだろう。

ワイキキに入ると、道の両側のシャワーツリーの花が目に付いた。塩田綾が、ああいう風になりたいと浅井友子に言い、愛する男と一緒だとそうなれると言ったシャワーツリーだ。明るい黄色とピンクが一つの房に混じって風に揺れているのが、堪らなく目に沁みた。

二十五マイルくらいで車を走らせながら、誠はしみじみとここは美しい土地だと感じた。同時にこの土地で命を失った塩田綾の事が甦って、重い痼りが胸の中に湧いた。

仕事前のミーティングで、ポールに目の下に隈が出来ている事を揶揄われたが、誠は気の利いた言葉を返せなかった。今日はスティーブと一緒に一階担当だ。昨夜のように忙しくならなければ、塩田綾の件を考える時間はありそうだった。

疲れているからと言い訳して、多くない客の殆どをスティーブに捌いて貰った。

日本語の出来ないスティーブは、いつも成績が良くない。「俺は今晩はどうでもいいから」と誠が宣言すると、いそいそと接客に当たってくれ、誠は時々、客の質問等を通訳してやれば良かった。

フロアにぼんやりと立ち、スティーブが客に新しいデザインの靴

を勧めるのを眺めながら、誠は懸案事項を考え始めた。
まずは塩田綾の家族への報告だが、それを頭の中に引っ張り出した途端に浮かんだ一語は、「とてもじゃないが言えない」だった。お嬢さんはアルコールと非合法薬物のせいで海に落ちて亡くなったようです、などと言える訳がない。
そもそも、お亡くなりに、と言うのだけでも大変な事だ。当たりの柔らかい言い方などあり得ないし、死亡の事実を伝えれば、理由は当然追求される。
ここで懸案事項の二つ目が出てくる。緑の話を元に警察に届け出れば、一応の捜査はしてくれるかもしれない。しかし、証拠は何もないのだ。全ては緑の証言次第になるだろう。
日本に戻った緑には負担だろうし、もしも証言を嫌がったら、あるいは彼女が証言してもゴールデン側が否認したら、事態はややこしい事になる。
ゴールデンの金田氏は幾らでも言い抜け出来るだろう。第一、塩田綾の遺体だって発見されていない。いや、もしかしたら発見されて身元不明として処理されているのかもしれないが、いつどこから海に入ったのかは特定出来まい。
金田氏の船に指紋や何かがあることだって、以前のものだと言われてしまえばそれまでだ。
すっかり煮詰まった所で、誠は新たな説を頭の中で出してみた。何も言わない、というのはどうだろうか。幸い、兄はもう捜さなくてもよい、というような事を書いて来た。
その言葉通り、誠は何もしていなかった事にする。塩田綾さんはハワイで行方不明になり、数年して家族も諦めるという筋書きだ。
誠は首を振った。それも出来ない。塩田綾の死に至る状況を想像しただけで胸が痛む。知らん顔で口を拭い、トラブルを避けるのは卑怯だ。とはいえ、どうしたものか。
解決方法が見付からないまま、誠はフロアに突っ立って考え事を続けた。スティーブが「腹具合でも悪いのか？」と声を掛けて来た。

どうもそんな顔をしていたらしい。
終業時間が近付いても、良い考えはさっぱり浮かばなかった。
考えるに従って、腹の中に澱のような物が溜まっていくのだけを感じた。このままでは本当に腹具合が悪くなりそうだ。誰かにこのどろどろした物をぶつけてやりたい。
仕事が終わると、誠は車をアラモアナ方面に向けた。
勿論会えない確率の方が高い。しかし、塩田綾の話を聞かせて、悪態を吐いてやれるのは一人しか思い付かない。ゴールデンの関係者には別な形でのアプローチをするべきだろう。
車を公営駐車場に停め、誠は鼻息も荒くバーの入り口を潜った。以前ナナウエとの食事を中座したバーだ。彼がいなくとも、最近来ているかどうかは聞けるだろう。バーはかなり混雑していた。人種は雑多だが、皆地元の人間のようだ。女性客が数える程しかいない。
誠はサーファーか、あるいはライフガードと思しき男達が四、五人で固まっているのを見付けて近付いた。
「ちょっと、すみません」
一斉にこっちを向いた男達に一瞬圧倒されながら、こういう時に地元のアクセントが上手に操れたらどんなにいいかと思う。
「ナナウエって男を探してるんですけど、知りませんか？」
ロングヘアのサーファーで、右腕に女性の顔、背中に鮫の口の刺青があってと誠が続ける言葉を遮って、一人が「やぁ」と声を上げた。
「あんた、ローランドの甥っ子だろ、な？　こないだも、そいつの事探してたんじゃねぇかったかい？」
言われてよくよく顔を見ると、なるほど会った事があるようだ。そうなんですと愛想笑いを投げると、別の男が口を開いた。最初の男はフィリピーノに見える中年だったが、今度は白人の若い男だ。
「俺、知ってる。あいつ、いっつも他人の波、横取りしやがるんだ。ここに来る前、ワイキキで見かけたぜ」
彼が挙げたのは、ナナウエと一番最初に会ったバーだった。ロー

ランドに着いて来て貰って、サーファーの集まるバーを巡った時だ。まだいるかどうかは分からないけど、と言う白人の男に礼を言い、誠はバーを出て小走りに車に戻った。

交通量の減ったカラカウア・アベニューを一気に走り抜け、動物園脇の駐車場に車を停める。メーターにコインを放り込んでバーに向かった。付近にアパートなどもあるせいか、前に来た時に比べてかかっている音楽は控え目だった。

ナナウエがいた。

第三章・第十二話　「悪態」

彼はカウンターの端の方に座り、テレビのバスケットボールの試合を眺めている。

誠は無言のまま、ナナウエの隣に腰を下ろした。

「何だよ、おめぇ」

驚いた様子のナナウエを無視し、ウイスキーのコーラ割をオーダーする。出された飲み物を一口飲んで、誠はナナウエの顔を睨んだ。

「言わなきゃならない事がある。ミス、アヤ・シオタの事だよ」

「その話なら、もう聞きたかねぇよ」

鼻白んだナナウエの腕を、誠は掴んだ。ナナウエがあまりにも軽く「聞きたくない」と言い放った事で、昼間から溜まりに溜まった澱が腹の底で沸き立った。

「いいから、聞けってんだよ。あんた、彼女がバッグだの靴だのを売って、生活費に当ててたの知ってるか？」

「何だよ、それ？　知ってるぞ、あいつの家族は凄ぇ金持ちじゃないか。そんな事する必要はねぇだろ？」

まだうるさそうにナナウエは言った。

「援助は頼めない状況だったんだ。そうやって売り食いしながら、彼女が何をしてたか知ってるか？　金持ちのおっさんと付き合ったりしてな、ビジネス始める為のスポンサーを探してたんだ。ロクでもないオヤジ共がいるからな、彼女、薬やったりもしてたらしいぜ。それもこれもお前と、もう一遍付き合うためだったとさ。おかしいだろう？」

畳み掛けるように誠は言って、ナナウエの反応を見た。これでもし、彼が冷笑したり、無関係だと言ったりしたら、表に連れ出して殴ってやろうと思った。

どう見ても体格では勝ち目がないが、たとえ倍殴られたって構わない。そんな事で塩田綾が浮かばれる訳もないが、知らん顔で惚け

られては彼女も自分も可哀想だと思った。
「知らなかった。日本に帰ったと思ってた」
しばらく絶句した後でナナウエはそう言った。誠はそれでもむっとした。
「帰ってなかったから、俺が捜し回る羽目になったんだろうが。彼女は帰ってないって、前にも言ったぞ。人の話はちゃんと聞けよ、馬鹿野郎」
多分普段なら、馬鹿野郎などと呼ばれて黙っているタイプではないが、ナナウエは鼻から息を出しただけで、反論はしなかった。
「そんで、彼女は今、どうしてるんだ？　今度こそ日本に帰ったか？」
「へぇ、興味があるかい？　上等だ。でも、ここじゃ話せねぇ。外へ出よう」
カウンターは混んでもいなかったが、他人に聞かせたい話でもない。誠は飲み物の代金にチップを足した金をカウンターに置いて、ナナウエを促した。
「妙な作り話をして、俺を引っかけようってんじゃないだろうな」
怪訝そうな顔のナナウエに、誠はけっと品のない笑い声を立てた。腹の中の澱が、毒になって口から零れている。
「あんたなんか引っかけて、一体何になるってんだよ。何様のつもりだ？」
路地を海の方に向けて歩きながら、誠は勝手に緑から聞いた塩田綾の話をした。ナナウエに振られて自棄気味になっていた事、それでもナナウエとまた付き合いたいと言っていた事などだ。
「可哀想な人だから、って彼女は言ったらしい。可哀想てのはどういう事かな？　あんたの生い立ちとか、それとも性格が可哀想って事かな？」
返事を期待せずに乱暴な質問を投げ掛けた。深夜のカラカウア・アベニューでも明るい事は明るい。街灯の他に、砂浜との境の辺りに設けられているガス灯は、既に消されている。

誠は消えているガス灯を一瞥して、砂浜に足を踏み入れた。
それを待っていたかのように、ナナウエが口を開いた。
「彼女は何してるんだ？」
「死んだよ」
間髪入れずに答え、誠はナナウエの正面に回って立った。
「言ったろう、スポンサーを探してたって。そういう相手と知り合う為に、彼女はゴールデンってホテルに出入りしてたんだ。オーナーが日本人でな、日本人学生なんか集めて怪しげな事をやってやがるんだよ。今から一か月位前だ。オーナーの船でパーティーがあって、彼女はアルコールと薬で調子悪くなって、海に落ちたんだ」
「誰も、助けなかったのかよ？」
海を背にしていたから、逆光でナナウエの顔色は分からなかったが、彼の言葉は僅かに震えているように感じた。顔色も悪ければいい。
「すぐには気付かなかったんだ。落ちたんだろうって事になって、後は知らん振りを決め込んだのさ。あんたと同じだな。転げ落ちるような状況に追い込んで、落ちたら知らん顔だ」
「どうやってそんな事調べたんだ？　まさか連中が警察に挙げられたわけじゃねぇだろう」
誠はポケットから煙草を出した。僅かだが風があるので火が点けにくい。何とか点火してから質問に答えた。
「勿論、違う。彼女が海に落ちた時、同じ船に乗ってた女の子から話を聞いたんだ。いずれ何とかして、ゴールデンのオーナーも追及しようとは思ってるさ」
長い沈黙の後、ナナウエは囁くような声で何か言った。聞き取れず誠は、苛立って聞き返した。
「俺は、そんなつもりじゃなかった」
やっと聞き取れたその言葉に、誠の中の澱は、勢い良く口から飛び出した。
「ふざけるな。じゃあ、どんなつもりだったんだよ？　手前の生い

立ち語って同情引いて、彼女の事なんか何も知らなかったじゃないか。彼女はな、親に金くれって言えなかったんだよ。搾り取られて捨てられて、そんでもまだあんたの事を考えてたんだ。挙げ句が暗い海に落っこちてサヨナラだ」

何か言おうとしたナナウエを誠は遮った。

「いいか、今度こそよく聞いておけよ。彼女はな、たった一人で真っ暗な海に流れて行ったんだ。お前のせいだ」

くそったれが、と吐き捨てて誠は、海を向いた儘のナナウエの脇を通り抜けた。

言いたい事はまだ幾らもあったが、全部言っていたら朝になってしまう。ナナウエが追って来る気配はなかった。誠は砂浜から舗装された道路に戻り、さらに駐車場を目指して歩いた。

ナナウエの反応から判断すると、多少は彼の心を殴りつけてやる事が出来たかもしれない。これから街の何処かで会って、その時まだ留学生のような日本人の女の子連れだったら喧嘩を売ってやろう。

一日溜まった澱を吐き出して、すっきりした筈なのに、誠は泣きたいような気分になった。

アパートに帰ってまず最初にした事は、キッチンへ行って濃い水割りを作る事だった。ジェームスはとっくに夢の中らしい。ベッドルームのドア越しに低い鼾が聞こえて来た。

ユニフォームのままでベランダに出て煙草を吸う。

あの男といることが、それほど塩田綾にとっては価値があったのか。彼女はナナウエの隣だとシャワーツリーのように唄えたそうだけれど、もう少し外に目を向ければ、もう少し自分の価値を認められれば、いくらでもなりたい自分になれる場所はあっただろうに。

ため息が後からこぼれ出た。

そのナナウエに会って責め立ててはみたものの、実際の懸案事項はそのままだ。

空腹にアルコールが沁みるに従って、ゴールデンの件は、まずジェームスに相談してみる気になった。畑違いとはいえ、一応弁護士

なのだから、少なくとも誠よりは的確な判断が下せる筈だ。
リビングルームでユニフォームを着替える際、携帯電話の電源を切ったままにしてある事に気が付いた。電源を入れると、メッセージの表示が点いた。メッセージは緑からだった。
「今、伯母さんちに着いたの。すごく喜んでくれて、帰って来て良かったみたい。しばらくここにいて、学校に行くか、仕事を探します。また電話するね」
明るい声だった。緑には前触れもなく戻っても、受け入れてくれる場所があるのだ。
ほっとして誠はカウチにもたれ掛かった。頭の中で何度も緑の声を繰り返す。帰って来て良かった、帰って来て良かった。僅かな慰めだが、それで今晩の安眠が得られそうな気がした。

第三章・第十三話　「雨」

前日ほどではなかったものの、やはり甘い見通しだった。

目覚ましが鳴る前に、誠は魘されて二回も起きた。一度目はよく覚えていないが、二度目の悪夢で誠はナナウエを滅茶苦茶に殴っていた。

場所はワイキキ・ビーチで、脇に塩田綾と緑がいて「止めて、止めて」と泣き叫んでいたけれど、誠は耳を貸さなかった。ナナウエが一向に反撃に出ないのに業を煮やし、誠は彼を殴り倒して馬乗りになり、首を絞め始めた。

それでもナナウエは大して苦しそうな顔すらしない。思い切って首を捻じ切ると、血ではなく真っ赤な砂が傷口から零れた。

目が覚めたその時は、殴った衝撃も、首を絞めた感触も両手に残っていて、全身に鳥肌が立った。

アラームの音で起きた時も、びっしょりと寝汗を掻いていた。シャワーを使って汗は流したものの、昨晩の悪夢はまだ体中にこびり付いている気がする。

キッチンへ行くと、冷蔵庫の扉にジェームスからの怒りのメッセージが貼り付けてあった。

「俺の特製パスタを無視するとはいい度胸だ。今晩帰った時に、まだ残っていたら風呂掃除を五年やって貰う」

おやおやと思いながら冷蔵庫の扉を開けると、目立つ場所に彼の得意なベーコンと野菜のパスタがラップを掛けられてある。御丁寧に「私を食べて」という可愛らしいカードも添えてあり、誠の罪悪感を煽った。昨夜帰宅して、水割りの氷のために冷凍庫は開けたが、冷蔵庫は開けなかった。

食欲はないと思っていたが、昨晩仕事の後に何も食べなかったせいか、食べ始めるとあっという間に平らげた。皿をシンクに放り込み、ジェームスへのメッセージを書く。

「パスタは美味かった。仕事前にガーリックの入ったパスタを食べるほど愛しているので、風呂掃除は勘弁してくれ。相談したい事があるので、今夜は夜更かししてくれると有り難い。仕事が終わったらすぐ帰る」

ほんの僅かだが気分が軽くなった。何があっても、自分は生きているのだ。接客の際に口臭がしないよう、念入りに歯を磨き、口腔洗浄剤で何度も口を濯いでをしてアパートを出た。

店の裏手にある駐車場で車から降りると、ひどく蒸し暑い気がした。

今日のクロージング・クルーはマーク、ジョン、トレイシーに雪子だった。誠はトレイシーと一緒のフロアになることを期待していたのだが、上と下に分けられてしまった。こうなると話は出来ない。それに昨日の売り上げは限りなくゼロに近かったから、今日はもう少し真面目に仕事をするべきだろう。

数時間真面目に接客に励み、モーニング・クルーが帰る前に、クロージング・クルーと揃って食事に行った。

食事を終えて店に帰ると、キャッシャーのアンジェラが誠に電話があったと告げた。

「名前は聞いた？」

「聞いたけど、言わなかった。アクセントあったから、日本人だと思うよ。今日、働いているかって聞くから、クロージングですとだけ言っておいたけど」

側で会話を聞いていたポールが、断定的に「客だな」と言った。

「きっと前に来て、誠の接客が気に入ったんだろう」

名札こそ付けてはいないが、聞かれれば名刺を渡す事になっているし、特にハワイ在住の客にはそうするように心懸けている。実際、いつも誠から買ってくれるお得意も何人かいるので、その一人かもしれないと思った。前日の分の売り上げを稼ぐチャンスかもしれない。

顔見知りの客が来るのではないかと、誠は新たな客が二階に来る

度に注意を払っていたが、電話の主は一向に現れなかった。それでも客足はほどほどに良く、二日分とはいかないまでも、誠はそれなりの売り上げを挙げた。

接客中に、時折塩田綾の件が頭を掠めたが、全ては今晩ジェームスに相談してからの事だと、努めて考えないようにした。

十時近くなって雨が降り出した。こうなると客足はぴたりと止まる。

アラモアナやロイヤルハワイアンのようなショッピングセンターは、雨になると忙しくなるそうだが、一戸建ての店は雨に弱い。傘を差して店から店へ移動するのは、誰にとっても億劫だ。いきおい買い物客は、移動が楽な大型ショッピングセンターに集中する。

せめてもの救いは、店が最も忙しい八時からの二時間、雨が降らなかった事だ。

閑散としてしまったフロアで、警備員のジョシュアが「今日は蒸し暑かったからねぇ、降るなと思ってたんだ」と、誰にともなく言った。

帰り際トレイシーが食事でもと声を掛けて来たが、ジェームスに起きていてくれるよう頼んだ手前があった。また今度と断って、他のメンバーと一緒に店を出た。雨はまだ降っているが、駐車場までは五分も掛からない。走って行けばそれ程濡れずに済むと、皆小走りになった。

店の脇の通路を抜けて細い路地に差し掛かった時、急に誠は名前を呼ばれた。

「桜井さん、桜井さんでしょう?」

驚いて足を止め、声のした方を振り向くと、近くの街灯の下に傘を差した男が立っていた。傘と雨のお陰でよく見えないが、眼鏡をかけていて中肉中背、日本語の発音から、明らかに日本人だと分かった。

誠は同僚達に「濡れるから早く行きなよ」と手を振り、男に向き直った。

「私に用ですか？」
「すみません、待ち伏せみたいな事をして。僕、塩田綾って人を捜していてるんですけど、あなたも捜していると聞いたもんで」
雨が額から流れて来るのを手で拭って、誠は首を傾げた。成果が上がらないのに苛立って、塩田綾の父親が別の人物に依頼したのだろうか。
「時間は掛かりません。ちょっと会ってほしい人がいるんですよ」
彼は早口で言うと、体の向きを変えて歩き出した。すぐ近くにある小振りのホテルに近付いて行く。誠はやむを得ず従ったが、同時に訝しくも思った。彼は名乗りもしないし、傘で顔を隠すようにしている。
ホテルのエントランス前を通過し、裏手の空き地へ入って行く。空き地に足を踏み入れかけて嫌な予感がした。
暗くて建物の影に男が身を潜めていた事に誠は気が付かなかった。肩を掴まれたと思った次の瞬間には、腹に強烈なパンチが食い込み倒れかかった。どこにいたのか三、四人の男達に囲まれ、あっという間に誠は泥の上を這いずり回る羽目になった。
蹴られて、踏まれながら、体のどこを庇うという事も出来ない。男達はいずれも日本人ではない。英語で口々に罵り、ゴールデンに近寄るなという意味の事を言った。
遠くで人の声がしたような気がした。誠は彼らの靴の下で体を丸めるだけで、助けを呼ぶ事も出来ない。
こめかみの辺りを強か蹴り付けられて、誠は死を意識した。
急に男達の攻撃が止まり、同時に気配が遠ざかった。
「こっちだよ、オフィサー。おい、死んでねぇだろうな」
誰かが走って来て声を掛け、誠を抱き起こした。オフィサーと言ったからには警察官も一緒なのだろう。有り難い、助かったと思いながら、誠は目が開かなかった。泥のせいだ。
「こんなにされちまって。ちっとは反撃したのかよ？」
この声には聞き覚えがある。乱暴な言い回しも。

救いの主は誠を引き摺ってアスファルトの路肩に座らせ、湿った布で顔を拭いてくれた。多分雨に濡れた彼のTシャツか何かだろう。誠も顔を上に向け、出来るだけ雨に当てて泥を落とすようにした。体中の骨が折れたのではないのかと思うほど、全身が痛い。

ようやく痛む目を開いた時、誠は真剣に視神経がおかしくなったのだと思った。

目の前にいたのはナナウエだった。

第三章・第十四話　「ダメージ」

何だってあんたがここにいるんだ、と言おうとして誠は、言葉の代わりに泥を口から吐き出した。

口の中がじゃりじゃりして、ひどく気持ちが悪い。泥に混じって血の味もする。感覚は無いが、歯が折れたのでない事を祈った。

「俺もお前が出て来るのを待ってたんだ。変なのに声を掛けられて、のこのこ暗いとこへ着いて行くなんて、馬鹿じゃないのか」

独り言のように言って、ナナウエは誠の腕の下に肩を差し入れた。

「わざわざ巡回中のお巡りに声をかけてやったんだ。感謝しろよ」

支えられてホテルの軒下まで移動する間、誠は情けない程に悲鳴を上げた。乾いたコンクリートの石段に腰を下ろした時、乗り捨てられてある警察のカートが目に入った。

ナナウエが頼んだという警官の物だろう。人一人が乗るにはやや大ぶりのカートで、三輪のタイヤが付いている。サイズの割にはスピードも出るし、歩道にも乗り上げられるので、細い道や一方通行の多いワイキキにはうってつけのカートだ。

乗っていた警官はどうしたのかと思っている間に、小走りに戻って来た。無線で怒鳴りつけるようにして何か連絡している。その警官に脇から何かを告げると、ナナウエは何処かへ走って行ってしまった。

両足を投げ出すようにして座ったまま、誠は両手で頭を押さえた。散々蹴られたお陰で、呼吸をする毎に恐ろしく痛む。誰かと殴り合いになった事はあったが、複数からこれ程一方的にやられたのは初めてだ。連絡を終えたらしい警官が近付いて来た。

「こりゃまた、ひどくやられたもんだ、な。話せますか?」

アジア系の警官は地元アクセントの強い英語で話し掛けて来た。返事をしようとすると、喉の奥から情けない程掠れた音が出た。どれ程かは分からないが、鼻血も出ているようだ。それが口の中に流

れ込んで、血と泥の混じった味がする。吐きそうだ。
「救急車は今、手配したからね」
この親切は嬉しくもあったし、嬉しくない部分もあった。アメリカでは救急車は有料だ。具体的に幾ら掛かるかは知らないが、かなり高額だと聞いたことがあるし、さて自分の会社の医療保険で救急車代が出るかどうか分からない。
体中が痛かったが、それでも今すぐ死ぬとは思われなかったので、辞退したい気もした。
警官がさらなる質問をしようとした時、ナナウエが戻って来た。手にミネラルウォーターのペットボトルを抱えている。キャップを捻って開け、誠に手渡した。
「口を濯げよ。それじゃ喋れねぇだろ」
冷たい水が傷だらけの口中に沁みたが、泥を吐き出せるのは何よりも有り難かった。何度も何度も口を濯ぎ、うがいをして、ついでに水を飲むと、大きな溜息が出た。痛みは一向に薄れないが、多少正気に返ったような気がする。
泥々になった上着の内ポケットに手を入れて携帯電話を出した。有り難いことに壊れていない。訝しげな顔をしているナナウエに渡す。
「2番。オート・ダイアル。俺のルームメイト」
切れ切れに言うと、ナナウエは困った顔をしながら電話し始めた。同じく困惑顔をしている警官の後ろから、青い光が幾つか近付いてくるのが見えた。誠は朦朧とする頭で警官に事の次第を説明しなくては、ともう一度口を開いたが、上手く言葉が出て来なかった。
駆け付けた救急隊員にストレッチャーに乗せられた時に、ナナウエが何か言ったが、誠は聞き取れなかった。
ストレッチャーが救急車に固定された途端に気を失ってしまい、目が覚めたのは治療室のベッドの上だった。あれこれ調べられ、レントゲンを撮ったり、何やらスキャンに掛けられた末、肋骨二本に

罅が入っているだけで、あとは打撲と筋を痛めたものと診断された。歯も欠けたが、それは歯医者に行くよう言われた。

これも保険制度の問題で、余程の怪我でない限り、病院では患者を入院させない。駆けつけたジェームスに抱えられてアパートへ戻り、体をすっかり拭いて貰ってベッドに横たえられると、僅かだが頭が働き出した。

「立件は難しいだろうねぇ」

病院の緊急外来、ＥＲのベッドで行われた聴取で、最初に誠を助けてくれた警官と、後からやって来た警官達が、声を揃えて言ったのが頭に甦った。

誠が犯人達はゴールデンの名前を口にしたと主張した時だ。

そのホテルのオーナーとトラブルのような事があって、誰かに頼んで自分を痛めつけたんでしょう。必要なら詳しい事を話します、と痛みに耐えながら、何とか言葉を搾り出した誠に対して、彼らはいささか申し訳なさそうに言った。

警官がナナウエと共に駆け付けた時、犯人達は雨に紛れて三々五々逃げ散ってしまって捕まらなかったし、ナナウエも彼らがゴールデン云々と言うのを聞いた訳ではない。居合わせた警官だって聞いていないのだから、それを押してナナウエが「聞きました」と言ったら偽証になる。

とりあえずは被害届を出すように、との事だった。

警官達は決して不親切ではなかったが、飛んで来たジェームスの取り乱し振りを見て、誰かが「実は、ヘイト・クライムじゃないのか？」と小声で言った。

呑気な響きの声を発した主を、誠は睨み付けてやりたいと思ったけれど、目眩がして焦点が合わなかった。

ヘイト・クライム。ある特定の人間を嫌悪する事による犯罪を指して呼ばれるそれは、未だに起こるアフリカ系アメリカ人への私刑なども含まれるし、昨今では犠牲者がゲイである事も珍しくない。

悪意はなかったのだろうが、ゲイだから私刑にでも遭ったのだろうという安易な発想に誠は腹が立った。

思い出して不愉快な唸り声を出すと、ジェームスがベッドルームへ駆け込んで来る音がした。今や誠の両目は腫れてしまって開けるのが辛いほどだ。

「どうしたんだ？　痛むのか」

「違うよ、何でもない」

Ｎｏ，　Ｎｏｔｈｉｎｇ.　と答えたつもりが「ドー、ダッジング」と自分の耳には聞こえた。鼻血のお陰で鼻が詰まっている。それでもジェームスは了解したようだ。

「そうか、そんならいいけど、随分、腫れたな」と言いながら、ベッドルームから出て行ったと思うと、暫くして氷の入ったビニール袋を持って来て、誠の顔に当ててくれた。

これは気持ちがいい。

「誠、聞こえてるか？」

唸り声で返事をすると、ジェームスは何時になくしんみりした声で語り掛けた。

「頼むから死なないでくれ」

そんな傷じゃない、と抗議の声を上げようとすると、ジェームスの指が唇に触れた。黙っていろという事か。

「あのナナウエって彼が、今度の事は例の失踪した彼女絡みだと言っていた。迂闊な真似はしないでくれ。人間は、多分君が思っている以上に簡単に人を傷付けるんだ。理由なんて下らない事が殆どなんだ。昔、俺の友達が同性愛嫌悪症（ホモ・フォビア）の奴らに私刑（リンチ）されて死んだ話をしただろう。君が誰かに傷付けられるなんて、耐えられない」

声が濡れている。そう言えば、いつも冷静なジェームスがあれ程取り乱したのは初めてだと思う。

指が誠の右手に触れた。誠はその指を掴んで出来る限り強く握った。

強烈な痛み止めのお陰で眠気はすぐにやって来たが、それでもあちこち痛むのと、鼻づまりの呼吸困難とおまけに熱のお陰で、安眠は得られなかった。

第四章・第一話　「消沈」

氷を代えたり、誠の寝汗を拭いたりで、殆ど纏まった睡眠を摂らないまま、ジェームスは仕事に行く羽目になった。済まながる誠にウインクして「体を鍛えてあるから平気なんだ」と、意外と元気そうに出て行った。

暫くベッドでまどろんだ後、誠はリビングルームに移動した。枕と毛布を持ってカウチに横になる。思い立って煙草を吸ってみたが、煙は傷に沁みるという事を知っただけだった。

体の表面に劣らず、口の中もひどい状態になっていた。口腔も舌も傷だらけで、おまけに元々噛み合わせの悪かった、右犬歯の奥の歯が欠けてしまっている。それだけで済んだのは幸いかもしれないが、嬉しくはない。

本来なら今日はクロージング・シフトだったのだが、無論行ける訳がない。ジェームスが仕事場から店に電話を入れてくれると言った。午前中一杯、誠は見るともなしにテレビを付けたまま、カウチでうとうとして過ごした。

静寂が破られたのは、電話の音だった。気が付いて時計を見ると、午後の一時半になっていた。僅かな動作でも、体のどこかしらが痛む。表示を見ると店からだ。誠は唸りながら電話を取った。マネージャーのポールだった。

「お誠、起きて大丈夫かい？　ジェームスから聞いたよ、大変な災難だったな」

ちっとも大丈夫じゃない。あんたが電話なんかしなけりゃ起きる必要はなかったんだよ、と言ってやりたかったが、喉も口の中も痛い。嗄れた声で「ああ」とか「うう」と言うのが、精一杯だった。

「暫く休まなけりゃならないだろう。当分休めるようにしておくよ。後で医者の診断書を提出してくれればいいよ。病欠手当は一週間分だけど、スタッフのスケジュールはやりくりするから」

事務的な事を一方的に喋ると、それじゃお大事にとポールは電話を切った。ジェームスが何と説明したのか知らないが、ポールの口振りからして症状を誇張して伝えたのは間違いない。

もっとも誠自身、どれ程休めば職場に復帰出来るのか分からなかった。体の向きを変える度に脇腹は恐ろしく痛んだし、トイレに行った際、鏡を見て愕然とした。熟れた夏みかんのような顔は、ちょっとしたホラー映画のようだった。こんな顔では、とてもフロアに立てない。

何よりも精神的に、店に出るような気分ではなかった。よってたかって殴られ、蹴られた、その経験が誠を萎縮させていた。

泥の上で体中を蹴り飛ばされながら、誠が何よりも感じていたのは恐怖だった。

暴力が理屈抜きで人の心を操作出来るという事実を、身を持って感じた。緑は実際に体を傷付けられた事はなかったようだが、彼女が恐れていたのも、詰まるところは同じものだ。

食欲は全く無かったが、薬を呑む為に何か胃に入れなくてはならなかった。ジェームスが指示していったように、ヨーグルトを口腔中の傷に触れないよう、スプーンで喉に流し込む。続いて処方された痛み止めと、化膿止めを服用した。

大きな錠剤が喉に遣えて噎せかえり、涙を流しながらやっと水と共に呑み込んだ時、誠はふいに全てが馬鹿々々しくなった。

兄に頼まれるまま塩田綾を捜し回り、偶然と行き掛かりでゴールデンに辿り着いて得たものは、塩田綾の死を確認した事と、ぼろ雑巾のようになったこの体だ。殺されなかっただけましなのかもしれないけれど、一方で、自分がこんな目に遭うのは割に合わない気もする。

負け犬だろうが何だろうが、肉体の痛みは精神の高揚を邪魔する。ゴールデンで行われている事を糾弾しようという気持ちは萎えかけていた。殴られて逆に意気軒昂になってしまう、ハードボイルド小説の主人公とは違うのだ。

もう一つ、誠の気持ちを暗くさせている理由もあった。

暴行にあった直後、警官達は誠に親切だったが、ジェームスが現場にやって来て誠がゲイだと分かると、ごく僅かだが態度が変わった。「ヘイト・クライムじゃないのか?」と言ったの警官は、無神経だったけれど、正直者かもしれない。暴行に遭った被害者がゲイだったから、それはゲイを嫌う人々の仕業だと簡単に判断されてしまったのが悲しかった。

いっそのこと自分もストレートで、同性愛と聞いただけで「気持ち悪い」だの「変態だ」と一刀両断に出来るほど神経の浮腫(むく)んだ男だったなら、などと滅茶苦茶な事を考えて誠は自虐的な笑みを浮かべた。

人種差別や性差別、或いは嗜好、出自による差別など、差別する側はいつだって無神経でかつ幸せな人々だ。差別される側は、嫌でも繊細になる。

普段なら楽天家のジェームスが、差別って事にヒステリックになり過ぎて、差別される自分ってものに自己を見出してるようじゃいけないよ、等と言ってくれるのだが、こういう時、隣にいないと役に立たない。

拗ねた気分を抱え込んで、誠は再びカウチで毛布にくるまった。夏みかんの顔が熱い。また熱が上がって来たのかもしれなかった。

翌朝になると顔の腫れは大分引いていた。

しかし今度は逆に青黒い痣になり始めている。ジェームスが溜息を吐いた。

「パンダっていうよりキリンかな? 目の回りだけじゃないからね」

ちっとも可笑しくはなかったが、少なくとも前日よりは気分が良かった分だけ、笑ってみせる余裕はあった。

昨夜帰って来たジェームスは、誠にスープを無理矢理飲ませると、自分はベッドに倒れ込んでしまった。前夜寝ていなかったのはやはり堪えたらしい。塩田綾とゴールデンの話は出来ないままだった。

慌ただしくジェームスが出勤した後は、誠はまた所在なくテレビなどを見て過ごした。処方された痛み止めは市販の物よりも数倍強い。本を読んだり、メールを書いたりする集中力は出て来なかった。口の中の傷はほぼ塞がって、煙草を美味いと感じられる事が有り難かった。

測ったかのように、昨日と同じ時間に電話が鳴った。やはり店からだったが、今度はジョージとトレイシーが交互に出た。具合を尋ねられ、それ程悪くないと答えると、有無を言わせない調子で仕事が終わったら、二人で見舞いに行くと宣言された。

夕方になって山ほど見舞いの日本食を抱えてやって来た二人は、まず誠の顔を見て絶句した。

「そんなに酷いかい？」

「その顔が元に戻らなかったら、ジェームスに振られるかもしれないぞ」

ジョージは軽口を叩いたが、トレイシーは眉を顰めただけで、スーパーマーケットの袋を抱えてキッチンに行ってしまった。何度も来て勝手は知っているので、買ってきた物をしまってくれるつもりなんだろう。カウチに落ち着くと、ジョージは急に真顔になった。

「一体全体、何をやったんだよ？　まさか本当に、ただの酔っ払いに絡まれた訳じゃねぇだろう」

なるほど、店ではそういう事になっているらしい。誠が起こった事だけを並べて簡単に説明すると、ジョージは凶悪な顔付きになった。

「あのな、そこに至るまでにお前何をしたんだよ？　そこから説明しろ。第一、ナナウエって奴が居合わせたのも腑に落ちねぇ」

何処から話そうかと誠が思案していると、トレイシーがキッチンから戻って来た。やけに時間が掛かると思ったら、コーヒーを煎れていたようだ。コーヒーカップの載った盆を持っている。大喜びで手を差し出すと、コーヒーではなくスポーツドリンクを手渡された。

「何だよ、これ。俺もコーヒーがいいよ」

「こういう時は、カフェインは良くないの。いいじゃん、それ日本のだよ。高かったんだから」

高飛車な口調に、誠は反論を諦めてペットボトルの口を開け、緑から聞いた話と、彼女が日本へ帰る手助けをした話をした。ナナウエを掴まえて、塩田綾の件でなじってやった事まで話すと、ジョージは納得した顔をした。

「じゃあさ、ミス、シオタの事はどうなるの？　何も無かった事にされちゃうわけ？　そんなの酷いよ」

何度も瞬きしながらトレイシーが言った。トレイシーは生前の塩田綾に会った事があるのだ。客とセールスというそれだけの関係だが、印象に残るような客だっただけに、思い入れがあるのかもしれなかった。

「それは確かにそうだけど、誠が殺されても困るよな」

トレイシーとは逆の意見を言って、ジョージは困ったような顔をして見せた。

「そうだろ？　アラモアナでその緑って子をピックアップする時に、顔を見られたのがまずかったよな。その前に何度もゴールデンに行ってたし。奴らは、誠がドラッグや売春紛いや、それに人死にが出てる事を緑から聞いたと思ってる。それを黙っていろって事なんだが、実際に口封じをするつもりはないと思いたいな、俺としては」

急に寒気がした。誠を囲んだ連中は素手だったから、第一の目的は痛めつける事だったに違いないが、アクシデントで誠が死んだとしても、それはそれで構わなかっただろう。

ほんの短時間だったから良かったものの、容赦ない蹴りを思い出して傷が疼いた。

「誠、休暇取って、日本に暫く帰るっていうのはどう？」

急にトレイシーの顔も青くなった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8422w/

シャワーツリーは唄う

2011年12月17日08時45分発行